Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

914.3
K53
KG73
G21
U0002144

34 1 19

36
文
914.3
Ka53-2
文学堂

金子元臣著

枕草子評釋

【增訂版】

東京　明治書院

序

現代の文藝を現代人の批評するには、評者も聽者も、すでに現代文化を會得したるが故に、こと更にそを絮說せずとも、正鵠を誤ること少かるべし。只それ過去の文藝に至りては、まづその時代の文化及びその思想に對する理解なくんば、いかでかその眞相を捉へ、その眞價を發揮し得べき。時代の背景を無視したる批評は、畢竟逝く水に數かくよりもはかなし。さはいへ歷史的批評、談何ぞ容易ならんや。完全なる文化史に乏くしてその時代の文藝を評せんとせば、まづ文化史その物より研究せざるべからざればなり。

清女が枕草子は古今の雄文にして、天下の奇書たり。その文

KG73 G21

國立國會圖書館 24.8.29

U 2144

章には一種の氣骨あり光采あれども、古文に練達したる者にあらざるよりは、容易に了解し難き所あり。且この草子の出現したる藤原氏の盛時は、社會の生活情態、今日と大なる相違あれば、記載の事實を完全に解釋せんことも、既に學者間の難事たり。況やこれに歴史的批評を加ふることをや。知友金子元臣君が學問に對する眞摯なる態度と、一種の俊味を具へたる文章とは、余の常に推服する所なり。然れども嘗て本書の評釋を物せらるると聞きし時、如何にして本書の多端なる疑義を解決し得べきかと危み、且これに文藝的批評以外に歴史的批評を加へんといふに至りては、餘りにその大膽なる試なるに驚きたりき。

頃日元臣君、その評釋の校正刷を示していはく、請ふ余が爲に序せよと。受けて讀むに、その解釋や丁寧親切、その考證や精緻透徹、さすがに君が平生の主張に背かざるに服せり。更に進みてその批評を見るに、清女が當時の史乘及び文學美術の作物を旁通博捜して、藤原氏盛時の社會組織より風俗習慣の末に至るまで、闡幽顯微、本書の記事をして悉く眼前に躍如たらしめたり。清女の面目遺憾なく表現し、本書の眞相こゝに始めて明なり。よりて知る、眞によく清女の心を知る者は、當年の情人たる行成にあらず、實方にあらず、はた則光にもあらずして、實に千歳の後に生れたる評釋の著者元臣君その人なることを。

要するにこの書は、單に枕草子のみの評釋といふこと勿れ。本書の内容は、かの源氏物語をはじめ、王朝文學の一切に渉れる背景なれば、本書を熟讀玩味せば、王朝文學の眞相は、照魔鏡のそれの如く、いかなる暗處も明に看破し得ることならんと信ず。嗚呼元臣君の態度は、文藝批評家の立場より躍進して、我等歴史家の領域に侵入したるものなり。しかも歴史家のいまだ開拓せざる文化史の方面において、椽大なる彩筆を揮はれたるは、我等の大に愉快として感謝する所なり。いかでか喜びて序せざるべき。

大正十年五月

萩野由之識

緒言

一、枕草子は、源氏物語と共に、わが邦文化の爛熟したる、藤原氏盛時の産物たる國寶的文字なり。只、これは、源氏物語が假作小說なると異なり、悉く事實に卽したる敍事と感想とを以て滿たされたる隨筆なれば、假にも曖昧模稜の言をつくるを許さず。わが古文辭中、最難解の書と稱せらる。加ふるに、その雜纂的文體は、所載の事件を豐富ならしめ、ます〳〵註者をして、その解決の煩瑣と困難とを感ぜしむ。隨つて、有名の國書にして、古來註書の寥々たること、本書の如きはなく、その杜撰孟浪を極めたることも、亦本書の如きはなし。これわが菲才ながらも、なほ發奮して、この評釋に筆をつけたる所以なり。

一、解釋は丁寧綿密、前人の誤謬を一掃し、遺漏を補足し、また頗る發見の說をなしたり。時に煩褥に涉ることあらんも、畢竟わが生來の老婆心切によるのみ。

一、批評は、わが心血を、殊に傾注したるものにて、本書の內容を、十分に紹介し知悉せしむるを以て、唯一の目的としたり。蓋し本書は、淸少納言の彤管を透して現れたるその時代の作物なれば、文意のみいかに解釋し得たりとすとも、筆者の精神に觸れず、背景たる時代を理解せずんば、痴人の夢を說くと、何ぞ擇ばん。玆において、一面には文章修辭の批評に注意を拂ひ、一面には藤原氏盛時の文化史を基礎として、社會風俗を說明し、時代思潮を紹介し、事相を闡明し、筆者の心證態度を品題して、讀者をして、筆者と同一の境地に在りて、身みづからその時に會ひ、その事に當る思ひ

あらしめんことを期したり。かゝる歷史的批判の方式は、全くわが國文界破天荒の試なれば、恰もわが先著「古今集評釋」が、國歌評釋の法門を啓きしが如く、將來この種の國文評釋の先驅を爲すものならんと信ず。

一、口譯は、一讀の下、文意を領得するに便利なること、また言を俟たず。君子幸に咎むる勿れ。

一、考異は、普通流布本(慶安板本、春曙抄本)を底本として、他の諸本を參酌したるも、成るべく文字を改易せざる方針を執りたり。異本を蒐集して、その解し易きに從はんことは、更にまた、別種の異本を製造するにとゞまり、却つて、原文の面目を沒了する恐あらん。

一、繪畫は、古文學研究の羽翼たるべきものなれば、附圖十數葉の

外に、必要に應じて、註釋中所在に挿入したり。著者としては尙不滿足なれど、あらゆる國文註釋書中においては、最も挿畫に富みたるものなるを斷言せんとす。

一、本評釋の補足として、卷首に「參考年表」「諸家系圖」を、卷尾に「註釋索引」を添へたり。

一、本書の表紙の意匠は、八六段の卯の花車の文により、卯の花、時鳥、網代車、および蕨を配したるにて、菊地猶喜畫伯の手に成れるものなり。またその色合は、當時の好尙を示さん爲に、わざと葡萄色を擇びたり。

一、なほ「枕草子概論」「淸少納言傳」「諸家文藻」あり。他日別册として刊行すべし。

大正十年四月

著者しるす

凡例

一 章段の分合は、諸本一定せず。底本としたる春曙抄本も亂雜なり。よりて內容の獨立、事實の聯絡を基礎として、これを諸本に勘へて、文段を定めたり。

一 註釋は、或は全段のまゝに、或は數節に分ちて施せり。要は文章の長短によるのみ。

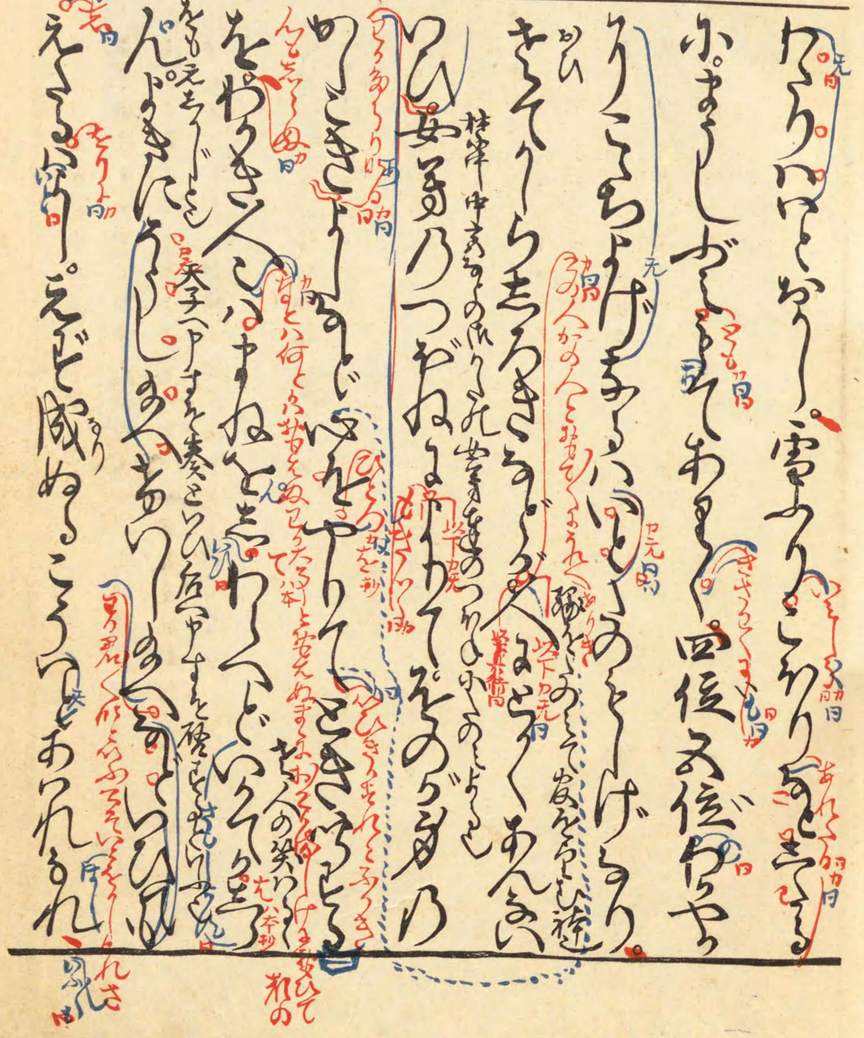
一 本文中、會話には、殊に「」を施して、地の文と區分し、第三者の談話の語は、更に『』を施して區分したり。又、地の文に、話者の明記なき場合は、これを細字に標記して、一見識別し易からしめたり。

一 本文の難解なるは、省筆の多きことも、その一因をなせり。釋中「何々の略」「何々を略けり」「何々を補ひて」などあるこれなり。以上の注意なきものも、○點を字旁に施したるは、悉く補足の語なりと知るべし。かくして、文意を完全に了解せしめんとせり。

一 同語の再出は、すべて初出の項に讓りて、一々解釋せず。故に、全然解釋のなきもの、或は簡略のものあらば、「註釋索引」によりて檢出のうへ、參看すべし。

一 評文中、歷史的批判に至りては、一字一句も來歷あらざるはなく、史實に發程せざるはなし。只煩を恐れて、一々引證に及ばざるを憾とす。

一 評文は文語による方、本文との調和よきやうなれど、讀者の印象を明確ならしめん



が爲に、わざと口語を用ゐたり。

一　評釋中、清少納言を呼ぶに、清少の語を用ゐたるは、慣稱によるのみ。又すべてに、敬語を缺きたること多し。煩を厭ひてなり。あへて敬意を忘れたるにはあらず。

一　口譯は逐字譯としたり。省略の字句は、文意を明確ならしむる程度において、これを補足したり。

一　考異に引用したる諸本の略稱は、左の如し。

光殿院宸翰本（群書類從所載）　光本　盤齋抄本
寛永活字本　活本　元臣藏本　抄本
清水濱臣校合所引の一本　一本　武藤元信著通釋所載本三種　元本
旁註本　旁本　古本、別本、堺本
四條前中納言藏本　四本　加藤諸平藏本　加本
鈴鹿連胤藏本　鈴本

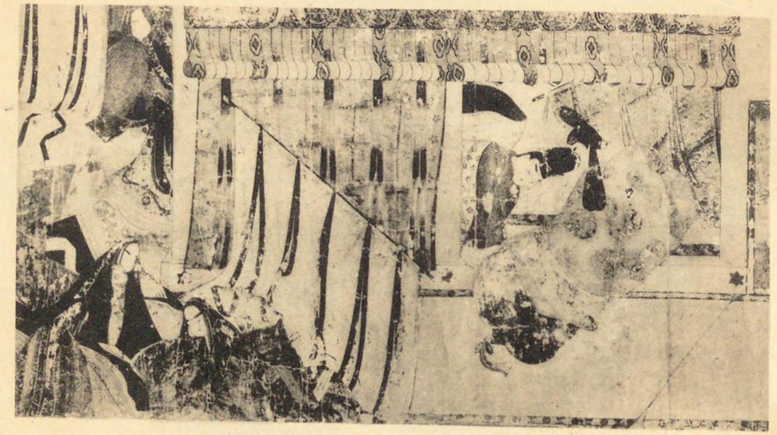
（四條本以下三種は、長澤伴雄、その自筆校本（架上）に對校したり。道巴本も長澤本には對校したれど、堺本は卽ち道巴本なる由、武藤氏の考あれば、別に標記せず。）

一　附圖中、裝束の部は、ことに後世の樣式に據れるが多けれど、事情やむを得ざるに出づ。反りて文中の挿畫の方に、その眞を求めらるゝことあるべし。

一　附圖及び挿畫も、一々參照の注意に及ばず。隨時、目次及び索引を利用して、檢出せんことを望む。

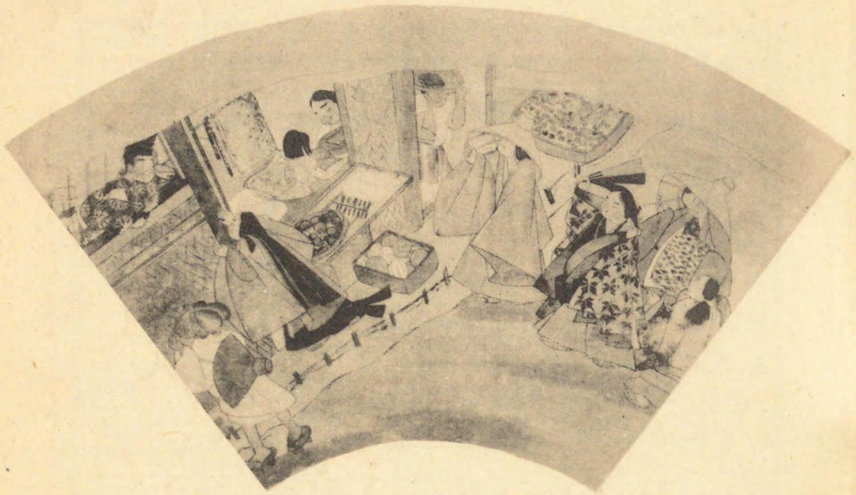
著者再識

枕草子繪卷雪山の圖（淺野侯爵家藏）



藤原氏時代貴紳の生活——室内（隆能源氏繪卷）

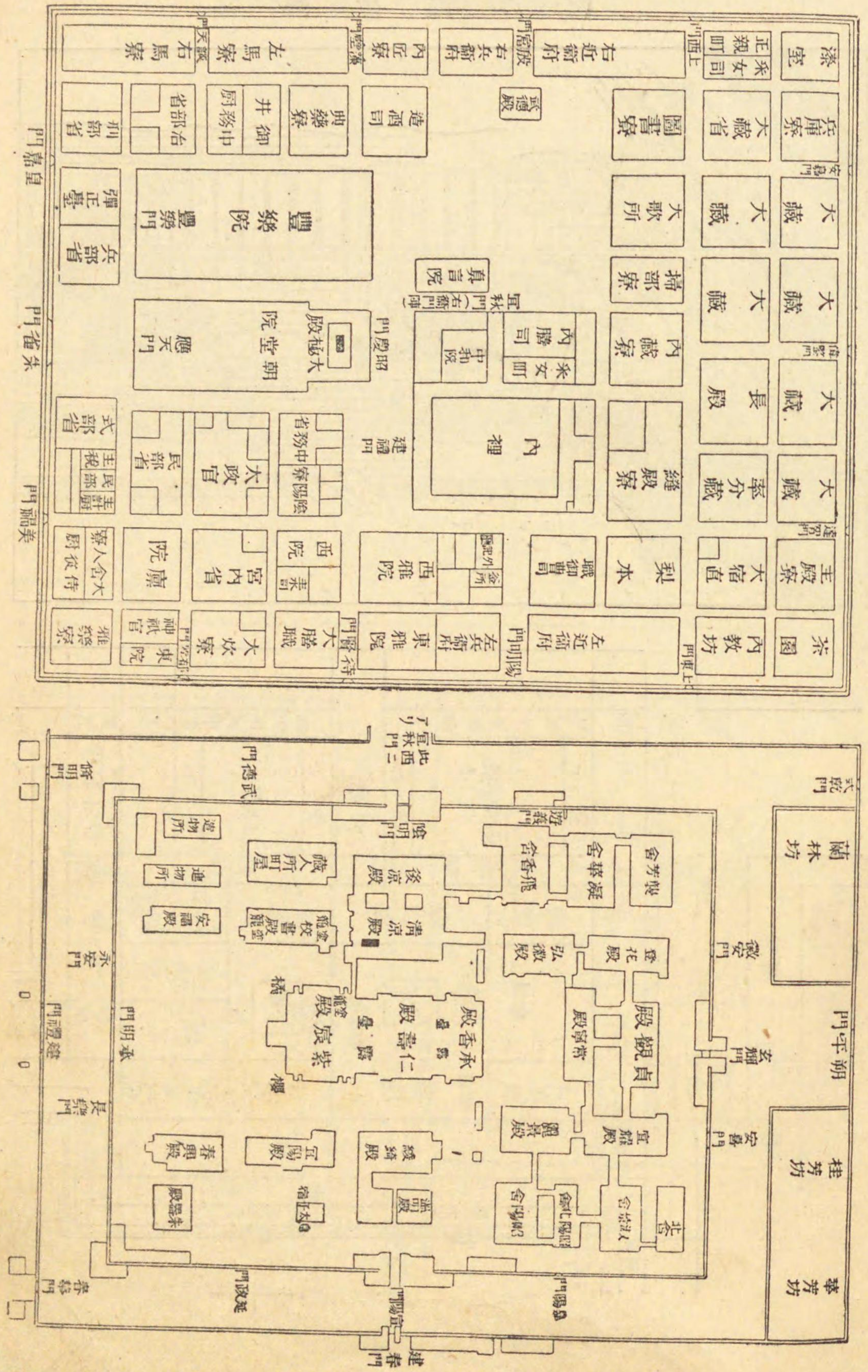
藤原氏時代貴紳の生活——室外（隆能源氏繪卷）



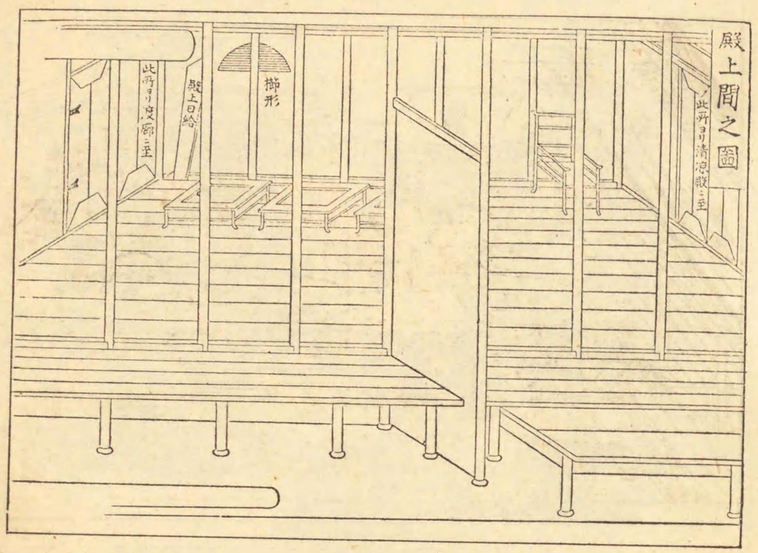
市廛の圖（扇面寫經）

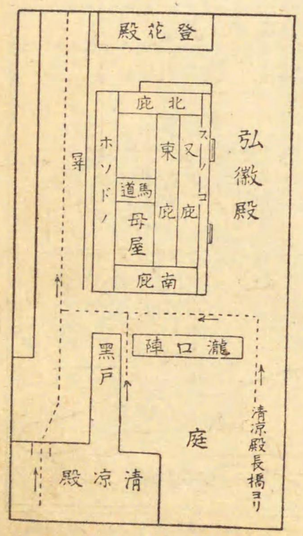
里社遊宴の圖（年中行事繪卷）

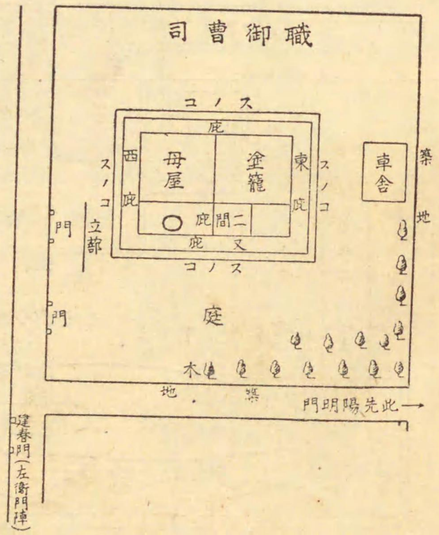
宮城及び禁中の圖


朱雀門
皇嘉門
豐樂院
朝堂院
大極殿
應天門
內裏
大藏
縫殿寮
圖書寮
大歌所
中務省
太政官
民部省
式部省
兵部省
宮內省
刑部省
典藥寮
造酒司
左近衛府
右近衛府
內教坊
主殿寮
大炊寮
西雅院
東雅院
紫宸殿
仁壽殿
承香殿
貞觀殿
淸涼殿
朔平門
建禮門
蘭林坊
桂芳坊
華芳坊

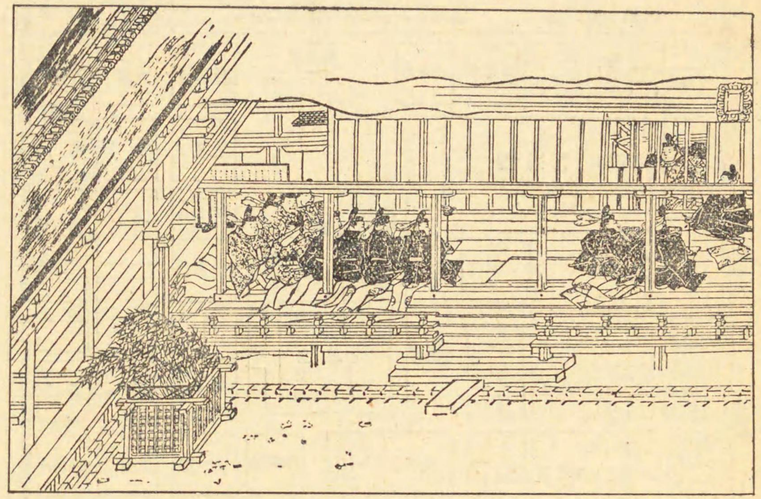
殿上の間・職御曹司・弘徽殿の圖

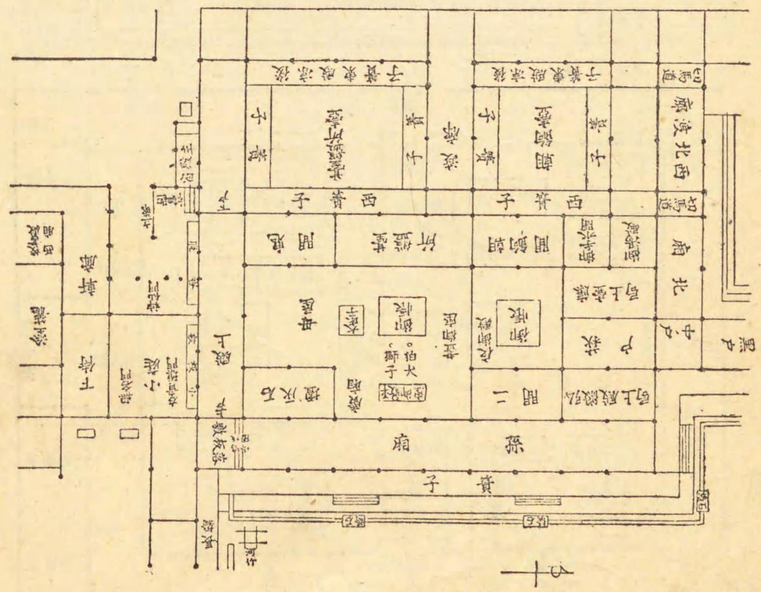






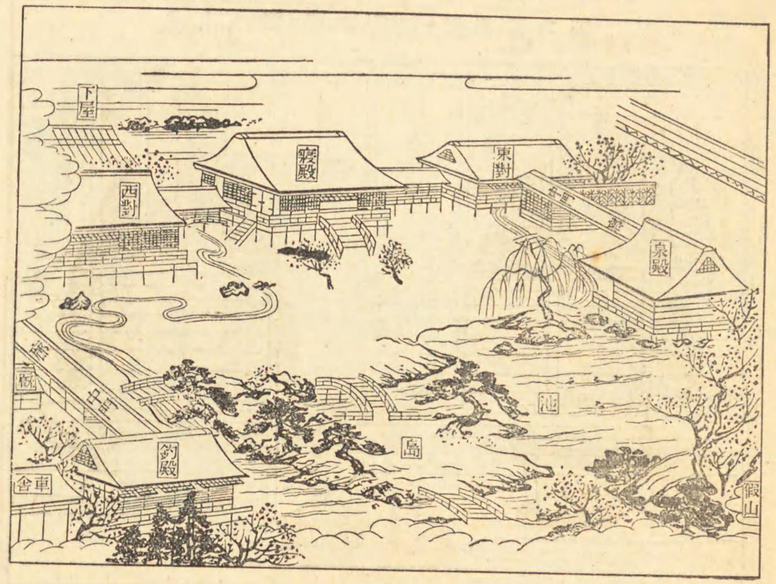
清涼殿の圖

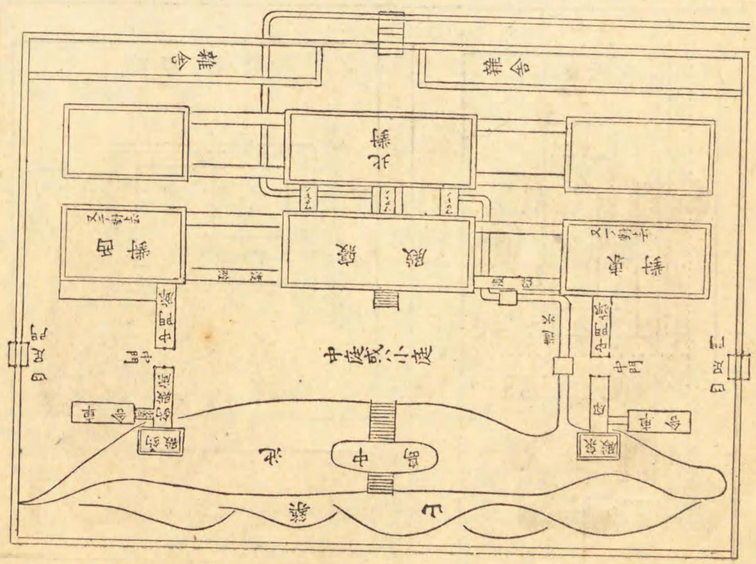




男女裝束の圖（其の一）

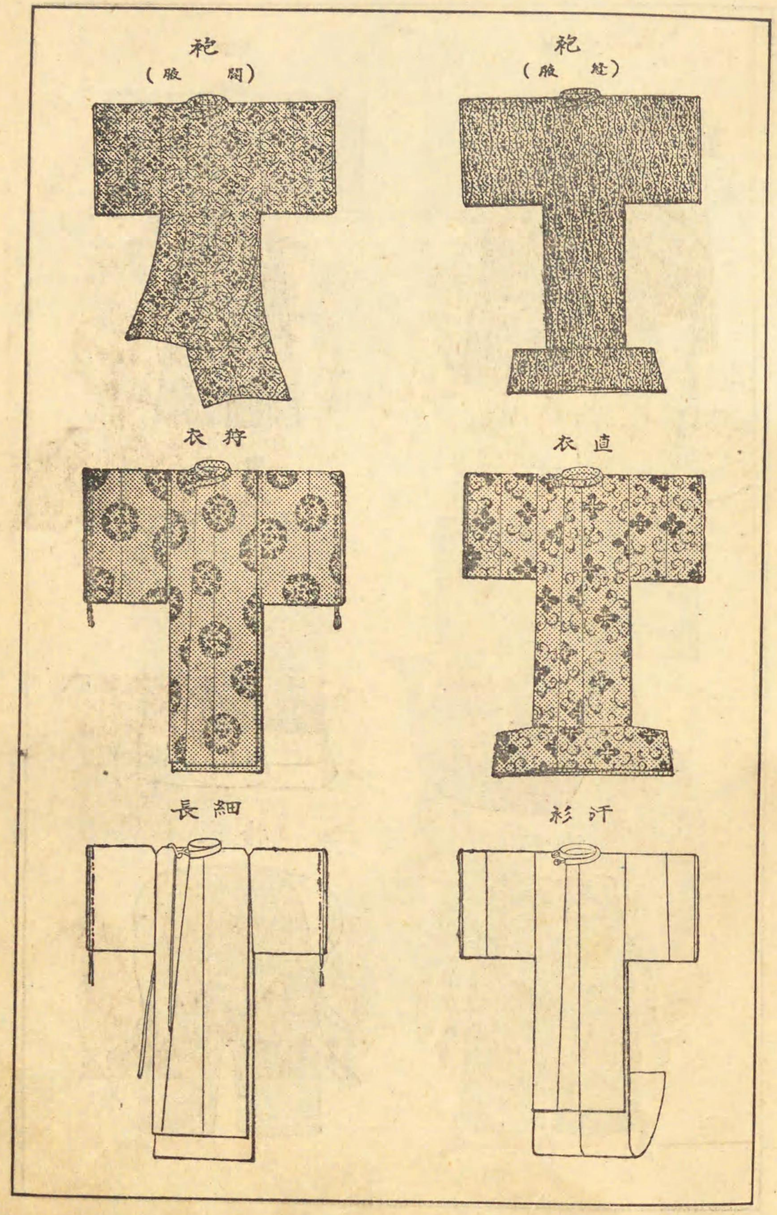
寢殿造の圖

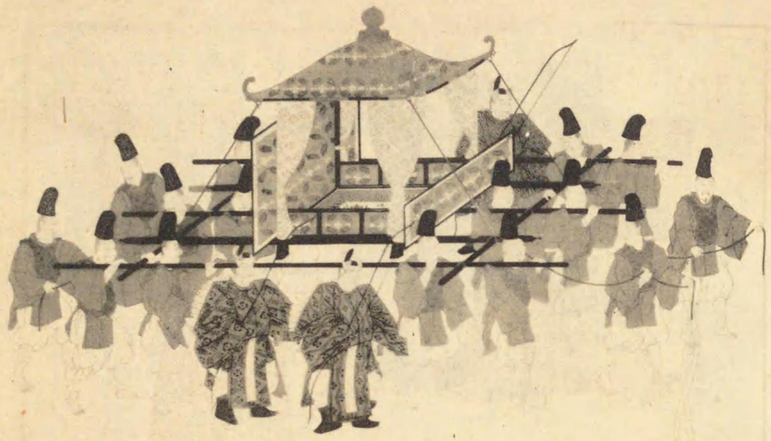




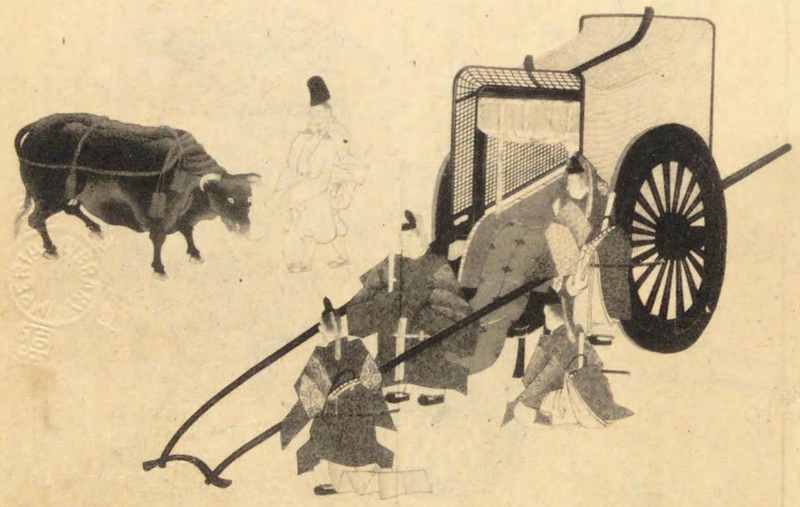
男女裝束の圖（其の二）

男女裝束の圖（其の三）



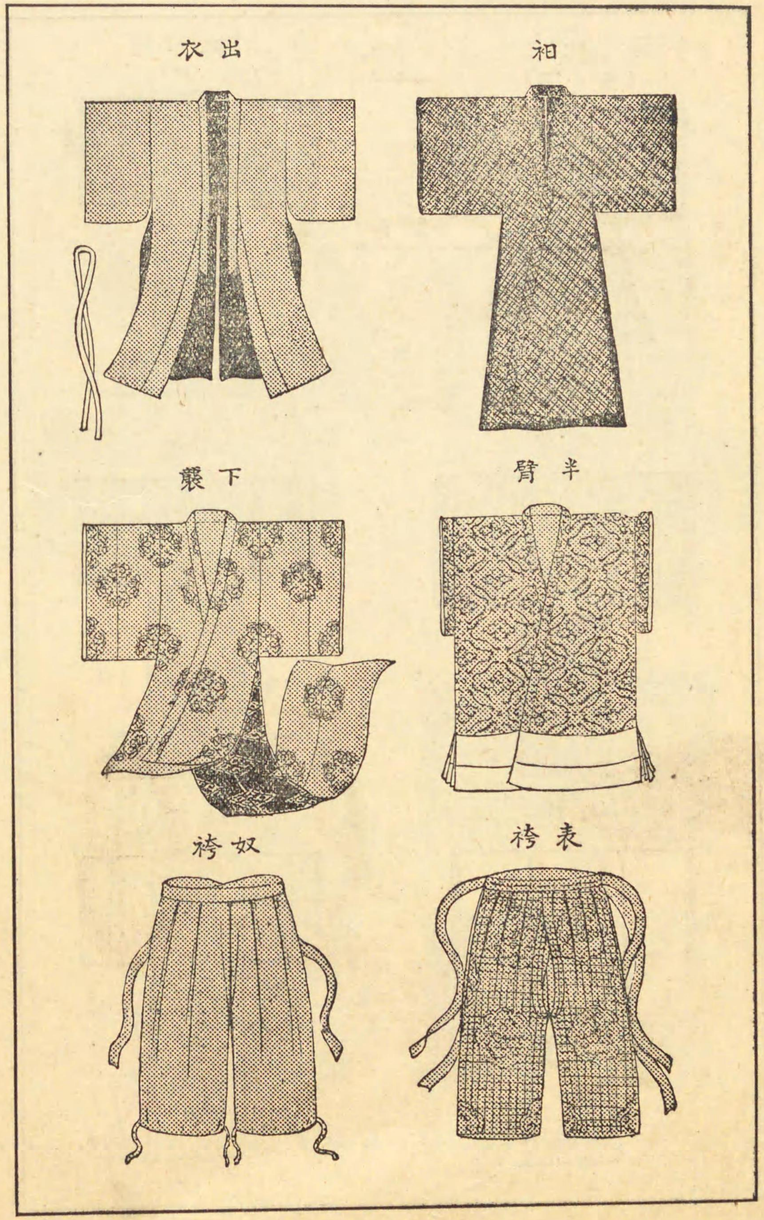


葱花輦の圖



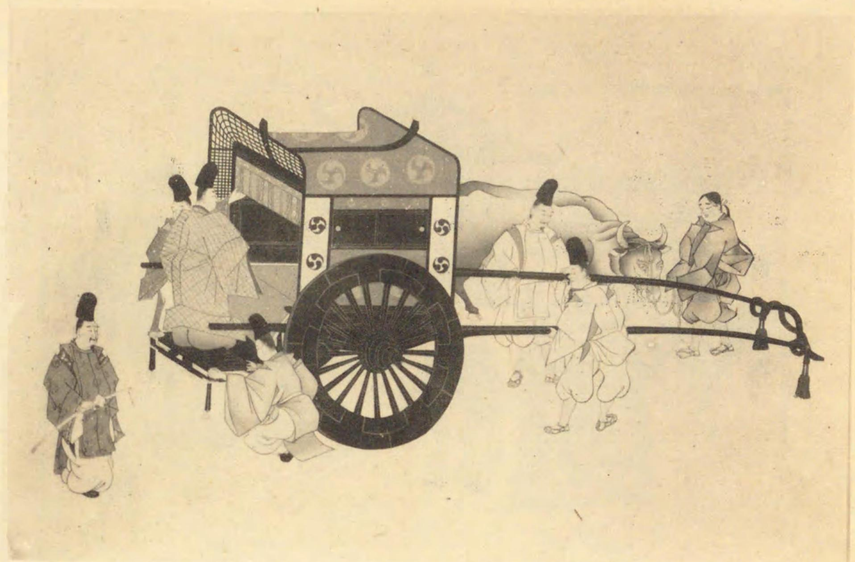
檳榔毛車の圖

男女裝束の圖（其の四）

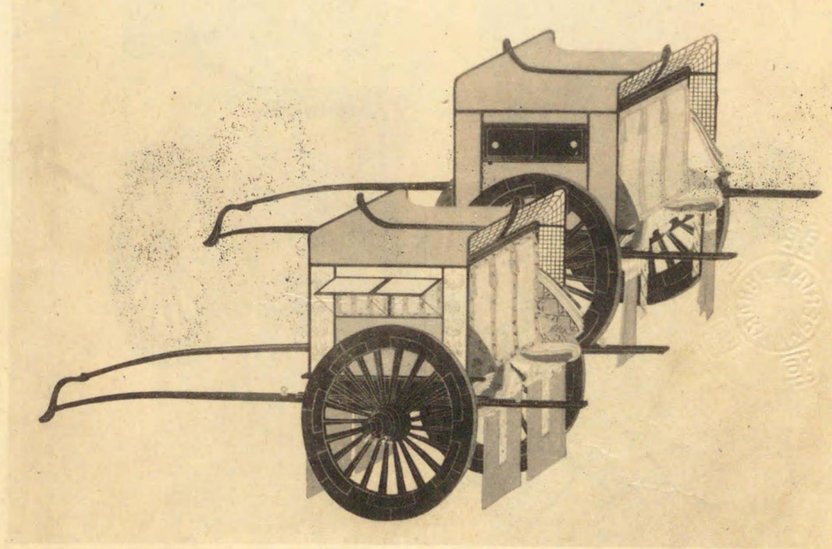


枕草子參考年表

年號	帝后	敍任移動	社會事項	枕草子の文
寛和二年 六	○十三日花山帝遜位 ○一條帝踐祚	○兼家攝政○爲光右大臣○太政大臣頼忠罷 關白○中納言義懷出家		○(小白河といふ所)
七	○母懐詮子爲皇太后	○道隆從二位權大納言○公季權中納言○伊周昇殿		
八			○齋然歸朝	
十	○圓融院遊幸大井河、攝政兼家以下扈從	○道兼權中納言		
十二	○帝幸圓融院			
永延 二	○圓融院幸紫野催子日宴		○禁兵仗○贈良源慈惠大師	
三			○攝政兼家詣春日社	
四			○改元	
五	○圓融院八講		○祈雨	
七		○道隆兼左大將	○兼家移新造東三條第 ○大風雨	



網代車の圖



女房車出衣の圖

元年			永延二年						
八	九	十	十一	十二	一	二	三	六	七	九	十	二
○伊周左近少將○兼明親王薨	○伊周藏人	○圓融院幸奈良巡禮諸寺	○帝幸詣石清水社	○帝詣賀茂社	○伊周從四位下聽禁色○保光中納言○道長權中納言	○僧侶使宋	○兼家六十賀算	○權中納言顯光家强盜保輔籠居自害	○禁奢侈	○兼家新造二條京極第有興宴、賴光引馬卅匹、河陽遊女等群集	○圓融院幸台山受戒、又幸兼家之二條第	○帝幸圓融院
			○仰檢非違使制止不用錢貨事			○兼家詣賀茂社						

○帝於常寧殿賀兼家六十算

○道隆內大臣兼左大將○道兼權大納言○伊周權中納言

永祚元年								正曆元				
三	四	六	七	八	九	十	十二	一	五	七	八	九
○圓融院幸東寺○帝幸春日社			○帝出御南殿見相撲					○帝元服○道隆女定子爲女御				
	○伊周右中辨	○賴忠薨					○兼家太政大臣		○兼家辭攝政關白、○道隆關白又攝政○道賴季議左中將	○兼家薨○伊周右近中將		○伊周藏人頭
		○兼家上台山		○改元、依彗星天變地異○大風洪水	○大僧都餘慶天台座主	○寬朝創遍照寺○台山僧徒辱勅使		○資子內親王爲大后入講	○兼家入道○兼家以二條第爲積善寺		○大風洪水	

年			
十	○改選子中宮爲皇后、女御定子爲中宮		
十一		○改元、依大風天變	
十二		○大后入講○僧都遥賀台山座主○平兼盛卒	△(宮にはじめて)

正曆二年			
一	○閑融院崩	○餘慶入滅	
六		○齋然弟子・奉迎唐佛入洛○祈雨	
七	○道隆辭內大臣○成忠從二位○伊周從三位		
九	○皇太后爲尼號東三條院		
十	○東三條院詣長谷		
十一	○左大將濟時女娀子入東宮(宣耀殿女御)		
十二			

正曆			
二	○東三條院詣石山寺		○(閑融院の御果の年)
三			○(三月ばかり)
四	○帝幸東三條院御座所道長之上東門第	○道隆詣賀茂社	
五		○東西京洪水	

年			
六		○爲光薨	
八		○伊周權大納言○時中權中納言	△(大納言殿參り給ひ)
十	○帝覽臨時樂		○道隆於法興院法花經供養○成忠出家
十一	○中宮出內裏遷二條院		○源忠良梟海賊
十二	○帝詣平野社○中宮自攝政南院第參內	○伊周正三位○公任參議○隆家左中將	○道隆四十賀算

正曆四年			
二	○帝幸東三條院管絃	○惟仲參議	
三			○道隆罷攝政爲關白
四		○贈道眞左大臣	△(關白殿の黑戸より)
五			
六	○帝內覽文官奏		○人民悉咳疫
七		○左大臣雅信薨	
八			○大紋、依鏧濟○台山兩門徒合戰
十	(閏)	○贈道眞太政大臣	

年	月				
正暦五年	十二	○帝詣大原野社			○(佛名のあした)
	一	○帝幸東三條院			
	二	○中宮東三條院詣積善寺		○弘徽殿飛香舍放火○道隆供養積善寺	○(關白殿二月廿日の程)
	三			○大赦、依白鳥怪異疾疫○召武人捜盜	○(清涼殿の丑寅の隅)
	五	○東宮女御娍子生敦明		○大赦依疫	
	六			○祈雨○公卿以下庶民閉門戶、依妖言○爲疫神作神輿送難波海	
	七			○大風	
	九		○重信左大臣○道兼右大臣○伊周內大臣○隆家從三位○道頼權大納言○懷忠權中納言	○霖雨	
	十			○地震	
	十一		○隆圓僧都		
	十二			○日蝕○諸國盜起○疫癘大流行	
長	一	○道隆二女原子入東宮(淑景舍女御)號內御匣殿		○伊周二條第火	

年	月				
徳元年	二	○東三條院詣石山寺		○改元大赦	○(淑景舍東宮に參り給ふ)○(頭の辨のもとより)○(頭中將のそゞろなるそら事を)
	三		○伊周父關白病間內覽○大納言朝光薨		
	四	○中宮、東宮女御行啓道隆之第○中宮參登花殿	○道隆薨○隆家權中納言○道兼關白○濟時薨	○花山院覽賀茂祭	
	五	○中宮居職曹司	○道兼、重信、保光、伊涉薨○道長奉行太政官事		○(五月の御さうじの程)
	六		○時中隆家中納言○顯光大納言○道頼薨	○四五月疫癘殊盛、中納言以上薨者八人、四位五位六十一人	○(故殿の御服の頃)
	七	○中宮大內	○道長右大臣		
	八		○實資權中納言○俊賢參議		
	九		○實方陸奧守、於殿上有餞宴	○僧覺信火定	○(故殿の御爲に)
	十	○中宮遷職曹司依石清水行幸間○中宮御讀經結願參梅壺○帝詣石淸水社			○(八幡の行幸の歸らせ給ふ)
	十二				△(左中將のいまだ)
長	一	○帝幸東三條院		○伊周隆家射花山院於故爲光家	
	二	○中宮自梅壺遷職曹司○東三條院修法花講			○(かへる年の二月廿五日に)
	三	○中宮自職曹司出御二條宮、依有身		○大赦、依東三條院不豫	○(宰相中將齊信宣方中將と)

長	四		
	三		
	一	○帝幸東三條院	
德二年	十二	○中宮生皇女修子	
	十一	○右大臣顯光女元子入宮（承香殿女御）	
	十		
	九	○道長賜本府隨身	
	八		
	七	○大納言公季女義子入宮（閑弘徽殿女御）	
	七	○道長左大臣○顯光右大臣○時中大納言○實資中納言○惟仲權中納言	
	六	○二條宮火、中宮避亮高階明順宅、既徙中納言惟仲宅	
	五	○中宮落飾	
	四	○道綱中納言○齊信參議○貶內大臣伊周大宰權帥、中納言隆家出雲權守	
		○伊周修大元法	△（中納言殿參らせ）△（無名といふ琵琶）
		○伊周隆家匿中宮御所遂被捕	
		○大地震	
		○大風、鴨川溢	
			○（故殿などおはしまさで）
		○伊周密歸京	
		○高內侍卒○隆家歸京○伊周追下太宰府	
		○今年米價高貴京師頗有火	
		○大赦、依東三條院不豫、伊周隆家召還	
		○伊周千日精進○三月來强盜多	

德三年	五	○中宮携皇女參職曹司次遷梅壺	
	六	帝幸東三條院	
	七		○公季內大臣○道綱大納言○懷忠權大納言○時光中納言
	八	○東三條院詣石山寺	
	十		○南蠻人亂入大宰府管內討獲之
	十一	○修子爲內親王	
長德四	一	○帝幸圓教寺	○惟仲中納言
	二	○故道兼女尊子入宮（暗部屋女御）○中宮遷職曹司	
	三		
	四		
	六		
	七		○從二位成忠薨○佐理薨
	八		
		○日蝕○大地震	
		○於清涼殿御讀經	
		○道長詣賀茂社	
			○（弘徽殿とは）○（頭の辨の職にまゐり）
			○（職の御曹司の四表の）
		○松尾祭雜人合戰放火民家	
		○鹿爲狼被追入中院○寬朝入滅	
		○大赦二回、依天皇及東三條院不豫	
		○大風	○（職の御曹司におはしますす頃木立など）

年			
長保 十		○隆家兵部卿	
十二	○東三條院八講	○日蝕○大地震	
		○(職の御曹司におはします頃、雪山のこと)○夏冬之間赤斑瘡流行死者甚多	○(小一條の院をば)
元年 一		○改元大赦	△(さてその左衛門の陣に)あはれなるもの
二		○道長詣春日社	○(二月晦日風いたく)○(里にまかでたるに)
三	○帝幸東三條院		
五			○(五月ばかりに)
六	○帝依內裏燒亡遷御一條院	○內裏火	△(鳥は)
七	○帝渡御北對	○定造宮國々行事	
八	○中宮有身就大進生昌家、修子內親王隨之	○大宰府南蠻人追討	○(大進生昌の家に)
九		○內裏猫產子	○(上に侍ふ御猫は)
十一	○道長女彰子入宮(藤壺)○中宮生皇子敦康		
十二	○太皇大后昌子崩		
一	○帝覽白馬	○雪降二尺	

年			
長保 二	○定子中宮爲皇后、彰子女御爲中宮○皇后入內		
三	○東三條院詣石清水天王寺住吉社遊女於淀川群參○皇后出生昌宅		
四	○敦康爲親王○中宮入內	○道長第侍臣競馬○仁康法師移大佛祇陀林寺	
五	◎東三條院八講	○祈雨○道長八講○大赦依東三條院不豫	○(三條の宮におはします頃)
六		○大神社鳴動○大雨	
七	○中宮自道長宅移亮則忠宅	○免諸國半租、依造宮	
八	○皇后自生昌宅入內、次還本宮	○洪水	○(今內裏の東をば)△(成信中將は)
九		○承香殿上置小兒死體	
十	○帝自一條院還御新造內裏		
十二	皇后生皇女媓子、次崩(廿五)		
長保三四五年			

諸家系譜

（大字はこの草子中に現れたる人物なり又○を附したるはこの草子中の稱呼なり）

○帝王

- ○桓武
  - 伊登内親王（業平の母の宮）
    - 冷泉
      - 致平（入道兵部卿宮）（系別出）
      - 爲平（染殿式部卿宮）（系別出）
      - 爲尊
      - 敦道（師宮）
      - 三條（春宮）
      - 花山

○村上

- 選子（齊院）
- 圓融
  - 一條（諱懐仁、うへ）（母兼家女詮子）
    - 後一條
    - 敦康（今上一の宮）
    - 修子（姫宮）

○藤原氏（一）

- ○基經
  - 昭宣公
    - 時平（本院左大臣）
      - 顯忠（富小路右大臣）
        - 重輔
          - 女子（宰相の君）（中宮女房）
            - 致貞
              - 致孝

寛弘元年	長和二年
△（めでたきもの）	△（したり顔なるもの）

○備考

本文の欄中△を附したる項は、その年時確定を缺くものなれども、ほゞその條に係くるを至當とするものなり。

- 實賴 清愼公
  - 佐理 宰相
  - 敦敏
  - 賴忠 廉義公
    - 公任 宰相、按察大納言
      - 遼子 圓融后
    - 齊敏
      - 高遠 大宰大貳
        - 實資 右大臣
  - 師輔 九條右大臣
    - 伊尹 謙德公
      - 舉賢
        - 行成 兵衛佐、頭辨侍從大納言
      - 義孝
      - 義懷 權中納言、中納言
    - 兼通 忠義公
      - 顯光 左大臣
      - 朝光 大納言
      - 正光 大藏卿
      - 媄子 圓融后
    - 兼家（系別出）
    - 忠君
      - 遠度
        - 宰相君
    - 爲光 恒德公、藤大納言
      - 誠信
    - 公季 仁義公、閑院左大將
      - 齊信 頭中將、宰相中將、大納言
    - 定時
    - 實方 兵衛佐、中將
    - 濟時 小一條左大將
    - 長命 侍從
  - 師尹 小一條左大臣
- 忠平 貞信公

- 忠君 右兵衛督（實ハ兼家ノ弟）
  - 公信 藤侍從（齊信養子）
  - 女子 義懷室
  - 恬子 弘徽殿（花山女御）
  - 女子 伊周室
  - 女子 花山妾
  - 實成 左兵衛督
  - 義子 弘徽殿（一條女御）
  - 安子 大ざさいの宮（村上后）
  - 繁子 藤三位、道兼室、のち惟仲室
  - 女子 中納言の君（中宮女房）
- 芳子 宣耀殿（村上女御）
- 娍子 宣耀殿（三條后）

○藤原氏（二）

- ○兼家 攝政太政大臣、法興院關白
  - 道隆 三位中將、關白殿、只今の關白、殿、故殿、中の關白
    - 道頼 太郎大千代君、山の井大納言
    - 伊周 次郎小千代君、權大納言殿、大納言殿、內大臣、權帥、準大臣、母高內侍（成忠女）
    - 隆家 三郎、三位中將、中納言、兵部卿、母同
    - 隆圓 僧都の君、大僧都、母同
  - 道綱 右大將
    - 道命 阿闍梨
    - 道雅 松君、小若君、左京大夫、

○藤原氏（三）

- ○爲輔　右大臣定方孫
  - 惟孝
    - 說孝　藏人
      - 宣孝　右衞門佐　紫式部ノ夫
        - 隆光　主殿助
      - 賴親　內藏頭、左中將
      - 周賴　少將
      - 周家　兵部大輔
      - 好親　井手少將
      - 定子　大姫君、宮、中宮、（一條皇后）今上一の宮（敦康）御母　母同伊周
      - 原子　中の姫君、淑景舍（三條女御）　母同
      - 女子　三の方、御匣殿　母同
      - 女子　四の方、御匣殿、敦康母代
      - 女子　五の方
      - 某
      - 女子
  - 道兼　粟田關白
  - 道長　中宮大夫、宮の大夫、左の大い殿　御堂關白
    - 詮子　圓融女御、女院　東三條院
      - 賴通　關白
      - 教通　關白
      - 彰子　上東門院

- ○元方　大納言
  - 致忠　保昌　大和守　和泉式部ノ夫
  - 懷忠
    - 輔尹　木工允、大和守　藏人
      - 信經　式部丞、越後守　作物所別當
- ○兼輔　堤中納言
  - 雅正　爲長
- ○時柄　藏人、作物所別當
  - ○實房　式部丞
- ○倫寧
  - 女　小野殿の母上（道綱の母）

○源氏系圖

- ○宇多天皇
  - 醍醐天皇
    - 代明親王
      - 重光
        - 則理　式部丞
          - 女子　伊周室
    - 高明　西宮左大臣
      - 俊賢　宰相、大納言
      - 經房　少將、源少將、左中將、中納言權帥　道長猶子
      - 明子　高松の上、道長室
  - 敦實親王
    - 雅信　左大臣
      - 時仲　大納言
        - 濟政　少將
      - 濟信　仁和寺僧正
      - 倫子　鷹司殿　道長室
      - 女子　致平親王室　成信母
    - 寬朝　にわじ僧正

- 重信 左大臣
  - 道方 少納言
  - 宣方 右衛門佐、中將 源中將
    - 女子 隆家室
- ○致平親王……
  - 成信 權中將、中將、大い殿の新中將 道長養子
- ○爲平親王
  - 賴定 宮中將 新中將
- ○經基 清和二代ノ孫
  - 滿仲
    - 滿政
      - 忠隆 藏人、式部丞 駿河守
- ○時明
  - 方弘 藏人、阿波守
- ○信孝 鎭守府將軍
  - 兼澄 加賀介
- ○兼資 文德五代ノ孫 伊豫守
  - 女子 伊周室
  - 女子 成信室

○高階氏

- ○師尙 右中將（業平ノ子ト云）
  - 良臣
    - 成忠 一條侍讀 從二位
      - 信順 右中辨
      - 明順 左中辨
      - 道順 木工頭
      - 積善 左少辨
      - 淸昭 法橋
      - 貴子 うへ、殿のうへ、內侍、道隆室
      - 女 大江爲基室 その御おとうと
  - 業遠 春宮亮
  - 敏忠

○平氏

- ○珍材 美作守 桓武五代之孫
  - 惟仲 左大辨、中宮大夫、中納言、
    - 生昌 中宮大進、但馬守

○橘氏

- ○敏政
  - 則光 修理亮、左衞門尉、遠江介、播摩守
  - 則隆 藏人 陸奥守 中宮亮

○婦人

○丹波氏

- ○重雅 曲藥頭

馬典侍 上女房 右馬權頭時明ノ女
宰相の君 富小路右大臣ノ孫 中宮女房（系前出）
中納言の君 中宮女房（系前出）
少納言命婦 中宮女房
左京の君 中宮女房
小左近 中宮女房
侍從 春宮女房
ぶぜん 采女
相尹の馬頭の女 少將の君ノ妹 五節舞姫

兵衞藏人 村上の御時の女房
右近内侍 上女房 右少將藤原季綱ノ女
宰相の君 北野三位の女 中宮女房（系前出）
新中納言 中宮女房
少將の君 すけまさの馬頭ノ女 淑景舍女房
右京 中宮女房
兵部 中宮女房
左京 弘徽殿義子下仕 うち伏ノ女
右衞門 女房か

○僧尼

にわじの僧正 寛朝（系前出）
定證 僧都、山階寺別當 法相宗の僧
清範 律師 法相宗の僧
常陸の介 乞食尼

○姓氏不明

大辨 藤大納言 左中將 三位の君 藏人辨 むねたか 式部丞某 右衞門尉
ゐぬたぎ 村上皇の后下仕
馬命婦 上女房 猫乳母
辨内侍 又辨おもと 中宮女房
源少納言 中宮女房
式部のおもと 中宮女房
小兵衞 中宮女房
命婦の乳母 又御乳母の大夫の命婦 中宮女房
みあれ宣旨 齋院女房
僧都の君の御乳母のまゝ

訂正版題言

私は鷄主義で、家鴨主義は嫌ひだ。家鴨は產み放しである。鷄は產む、孵へす、羽ぐくむ。その親子の情愛は見る目もいとしい。

私は自分の著作に對して、人並以上の愛著をもつてゐる。それは悉く自分のある限の精根の變成、心血の結晶と思ふと、わが子のやうな氣がし、時にはそれ以上にわが分身とさへ思ふ。

この枕草子評釋が大正十年六月にその呱々の聲を揚げてから、殆ど二十年に近い。幸に學界の絕對賞賛を博し、學徒必携の書となつてゐる。

されど私は神でも佛でもない。意外の錯誤や、脫漏や、校正の不備は、隨處に發見される。これらの疵病を一掃して健康體たらしめることは、亦產みの親たる私の責任だ。

これまで重版の折毎に多少は訂正して來たが、今度は思ひ切り根治的大手術を施すことにした。組直し鉛版の切換へ等、無慮數百箇處に及ぶ訂正の煩瑣さは一通りでないが、この點は發行書肆の誠意と、從業の人達の勞苦に深く感謝する。

あゝ鷄主義、私のこの主義が玆に大いなる飛躍をなし得た滿足を、聲高に世間に告白する。

昭和十四年六月十日

著者しるす

枕草子評釋目次

一段　春は曙……一
二段　頃は△……六
三段　正月一日は……七
七日は……一一
八日……一二
十五日は……一三
除目のほど……一七
三月三日は……二〇
祭の頃は……二三
四段　こと〳〵なるもの△……二八
五段　思はむ子を……二九
六段　大進生昌が家に……三三
姫宮の御方の……四四
中間なる折……四七
七段　うへにさぶらふ御猫……五〇
八段　正月一日三月三日は……六四
九段　よろこび奏する……六七
一〇段　今内裏の東をば……六八
一一段　山は△……七一
一二段　峯は△……七六
一三段　原は△……七六
一四段　市は△……七七
一五段　淵は△……七九
一六段　海は△……八〇
一七段　わたりは△……八一
一八段　みさゝぎは△……八二
一九段　家は△……八三
二〇段　清涼殿の長の隅の△……八四
二一段　すさまじきもの△……二一
二二段　たゆまるゝもの△……二九
二三段　人にあなづらるゝもの△……三〇
二四段　にくきもの(上)△……三一
にくきもの(下)……二四四
二五段　小一條院をば……二五六

二六段　心ときめきするもの△……二六一
二七段　すぎにし方戀しきもの△……二六三
二八段　こゝろゆくもの△……二六四
二九段・檳榔毛は……二六八
三〇段　說經師は……二七一
たふとき事……二七三
そこに說經しつ……二八一
三一段　菩提といふ寺に……二八四
三二段　小白河といふ所は……二八六
三三段　七月ばかり……二〇六
三四段　木の花は△……二一五
三五段　池は△……二二三
三六段　せちは△……二二六
三七段　木は△……二二三
三八段　鳥は△……二四三
三九段　あてなるもの△……二五一
四〇段　蟲は△……二五三
四一段　七月ばかりに……二五七
四二段　にけなきもの△……二五七
四三段　細殿に……二六三
月夜にむな車……二六四
四四段　主殿司こそ……二六五
四五段　職の御曹司の西おもて……二六七
四六段　殿上の名だいめん……二六二
四七段　若くてよろしき男の……二八七
四八段　若き人とちごは……二九一
四九段　人の家の前を……二九三
五〇段　瀧は△……二九七
五一段　川は△……二九八
五二段　橋は△……三〇一
五三段　里は△……三〇二
五四段　草は△……三〇四
五五段　集は△……三〇九
五六段　歌の題は△……三一〇
五七段　草の花は△……三一〇
五八段　おぼつかなきもの△……三一八

五九段　たとしへなきもの△……三二〇
六〇段　忍びたる處にては……三二一
六一段　戀想人にてきたるは……三二三
六二段　ありがたきもの△……三二六
六三段　うちの局は……三二九
六四段　職の御曹司におはします頃木立など……三四〇
六五段　あぢきなきもの△……三四五
六六段　いとほしげなるもの△……三四七
六七段　心ちよけなるもの△……三四八
六八段　とりもてるもの△……三四九
六九段　御佛名のあした……三五〇
七〇段　頭中將の……三五五
七一段　かへる年の……三七七
七二段　里にまかでたるに……三九三
七三段　物の哀しらせ顔なるもの△……四〇三
七四段　さてその左衞門の陣に……四〇三
七五段　職の御曹司におはします頃西の廂に……四〇六
七六段　めでたきもの△……四三八
七七段　なまめかしきもの△……四五〇
七八段　宮の五節いださせ給ふに……四五七
七九段　無名といふ琵琶の御琴を……四七七
八〇段　上の御局のみすの前にて……四八一
八一段　御めのとの大輔の……四八四
八二段　ねたきもの△……四八六
八三段　かたはら痛きもの△……四九三
八四段　あさましきもの△……四九五
八五段　くちをしきもの△……四九七
八六段　五月の御さうじの程……五〇〇
八七段　御かたゝ……五二七
八八段　中納言殿參らせ給ひて……五三〇
八九段　雨のうちはへ降る頃……五三三
九〇段　淑景舍春宮にまゐり給ふ……五三九
九一段　殿上より……五六四
九二段　二月のつごもり……五六六
九三段　はるかなるもの△……五七〇
九四段　方弘は……五七二

九五段　關は△……五七八
九六段　森は△……五八〇
○九七段　卯月のつごもりに……五八二
九八段　湯は△……五八四
九九段　常よりも殊に聞ゆるもの△……五八五
一〇〇段　繪にかきて劣るもの△……五八五
一〇一段　かきまさりするもの△……五八六
一〇二段　あはれなるもの△……五八七
一〇三段　正月に寺に籠りたるは……五九三
（心づきなきもの）……六一三
一〇四段　わびしげに見ゆるもの△……六一三
一〇五段　あつげなるもの△……六一五
一〇六段　はづかしきもの△……六一七
一〇七段　むとくなるもの△……六二一
一〇八段　修法は……六二五
一〇九段　はしたなきもの△……六二六
八幡の行幸の……六二六
一一〇段　關白殿の黑戸より……六三一
○一一一段　九月ばかり……六三七
一一二段　七日の若菜を……六三八
一一三段　二月官のつかさに……六四〇
一一四段　頭の辨の御許よりとて……六四二
一一五段　などてつかさ得始めたる……六四八
一一六段　故殿の御ために……六五二
わざと呼びもいで……六五四
一一七段　頭の辨の職に……六五八
○一一八段　五月ばかりに……六六六
一一九段　圓融院の御はての年……六七二
一二〇段　つれ〴〵なるもの△……六八〇
一二一段　つれ〴〵慰むるもの△……六八一
一二二段　取りどころなきもの△……六八二
一二三段　なほ世にめでたきもの△……六八四
臨時の祭の……六八四
庭火の煙の……六九〇
八幡の臨時祭の……六九一
○一二四段　故殿などおはしまさで……六九七

○一二五段　正月十日……七一〇
一二六段　清げなるをのこの……七一三
碁をやむごとなき人の……七一三
一二七段　おそろしきもの△……七一五
一二八段　きよしと見ゆるもの△……七一六
一二九段　きたなげなるもの△……七一七
一三〇段　いやしげなるもの△……七一八
一三一段　むねつぶるゝもの△……七二〇
○一三二段　うつくしきもの△……七二三
一三三段　人ばへするもの△……七二六
一三四段　名おそろしきもの△……七二八
一三五段　見るにことなる事なきものゝ文字に書き
て事々しきもの△……七三〇
一三六段　むつかしげなるもの△……七三一
一三七段　えせものの所うるをりのこと△……七三三
一三八段　苦しげなるもの△……七三七
一三九段　うらやましきもの△……七三八
一四〇段　とくゆかしきもの△……七四五
一四一段　心もとなきもの△……七四五
一四二段　故殿の御服の頃……七四九
一四三段　宰相中將齊信……七五五
一四四段　この三月晦日……七五七
人と物いふを……七六〇
宰相になり給ひし……七六二
一四五段　弘徽殿とは……七七〇
一四六段　昔覺えてふようなるもの△……七七四
一四七段　たのもしげなきもの△……七七六
一四八段　法華經は……七七七
一四九段　近くてとほきもの△……七七八
一五〇段　遠くてちかきもの△……七七九
一五一段　井は△……七八〇
一五二段　受領は△……七八一
一五三段　やどりのつかさの權の守は△……七八三
一五四段　大夫は△……七八三
かうぶり得て……七八四
一五五段　女のひとり住む家などは……七八七

一五六段　宮づかへ人の里なども……七八八
一五七段　雪のいと高くはあらで……七九三
一五八段　村上の御時……七九七
　おなじ人を……七九七
一五九段　御形の宣旨……七九九
一六〇段　宮に始めて參りたる頃……八〇一
一六一段　したりがほなるもの……八一八
一六二段　風は……八二六
一六三段　野分の又の日こそ……八二七
一六四段　心にくきもの……八三〇
一六五段　島は……八三二
一六六段　濱は……八三三
一六七段　浦は……八三四
一六八段　寺は……八三五
一六九段　經は……八三六
一七〇段　文は……八三八
一七一段　佛は……八三九
一七二段　物語は……八四〇
一七三段　野は……八四二
一七四段　陀羅尼は……八四四
一七五段　讀經は……八四四
一七六段　あそびは……八四四
一七七段　あそびわざは……八四五
一七八段　舞は……八四六
一七九段　ひきものは……八四七
一八〇段　しらべは……八四八
一八一段　吹きものは……八四九
一八二段　見るものは……八五〇
　行幸に……八五五
　祭のかへさ……八五六
　五月ばかり山里に……八五五
一八三段　いみじう暑きころ……八六七
一八四段　五日の菖蒲の……八六九
一八五段　よくたきしめたる薫物……八七〇
一八六段　月のいとあかきに……八七一
一八七段　おほきにてよきもの……八七一

一八八段　短くてありぬべきもの……八七三
一八九段　人の家につきづきしきもの……八七四
一九〇段　ものへ行く道に……八七七
一九一段　行幸はめでたきもの……八七八
一九二段　よろづの事よりも……八七八
一九三段　細殿に便なき人……八八五
一九四段　三條の宮におはします頃……八八八
一九五段　十月十餘日の月……八九一
一九六段　成信の中將こそ……八九二
一九七段　大藏卿ばかり……八九三
一九八段　硯きたなけに……八九四
一九九段　珍しといふべき事には……八九八
二〇〇段　うまやは……八九九
二〇一段　岡は……九〇〇
二〇二段　社は……九〇二
二〇三段　ふるの社……九〇二
　この蟻通と……九〇三
二〇四段　ふるものは……九〇九
二〇五段　日は……九一〇
二〇六段　月は……九一〇
二〇七段　星は……九一〇
二〇八段　雲は……九一一
二〇九段　さわがしきもの……九一二
二一〇段　ないがしろなるもの……九一三
二一一段　詞なめげなるもの……九一四
二一二段　さかしきもの……九一六
二一三段　上達部は……九一八
二一四段　君達は……九二〇
二一五段　法師は……九二一
二一六段　女は……九二一
二一七段　宮仕所は……九二三
二一八段　身をかへたらむ人……九二三
二一九段　雪たかう降りて……九二五
二二〇段　細殿の遣戸……九二七
二二一段　たゞすぎに過ぐるもの……九二八
二二二段　殊に人にしられぬもの……九二九

二二三段　五六月の夕かた……九二九
二二四段　賀茂へ詣づる道に……九三〇
二二五段　八月晦日がたに……九三二
二二六段　いみじくきたなきもの△……九三三
二二七段　せめて恐ろしきもの△……九三四
二二八段　たのもしきもの△……九三四
二二九段　いみじうしたてゝ……九三五
二三〇段　世の中に……九三八
二三一段　男こそ……九三九
二三二段　よろづのことよりも……九四一
二三三段　人のうへいふを……九四二
二三四段　人の顔に……九四三
二三五段　うれしきもの△……九四四
二三六段　御前に人々……九四八
二三七段　關白殿二月十日の……九五四
殿渡らせ給へり……九五五
御前の櫻……九五九
出でさせ給ひし夜……九六四
御經の事に……九六七
まづ院の御迎に……九七〇
おはましつきたれば……九七三
參りたれば……九七五
院の御棧敷……九八〇
事はじまりて……九八二
二三八段　たふときもの△……九九七
二三九段　うたは△……九九八
二四〇段　指貫は△……九九九
二四一段　狩衣は△……一〇〇
二四二段　單衣は△……一〇〇
二四三段　わろきものは△……一〇〇一
二四四段　下襲は△……一〇〇三
二四五段　扇の骨は△……一〇〇四
二四六段　檜扇は△……一〇〇四
二四七段　神は△……一〇〇五
二四八段　崎は△……一〇〇六
二四九段　屋は△……一〇〇七

二五〇段　時奏する……一〇〇八
二五一段　月のうら〳〵とある……一〇〇九
二五二段　成信の中將は……一〇一〇
そのかみ常におはして……一〇一〇
つとめて例の廂に……一〇一二
二五三段　月のあかきみる……一〇一四
常に文おこする人の……一〇二〇
二五四段　きら〳〵しきもの△……一〇二三
二五五段　方違などして……一〇二六
二五六段　雪いと高く降りたるを……一〇二七
二五七段　陰陽師のもとなる童……一〇二八
二五八段　三月ばかり……一〇二九
その頃また……一〇三〇
二五九段　清水に籠りたる頃……一〇三二
二六〇段　十二月二十四日……一〇三三
二六一段　宮仕する人々の……一〇三六
二六二段　見習ひするもの△……一〇三八
二六三段　うちとくまじきもの△……一〇三八
二六四段　日のうらゝかなるに……一〇三九
海はなほ……一〇四二
二六五段　右衛門の尉なるもの△……一〇四四
二六六段　又小野殿の母上こそ……一〇四六
二六七段　又業平が母の宮の……一〇四七
二六八段　をかしと思ひし歌などを……一〇四八
よろしき男を……一〇四九
二六九段　大納言殿參り給ひて……一〇四九
二七〇段　僧都の君の御乳母の……一〇五四
二七一段　男は女親なくなりて……一〇五七
二七二段　定澄僧都に……一〇五八
二七三段　まことや下野に……一〇五九
二七四段　ある女房の……一〇五九
二七五段　便なき所にて……一〇六〇
二七六段　女のうは着は……一〇六一
二七七段　唐衣は△……一〇六一
二七八段　裳は△……一〇六一
二七九段　汗衫は△……一〇六二

二八〇段　織物は△……一〇六二
二八一段　紋は△……一〇六二
二八二段　片つ方のゆだけ着たる人……一〇六三
二八三段　かたちよき君達の……一〇六五
二八四段　やまひは△……一〇六五
二八五段　心づきなきもの△……一〇六八
二八六段　宮仕人のもとに……一〇七〇
二八七段　初瀬に詣でて……一〇七一
二八八段　いひにくきもの△……一〇七三
二八九段　束帯は……一〇七四
二九〇段　品こそ男も女も……一〇七四
二九一段　たくみの物くふこそ……一〇七五
二九二段　物かたりもせよ……一〇七七
二九三段　ある所に何の君……一〇七七
二九四段　女房の參りまかでするに……一〇七八
二九五段　すきゞしくて……一〇八一
二九六段　清げなる若き人の……一〇八三
二九七段　松の木だち高う……一〇八四
二九八段　清げなる童の……一〇八〇
二九九段　見ぐるしきもの……一〇九一
三〇〇段　物ぐらうなりて……一〇九四
三〇一段　左中將の……一〇九七

△印のあるは原本に見ゆる題目なり。

卷首

參考年表……一一二
諸家系譜……一一八

卷末

索引……一一三一

挿畫目錄

枕草子校合原本……口繪
枕草子繪卷（雪山の圖）……一三三
貴紳室内・同室外（源氏物語繪卷）……一五七
市鄽の圖（扇面寫經）……一六二
里社遊宴の圖（年中行事繪卷）……一六三
宮城・禁中の圖……一六六
清涼殿の圖……一八二
殿上の間・職御曹司・弘徽殿の圖……一九〇
寢殿造の圖……二一六
男女裝束の圖（その一）……二三七
男女裝束の圖（その二）……二三九
男女裝束の圖（その三）……二七二
男女裝束の圖（その四）……二八六
葱花輦・檳榔毛車の圖……二九四
網代車・女房車の圖……二九五
申文……（以下本文）一八
賀茂祭（年中行事繪卷）……二六―二七
几帳……三九
燈臺……四〇
折敷、高坏……四五
鏡、鏡臺……五八
荒海の障子……八五
押出……八七
夾算……一〇〇
結文、立文……一一三
藥玉、卯槌……一二三
一條院の圖……一五七
遣水に髪を洗ふ（扇面寫經）……一六二
二葉癸……一六三
雙六……一六六
壺裝束……一八二
懸盤……一九〇
紫野附近の圖……二一六
幔臺……二三七
附物（賀茂祭繪卷）……二三九
行成の書……二七二
淺香、深香……二八六
小弓……二九四
尻挿……二九五
細殿前（承安五節繪卷）……三三一
貴人管絃（餓鬼草子）……三五三
梅壺の圖……三七八
臺盤……三九五
枝に物を附くる……四二一
かづけ物……四二三
願文……四四四
朽木形……四五三
火取……四五五

舞姫參上（承安五節繪卷）……四五九
常寧殿帳臺の試（雲圖抄）……四六三
釵子、笄……四六九
蝙蝠扇、檜扇、袙扇……五三一
登華殿圖……五四四
公任書……五六七
古半臂（東大寺藏）……五七一
納涼（扇面寫經）……五八六
金剛藏王……五八八
初瀬寺の景……五九四
參籠（天狗の草紙）……六〇一
下衆女……六一四
相撲（相撲の繪卷）……六二二
獅子舞（年中行事繪卷）……六二三
佛母尊……六二五
小兒の草合（扇面寫經）……六三九
解文……六四二
築土の板（年中行事繪卷）……六五〇
卷數……六七五
洗張（扇面寫經）……六八三
東遊……六八九
子供の木のぼり（扇面寫經）……七一三
貴人の碁打（隆能源氏）……七一四
御厨子棚……七一九
競馬……七二一
太政官の圖……七五一
朗詠譜……七六三
宮のほとりの祭（年中行事繪卷）……七七八
受領の家（圓光大師繪傳）……七八五
雪夜の男女（扇面寫經）……七九五
高坏にまゐりたる大殿油……八〇二
如意輪觀音……八三九
睨み競べ（鳥羽僧正筆）……八四五
拔頭……八四六
使舞人（紫式部日記繪卷）……八五四
行幸（年中行事繪卷）……八五六
かつら……八八一
中の盤……八七五
車爭（繪入源氏物語）……八八一
硯と料紙……八九六
社（年中行事繪卷）……九〇二
巫女（建保職人盡歌合）……九一七
纒を引越す（五節繪卷）……九二七
法會（圓光大師繪傳）……九七四
楊張・屏幔・胡床……九七五
道長書（法成寺關白記）……九七九
孔雀明王……一〇二四
屋形船（圓光大師繪傳）……一〇四一
大工（建保職人盡歌合）……一〇七六
紳士と佛法……一〇八三
つき物（北野緣起）……一〇八五

（口繪）春は曙が、ことに面白い。段々とはつきりして行く山際が、すこしあかるんで、そこに紫ばんだ雲が、細く靡いたのは面白い。夏は夜が、ことに面白い。月のある時分は、面白いことといふまでもなく、暗夜の時分も、やはり、螢が飛んで入亂れたのが面白い。雨などが降るのまでも面白い。秋は夕方が、ことに面白い。夕日

枕草子評釋上卷

金子元臣著

一段

春は曙。やうゝしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月の頃はさらなり、闇もなほ、螢飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。秋は夕ぐれ。夕日はなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、烏のねどころへゆくとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風のおと蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて。雪のふりたるは、いふべきにもあらず、霜などのいとしろく、又、さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるも、いとつきゞし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

が花々しく照つて、それが、山の端にひどく近くなつたのに、夕烏の塒へゆくというて、三羽、四羽、二羽と、空を飛んでゆくのまでも、興味がある。まして、そんな烏などとは違つて、雁などの列を作つたのが、大層小さく空に見えるのは、甚だ面白い。日が入りきつてしまつて、耳につく風の音や蟲の聲などは、甚だ興味がある。冬は早朝が、ことに面白い。朝、雪の降つたのは、面白いといひ立てるまでもない。霜などがひどく降つて、大層白いのに、又さうでなくとも、大層寒いのに、火などを急いで熾して、炭を持つて、殿の内を通ふのも、甚だ似合はしい。朝は

（考異）○冬はつとめて　原本つとめての四字なし。光本、一本によりて補ふ。○いと寒きに　原本に文字なし。光本、一本によりて補ふ。

評釋　○春は曙　春の頃は、一日の中にては、曙が最も面白しと也。「曙」の下、をかしを略けり。○をかし　興あるをいふ。面白しと同じ。○しろくなりゆく山ぎは　ハッキリしてくる山際がとなり。夜の明けて山の輪廓の明になるをいふ。「しろく」は著くの意なり。諸註、白くと解けるも聞えぬにはあらねど、甚だ明確を缺く。又「しろくなりゆく」にて、句を切る説もあれど、さては、何が白くなりゆくにか、主格不明なり。夜がといふ主語を補へば聞ゆれど、本文のまゝにて、その意の通ずるには及かじ。○あかりてと也。赤らんでくるをいふ。○紫だちたる　紫は、今いふ紫よりは赤味勝にて、所謂古代紫なり。明方の雲にはよく見ゆる色なり。「だち」はその氣の發つをいふ意の接尾語。○たなびきたる　棚引きたるがをかしと也。「たなびく」は靡くと同じ。「た」は接頭語。○夏はよる　の下、をかしを略けり。○月の頃はさらなり　月のある頃のをかしきはいふも更なりと也。○闇もなほ　「なほ」は俗言のヤハリと同じ。そのうへにの意にあらず。注意すべし。○飛びちがひたる　の下、をかしを略けり。○雨などのふるさへ　雨は心地よからぬものなるに、夏の夜は、その雨などの降るのまでが面白しと也。「さへ」は副の義にて、物の一つある上に今一つ重ぬるに用ゐる辭。俗言のマデモと同じ。○秋は夕ぐれ　の下、をかしを略けり。○花やかに　花々しの副詞格。美しく鮮やかなるをいふ。○山の端いと近くなりたるに　夕日の入らんとして、山際に甚だ近づきたるをいふ。これを、秋の氣澄みて花やかなる夕日に、常よりも山の端の近く見ゆる意と解けるもあれど、迂遠なり。○いと　甚だと同じ。○ねどころへゆくとて　塒へ急ぐとても也。○あはれなり　面白き事にもあれ、悲しき事にもあれ、凡て感の深きをいふ。こゝは興味のある意なり。○まいて　ましての音便。○つらねたる　「つらね」は列をなすをいふ。○いとちひさく見ゆる　遠く高く行く樣なり。○日入りはてゝ風のおと蟲のね　秋の夕、物の見えずなりてより聞ゆる風の音や蟲の鳴く聲なり。「蟲のね」の下、など聞ゆるを略けり。○冬はつとめて　の下、をかしを略けり。○つとめて　早朝をいふ。又、翌朝の意に用ゐる場合、この草子中にいと多し。こゝは前の意。「つと」は夙にと同語。○いふべきにもあらず　をかしといふべきにもあらずの略。冬の朝雪の降りたるは、面白きが當然にて、いふに及ばずと也。○さらでも　さあらでもの略。「さ」は雪霜などの降るをさす。○炭もてわたる　炭を持ちて彼方此方へ行くもと也。「もて」は持ちて也。こは炭斗に入れて運べるにて、落窪物語にも、炭斗のこと見ゆ。○つきづきし　似合はしきこと、相應すること。俗のツキガヨイにあたる。○ぬるくゆるびもて行けば　寒氣の溫く和らび行くをいふ。「もてゆく」は、次第に進み行くの意。○火桶　火櫃の圓きもの、卽ち圓火鉢なり。桐のくり抜きにて、内を眞鍮などにて張り、胴を箔にてだみ、彩色繪を描きたり。敷寄を凝したるには、沈の木などにて造れるもあり。下文に見えたり。○炭櫃　スビツ。すみびつの略。圍爐裏なり。禁祕抄に、禁中殿上の下侍に炭櫃ありて、四面には疊を敷くこと見えたり。○火も　の下、構ふ者もなくてを補ひて聞くべし。

評釋　我々日本人ぐらゐ、自然といふものに對しての、深い憧憬をもつてゐる民族は、他に恐らくあるまい。我々の祖先の生活は、自然に支配され、時に盲從してゐる。それ故我々の有する文學美術には、自然を目的として、その美を發揮することを勗めたものが、頗る多い。よし目的とせぬまでも、自然を背景とせぬものは、殆どない。だからわが文學美術から、自然を切離して見ることは、到底不可能なことである。かうした國民性をもつた我々の祖先が、動もすれば、四季の風物をいひ、花鳥風月を歌つたのは、蓋し當然である。

四季の風物に對しての好惡は、甚だ複雜な聯感が伴うものであるが、直覺的には、皮膚の刺戟に本づくことが、その大部分であるから、春秋二季は、ことに快的な時節と認められ、つひにこの二季の優劣

こんなによいが、畫になつて寒氣が溫んでゆくと、炭櫃や火桶の火も構ひ手がなくなつて、白い灰勝になつてしまうのはいけない。

は、人々の口頭語となり、詞人がその才藻をきそふ好題目となつた。神代における春山の霞男と、秋山の下比男の競爭、近江朝の春山萬花の妍、秋山千葉の彩の優劣からはじめて、平安朝に貫之が「錦をはれる秋の木の葉」、孝標の女が「おぼろに見ゆる春の月」など、或は春に肩を入れたり、或は秋に心を寄せたりして、彫心鏤骨、詩壇の一佳典を作るやうになつた。けれど、一派の詞人は、四季おの〳〵、特色があり、好處があることを認めて、頗る公平な見地から、その推稱をおこたらなかつた。すなはち平等に、四季の景趣を叙したものには、この草子以前に空穗物語があり、同時に源氏物語があり、後世には徒然草がある。中にも傑出したのを、この文とする。蓋し清少一流の敏警な觀察と、引締つた齒ぎれのよい筆致とは、とても他の眞似の出來ない所で、實にわが國文中の異色である。

やわらかい輪廓をつくつた東山の峯に、ほの〴〵と別れてゆく横雲の空は、京うまれの清少が、幼少から見馴れて、印象ふかく感じた景色であらう。また雨に對する厭惡の念が、今の我々の想像以上に强かつた當時において、「雨などの降るさへをかし」と道破したのは、よく時代を超越して、自然の趣味を解したものである。「三つ四つ二つ」の辭樣の參差は、雁のまばらに飛んでゆく狀を形容し得ておもしろい。「ちひさく見ゆる」は、雁が山とび越えて去來する光景で、京都の地勢上、常にあり勝なことである。稀にはひくく飛ぶこともあらうが、下文にも「雁の聲は、遠く聞えたるをかし」といつてるのを見ると、それは清少の嗜好に適はなかつたものだらう。否恐らくは、近い雁に、詩味を感得するほどの機會と經驗とをもたなかつたのだらうと、推察される。「火など急ぎおこす」に、寒氣を怖れた趣が現れてゐる。「炭もてわたる」は、彼方此方の火桶炭櫃に、女官達が、炭つぎ廻るさまであらう。小大君集に、

殿上に、炭もてくる男を、おそく參りたりとて、藏人のとらへて、髮に繩をゆひ付けて宵ざりしかば、女房方よりよみてやる。

おほはらや炭のかしらの繩ゆるせこのめに涙うかぶといふなり

これによると、當時の禁中御用の炭は、大原の炭竈から、ぢかに上納したものと見える。納入の時期がおくれたとて、その炭燒の長を折檻するのは、甚しい亂暴のやうだが、まことに炭なしには、片時も居られぬから、仕方がない。天井はなし、大間にはあり、四方かけ拂にはあり、日あたりもとかく不十分な當時の殿舍では、寒さはさこそと想ひやられる。そこで、火おこすも、炭もてわたるも、頗る有意味な譯となつて、つき〴〵しくも、をかしくも感ぜられるのである。

時刻を四季に配當して、その特色を紹介したこの企は、空前の新案である。さて春は曙、夏はよる、秋は夕ぐれ、冬は早朝の四綱目がまづ出來て、次にその細說を試みるに當つて、春、夏、秋は、專ら叙景につとめ、冬には人事を配して、內容に變化あらしめ、また春、夏を輕々に評し去つて、秋冬に力をそゝぎ、また春、夏、秋は、專らその好處をのみ擧げ、冬には「晝になりて――わろし」と、卽損の轉語を下したなど、筆法が變化に富んで、まことに面白い。しかも文の樣式が整然として、その結構から布置から、一寸のたるみも無い。初學者の模範を取るには、最も都合のよい文體の一つであらう。

殊に注意すべきは、春の曙と秋の夕暮とである。この文が一度世に出てから、この二つは、吟詠の好題目となつて、千載の今もなほ、歌人の口の端に乘つてゐる。以てその觀察が、たゞ奇警といふばかりでなく、極めて妥當であることが證明される。

この草子全體にわたつて、省筆略筆が、極めて多い。時には却つて、文意の晦澁をきたす嫌もないでは無いが、文字が簡淨で、調子が勁健な所以も、全くこゝに存する。この草子が、文章的に成功した理由は多端であるが、省略法もたしかに、その一因を成したことは爭へない。又活用語の第四變化の省略法を疊用したのは、文の簡潔を助ける所以である。婦人の文字、おのづから歌後の口語的傾向を帶び勝

な結果であらう。

（口譯）面白い季節は　正月、三月、四五月、七月、八九月、十一月、十二月であるが、總體その季節につけ〳〵して、一年中面白い。

一段

ころは　正月、三月、四五月、七月、八九月、十一月、十二月、すべてをりにつけつゝ、一年ながらをかし。

（考異）○十一月　原本十月とあり。一本、活本による。

釋　○ころは　一年のうちにて面白き頃はと也。○つけつゝ　「つゝ」は動作の繼續を示す辭。○一年ながら　「ながら」は悉皆の意。

評　二月、六月、十月をはぶいたのは、煩を避けたのではない。いづれも間の月で、自然なり、人事なりの興趣が、稍うすい心地がするからである。とはいへ、實は一年中みなをかしと、頓挫したところが面白い。「折につけつゝ」は、この眼目である。藤原忠良が「折にあへばこれもさすがにあはれなり」と、小田の蛙の夕ぐれの聲をうたひ、兼好法師が「をりに觸れば何かはあはれならざらむ」と、そのつれ〴〵に書いたのは、これに共鳴した思想である。わづか一二行の文字ながら、叙法の錯落と句法の變化とは、姿態横生の觀がある。

前段季節を評し、この段月次を評し、次段以下節日を叙してゐる。筆法粗から精に、大から細に入つてくる。

三段

（口譯）正月は、すべて結構な月であるが、その元日はまして、空の氣色がうらゝかで、珍しく霞み渡つたのに、世の中にある限の人は、衣裳や化粧を、特別に注意して、めかし立てゝ、君をもわが身をも、幾久しくと祝ひなどした有樣は、格別に面白い。

（口譯）正月七日は、雪の下から、早出の若菜を、青々と目覺しく摘み取つて、何時もは、さうそんな野菜などは目馴れない、御殿のあたりにも、もてはやしたのが面白い。今日の禁中の白馬の御儀式を見ようと、里人達は、車を綺麗

正月一日は、まいて空のけしきうらゝかなるに、世にありとある人は、姿かたち、心ことにつくろひ、君をもわが身をも祝ひなどしたるさま、ことにをかし。

釋　正月一日　正月をむつきと訓む。睦月の略なりとも、萌月の約なりともいへり。一日をついたちと訓むは月立の音便にて、月の始る意。狹義には朔日をいひ、廣義には上旬をいふ。○うらゝかとうらゝかとしてと也。麗らかにと同じ。○ありとある人　あらゆる人なり。○姿かたち心ことに　「姿」は衣形の義にて、衣裳附なり。かたちは容貌なり。美人をかたち人といへり。「心ことに」は用意格別にとなり。○君をもわが身をも祝ひ　「君をも」は君をも祝ひの略。君を祝ふには、朝拜などして、祝意を表するもあるべく、身を祝ふには、齒固などして、年壽を祝するもあるべし。

七日は、雪間の若菜青やかにつみ出でつゝ、例はさしもさる物、目近からぬ所にも御門のとじきみひき入るゝほど、かしらども一ところにまろびあひて、刺櫛も落ち用意せねば折れなどして、笑ふも亦をかし。左衞門の陣などに、殿上人あまた立ちて騷ぐこそをかしけれ。白馬見むとて、里人は、車清げにしたてゝ見にゆく。中の蔀などの見ゆるに、主殿司、女官などの、行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重をかく立ちならすらむなど思ひやらるゝに、うちにも、見るはい

に飾りたてゝ出掛ける。待賢門の國を引込む途端、閾に當つて、車が激動すると、乘人は、一所にころんで、鉢合せをして、刺櫛も落ち、前から注意せぬと、それが折れたりなどして、とんだ滑稽を演じて笑ふのも、亦面白い。待賢門からはひつて、右へ折れた建春門のあたりに、殿上人が大勢立つたりして、白馬の儀仗に立つた、近衛の舍人の弓など借りて、馬を突き驚して、面白がつて笑ふのを、こわこわやつと見込んだ所が、奥の宜陽門を通して、溫明殿前の立蔀が見えるのに、その邊を、女の殿司や女官などが往來したのが、目について面白い。どれ程な果報のいゝ人が、内裏のうちを、かう物馴れて振舞ふことであらうなど、羨しく思ひ遣られるに、禁中でも、今見わたす所はせまい籠圍で、晴のお化粧をした舍人の顏の生地もあらはに見え、白粉のゆき渡らぬ所は、ほんに、黑い庭に雪が斑に殘つたやうな心持がして、甚だ醜い。何にせよ、馬がはね上つて騷いで居るのも、恐しく思はれるので、車の内へ引込まれて、よくも見て居られない。

とせばきほどにて、舍人が顏のきぬもあらはれ白き物のゆきつかぬ所は、まことに黑き庭に、雪のむら消えたるこゝちして、いと見ぐるし。馬のあがり騷ぎたるもおそろしく覺ゆれば、引き入られて、よくも見やられず。

（考異）○もて騷ぐこそをかしけれ　原本もて騷ぎとのみあり。古本による。○思ひやらるゝに　原本に文字なし。一本による。○舍人の弓どもとりて　原本馬どもをどりてとあり。一本による。

（釋）○雪間の若菜　「雪間の」とあるは、正月七日は、早春の雪勝なる頃なれば、大凡にいへるのみ。必ず雪間を求めて若菜を摘むにはあらず。「若菜」は食ふべき春草の若苗の稱にて、荆楚歲時記に「正月七日に七種の菜の羹を食すれば、萬病邪氣を免る」といへる支那の慣習に倣ひて、嵯峨帝の頃より、朝廷における儀式となれり。七種の菜は、河海抄に「薺（三味線草）蕣蔓、芹、菁（蕪）酒々代（大根）御形（母子草）佛の座（カハラケナ）」とあり。なほ異說多し。○青やかに摘み出でつゝ　青く目に立つ程、數多摘出したるをいふ。この「つゝ」はてといふに近し。○例はさしも云々　「例は」は常はの意。「さしも」はさうもマアの意。「し」は强辭、「も」は歎辭。「さるもの」はさやうなるものにて、若菜をさす。○目近からぬ所　宮中や高貴の奥向をいふ。○もて騷ぐ　持ち騷ぐと也。興に入りたるさまなり。○白馬　アヲウマ。馬は陽の獸、青は陽春の色、正月七日青馬を見れば、年災を除くといふ。禮記に「春を東郊に迎へて、青馬七疋を用ゐる」とあるに本づきたるにて、我が國にも、天皇馬を覽給ふ儀式あり。これを白馬節會といふ。聖武帝の時より起りて、光仁帝後、恒例となれり。古は黑に青味を帶びたる馬なりしを、醍醐帝の延長年間より白馬と變り、文字も白馬と書けど、尙あをうまといへり。初は豐樂院にて、のちは紫宸殿、或は淸涼殿にて行はせらる。その行列の次第は、江次第に「左近衛舍人等渡、次左右馬頭、次白馬七疋、次左右允、次白馬七疋、次左右屬、次白馬七疋、次左右助、次右近衛舍人等渡畢」と見ゆ。○里人　サトビト。「里」とは宮城外をいふ。都を大君の御里と、歌にもよめり。そこに住居せる、身分ある人の家族を里人といふ。○車　車は牛車にて、當時上中流人の乘物なり。種類多し。文中處々に散見せり。委しくは一々そこにて叙ぶべし。（附圖參照）○淸げにしたてゝ　「淸げ」のけは、樣子を示す接尾語。「したてゝ」は繕ひての意。禁中に參るなれば飾り立つる也。○見に行く　白馬を見にゆくと也。○中の御門　待賢門のこと。内裏の東面の門にて、郁芳、陽明二門の間にあり。朱雀門は内裏の正門にして、南面の中の御門なれど、當時西の京は場末となりて、東の京のみ榮え、朝紳は、多く東面より出入せしかば、待賢門、獨この名を得たり。かくて、朱雀門と共に、重要なる内裏の出入口となれり。○とじきみ　和名抄に「閾、門限也、和名シキミ、俗云トジキミ」とありて、門の親柱の間にわたせる、下の横木をいふ。○ひき入るゝ　車を挽き入るゝと也。○かしらども一ところにまろびあひ　車の動搖烈しくて、乘合へる婦人達の鉢合するをいふ。「ども」は複數を示す接尾語。「まろびあひ」はころびあひ也。○刺櫛　サシグシ。この頃は、額に櫛をさしたる也。この櫛は、梳の用にはあらで、飾の爲なり。大寶の令制に、三位以上、象牙の櫛を許さるゝこと見えたり。おもふに、淸少等のは木櫛なるべし。○用意せねば　覺悟せねばと也。○笑ふも亦をかし　若菜も白馬の節會も面白きに、かく車にゆられて鉢合して笑ふも、亦面白しと也。○左衛門の陣　サエモノヂン。建春門にあり。この門は、禁中中重の東門にて、門の外面の南側に陣屋あり。衛門府、及び陣を見よ。妙音院相國白馬節會次第に「從大庭渡左衛門陣前、達於陽明門」と見えたれば、淸少は、白馬がこの陣の前を渡るを見んとて、待賢門を入りて、左衛門の陣の邊に待構へ居たるなるべし。○衛門府　エモンフ。靱負の府ともいふ。宮城の外門を守る職なり。左右あり。督各一人、（從四位下）佐各一人、（從五位上）大尉各二人、（從六位下）少尉各二

人、(正七位上)次に大少志あり。門部二百人を統ぶ。○陣　ヂン。役所なり。貞丈雜記に「禁裏にて、役人出仕して、役所に列座することを、著陣といふ。陣は役所といふ心なり。陣は列ると訓む字にて、人々多く立列るをいふ」。○殿上人　テンジャウビト。又、うへびとともいふ。清涼殿の殿上の間に昇るを聽されたる人の稱。四位五位は勿論、公卿にても、許さるゝ者と許されぬ者とあり。六位にても、藏人は昇殿す。許さるゝを「うへゆるさる」といふ。日給簡ありて、殿上人の名を記して、殿上に懸けたり。これを仙籍といふ。この簡に記さるゝを簡につくといふ。若し過失ある時は、この簡を削らる。殿上を見よ。(附圖清涼殿、殿上の間參照)○舍人　トネリ。殿侍り、又殿寢入の義とぞ。もと貴人に奉仕して、雜役を勤むる者の稱なりき。こゝは近衞府の舍人にして、左右近衞に、各三百人ありて、弓箭兵仗を帶す。位階ある者の子弟、及び勳位ある者を選拔して採用す。將曹、府生、番長は、これより選任す。近衞府を見よ。白馬の節會には、馬の前に立ちて行く。白馬を參看せよ。○弓ども取りて　舍人の持てる弓などを、見物する殿上人達がたはむれに取れる也。○馬ども驚して　弓にて馬を打驚しでと也。○はつかに見入れたれば　殿上人達のふざけ居るを、門外よりわづかに覗き見たればと也。「はつかに」は僅にに同じ。「見入れ」は見込むこと。○立蔀　タテジトミ。蔀の如く造りて、目隱しに庭に立つる屏。造り附けにも、取外しにも造る。こゝの立蔀は、宣陽門内、溫明殿の前のなり。蔀を見よ。(附圖參照)○とのもり司　後宮十二司の一にて、男官の主殿寮の如く、殿中の燈油、薪炭等の事を司る。尙殿一人、典殿二人、女孺六人(後には十二人)あり。女の奉公人中のよき役柄にて、禁祕抄にも、「主殿司美麗姿也、公人内可レ稱ニ神妙之職一」と見えたり。○女官　ニョウクワン。禁中名目抄に「女公人之惣名也」と註し、岷江入楚には「内侍、命婦、藏人をニョクワン、以下の下萬をニョウクワンと引いて唱ふべし」といへり。○行きちがひたる　こゝは溫明殿の簀子あたりを、殿司や女官等の往復するが、立蔀のはづれよゝ見ゆるさま也。○いかばかりなる人　如何ばかりなる果報ある人と也。○九重　コヽノヘ。内裏をいふ。その幾重にも、御構の多きをいへるよりの名なり。楚辭に「君之門兮九重」とあり。さて、この九重を直譯して、王城の事に用ゐたり。○立ちならす　「ならす」は慣らすにて、わが家の如く振舞ひ慣るゝをいふ。○うちにも　廣き禁中にてもと也。「うち」は内裏をいひ、又主上をいふ。轉じて妻をもいふ。こゝは内裏なり。○見るはいとせばき程にて　今見る所は甚だ狹き區域にてとなり。清少の乘車と、白馬の一群の立てる所との距離の狹きをいふ。「見るは」は見ゆるはの意。○顏のきぬ　顏のきぢ。「きぬ」は表衣の義。○白きもの　おしろいなり。和名抄に、粉をシロキモノ、白粉をハフニと訓めり。蓋し米粉と鉛粉との別なるべし。○ゆきつかぬところ云々　舍人が化粧したる顏の白粉の、何時しかはけて斑になれるを、雪の斑消したる庭に譬へたる也。○馬のあがりたるも　馬の躍りあがりたるもと也。○引き入られて　車の内に自然に引込まれてと也。「入られ」は入れられの約。能動の助動詞にて、自然的動作を表す。○よくも見やられず　よくも見能はずと也。

評　この段は、清少が、まだ宮仕に出ない時分のことである。下文の小白河殿の八講の段も、宮仕前の寛和二年六月の事であるが、彼の甚だ大膽放縱な言動に較べると、これはまた大いに謹愼な調子である。勿論里人としての白馬拜見であるからでもあらうが、清少としては、ちと初心過ぎるやうな心地がする。想ふに寛和二年より更に以前の、廿歳ちかくの頃の事ででもあつたらう。

若菜摘は、雄略帝の御製にも見えて、冬季中の菜蔬の缺乏からおこる要求であつた。これが推古朝以來の漢風模倣時代に入つて、人日七種の菜羹を供する支那風俗にむすび付いて、若菜はこの節日にはなくてはならぬ物となり、鬚籠に風流を盡し、歌などよみ添へて、互に贈遺してもてはやすことゝなつた。これ「さる物目近からぬ處」にまで入たつ所以である。

白馬の條は、流石に面白い。清少の父元輔は、國守を歴任した相當の官吏であるから、その家族は白馬拜見の榮譽を有したのでもあらうが、こんな儀式の日や、何か事のある折は別として、平日なら雜人原が、大内裏に出入することは自由であつた。乞食尼などまではひり込んだことが、下文、雪山の段にある。しかし全くの禁内は、この限ではない。

當時の牛車は四人を定員として、前に二人あとに二人、互にむき合つて乘る。車の簾から、わざと袖口など揃へて出すを出衣といつて、女車の晴の儀とする。簾も下簾も、新しく仕換へて、刺櫛さして化粧して、今日を晴と出掛けたのであらう。しかも車は、車臺をぢかに轅にしばり付けたもので、(これを床縛といふ)今日のやうに、動搖を調節すべきバネといふ物がない。されば平地をゆくにも、可なりの動搖を免れない。だから車の棧立には、手形をさへ切付けてある位である。もし威勢よく牛を走らせる時は、乘馴れぬ者は、忽ち醉つてしまふ。源頼光の四天王等が、賀茂祭の見物にいつて車に醉つた話など、決して珍しいことではない。こんなバネなし車で、待賢門の閾をひき込む。ドシンと當つての大震動、鉢合せぐらゐは何のそのである。刺櫛の折は、甚だ氣の利いた描寫といはなければならぬ。車中の騒動は、たゞ簡單なこの一句に盡されてゐる。

この月は白馬を引くほかに、踏歌があり國栖の奏があるが、建春門外までを許された里人などは、只この白馬の行列拜見が出來るだけである。その本行列は、解釋中にあるやうに、白馬廿匹、馬寮の官吏八人、近衛の舍人二三十人に過ぎない。今日から見れば、何でもない見すぼらしいもの、やうに思はれるが、その頃では、なか〳〵の盛儀であつたのだらう。まして馬は飾り、人は弓箭兵仗を帶して、容儀を作つたのではないか。天覽がすんで、大庭から出て、左衛門の陣に一休みする頃は、皆相應に疲勞して、米の粉おしろいが、汗に所剝した舍人の顔は、餘程珍妙に見えたであらう。

さて殿上人、殿司、女官、舍人、白馬、見るに隨つて、或は驚駭し、或は羨望し、或は嘲笑してゐる。

(口譯)八日、この日は女叙位や給女王祿の選に預つた人達が、お禮の參内などして走りさわぎ、それらの車の音も、平素よりは格別に聞えて、面白い。

(口譯)十五日は十五日粥の御節供のお膳が、お上にあがる。粥の木を、後にもち隠して、その家の老女や女房達が、打たうとしてれらふのを、外の女房達が、打たれまいと用心して、何時も、後の方を注意した樣子も面白いが、それ程用心したのを、どうしたはずみかしら、うまく打ち當て

この間に珍しがりの若い里人の心持が、限なく活躍して面白い。「くろき庭に雪のむら消」の口わるさ、後來宮廷内を切つて廻した鋒鋩が、既にこゝにあらはれてゐるではないか。「白馬見むとて」に筆をおこし、「馬のあがり騒ぎたる」に筆をとめたのは、首尾の照應である。「よくも見やられず」の一句に、突然一切を抹了したのは、甚だ狡猾な筆法である。

八日、人々よろこびして走りさわぎ、車の音も、常よりは、ことに聞えてをかし。

釋 ○人々よろこびして　正月八日女叙位とて、女官の位階を叙し、給女王祿とて、女王に祿を賜ふ儀式あり。但、女叙位は隔年に行はる。祿は、人別に絹二疋、綿六屯を賜ふ。「よろこびして」は恩を謝するをいふ。即ちお禮を申すこと。こゝは御禮の爲に、女王女官等の參内する也。○車　牛車なり。

十五日は、もち粥の節供まゐる。粥の木ひきかくして、家の御達、女房などのうかゞふを、打たれじと用意して、常に、うしろを心づかひしたるけしきもをかしきに、いかにしてけるにかあらむ、打ちあてたるは、いみじう興ありとうち笑ひたるも、いとはえ〴〵し。ねたしと思ひたる、ことわりなり。こぞより、あたらしうかよふ壻の君などの、内へまゐるほどを、こゝろもとなく、ところにつけて、われはと思ひたる女房ののぞき、奥のかたにたゝずまふを、前に居たる人は心得て笑ふを、「あなかま、〳〵」とまねきかくれど、君見知らず顔にて、おほどかにて居給へり。「こゝなる物とり侍らむ」などいひ寄り、はしり打ちて逃ぐれば、あるかぎり笑ふ。男君もに

た時は、打つた者が、ひどく面白いと、得意になつて笑つたのも、甚だ陽氣らしい。打たれた女が、くやしいと思つたのも、尤の事である。去年から、或お家の姫君に、新しくお通ひになる壻君などが、朝、參内にお出掛けの時分を覗つて、粥の木で、一つ打つて上げようと、そのお家につけて、大層巾を利かして、得意顔に思上つた女房が、そのお出掛を待遠しく覗き込んで、奥の方に佇立んでゐるのを、その前の方にゐる女房は、これは壻君を打つのだなと合點して、覺えず笑ふのを、壻君にけどられてはならぬから、「まあ喧しい。靜に〳〵」と、手招して止めたけれど、いゝ驥梅に、壻君は、一向見も知らぬ風で、大やうに濟してお出なさる。ここにある物を、一寸取りませうなど、よそ事にかこつけて、壻君のそばに寄るが早いか、そのお尻を打つて逃げると、居るだけの者が、どつと笑ふ。打たれた壻君も、見にくゝなく、愛敬らしく笑つて居るが、格別に驚きもせず、たゞ顔が少し紅味ばしつて居たのも面白い。又、女同士、互に打合つて、時には、男などまでも出掛けて、打つ樣子である。もと〳〵冗談であるものを、どういふ了見かしら、打たれたといつて、泣いて怒り出し、打つた人を呪うて、悪しざまにいふも、時に取つて、亦面白い。内裏あたりの威

くからず、あいぎやうづきて笑みたる。ことに驚かず、顔すこし赤みて居たるもをかし。又、かたみに打ちて、男などさへぞ打つめる。いかなる心にかあらむ、泣き腹だち、打ちつる人をのろひ、まが〳〵しくいふもをかし。内わたりなどやむごとなきも、今日は、みな亂れて、かしこまりなし。

（考異）○男などさへ　原本男などをさへとあり。活本による。

釋　○もち粥の節供まゐる　「もち粥」は十五日粥の事なり。陰暦十五日を望といふ。十五日の粥なればもち粥なり。神宮雜例集にも「望粥」とあり。舊註に餅粥とあるは非。延喜式に、七種の穀物を粥に炊ぐこと見ゆれど、餅のことなし。土佐日記にも、十五日の條に、小豆粥とのみあり。「節供」は佳節に食物を供する義。「まゐる」はお上に獻るなり。○粥の木　また粥杖とも、粥柱ともいふ。安齋雜考には「十五日には、百官御薪木を獻ず。粥の木も、この御薪木にて作る」といひ、和訓栞には「粥を焚きたる木を削りて、杖としたるもの」といひ、黑川眞頼は「粥の木は、接骨木の木を、先を四つに割りて、焦けつかぬやうにかきまはす棒なり」といへり。この木にて女の腰を打てば、男子を生むとて、緣喜に打つなり。簾中舊記には「御女房衆の右の肩の上を、三つづつ、そと御打ち候」とありて、近世までも地方には行はれしこと、骨董集に委し。○ひきかくして　若き人々の尻を打たんと、粥の木を隱し持ちて、その油斷を窺ひねらふ也。「ひき」は接頭語。○家の御達　「家の」はその家のの略にて、或高貴の家のなり。「御達」の御は老女の敬稱。契沖いふ、「本朝文粹の註に『俗謂二貴女一爲レ御、蓋取二夫人女御之義一也』何の御といふ類、貴女より起りて、さらぬ者にもいへり」。○女房　ニョウバウ。專ら禁中奉公の婦人にいひ、身分、女官より高し。又權家に仕ふる上通の婦人をも、又ひろく身分ある婦人をもいへり。もと男房に

對する語にて、女部屋のことなるが、轉じて、奉公して部屋住する婦人の稱となれり。○いかにしてけるにか　打たれじと用意したるを打當てたれば、そは如何にせしならんかと疑ふなり。○いみじう　甚しくの意。又甚しくよきことに用ゐることも常なり。○興ありと　興ありとてと也。興は面白味なり。○はえ〴〵し　榮あること、即ち花やかに賑やかなるをいふ。○ねたし　くやし、又殘念の意。宿痛しの義とぞ。こゝは嫉妬の意にあらず。○思ひたる　の下、もを略けり。○ことわり　俗の尤もにあたる。もと事を分ちて、善悪を辨ふる義なるが、轉じて、理の意に用ゐる。○あたらしうかよふ壻の君云々　新婚したる壻君をいふ。「かよふ」とは、いにしへは嫁は實家に居て、壻の男がそこに通ひゆく習俗なりければなり。○内へまゐるほどを　參内せんと出掛くる所をと也。嫁君の家より、直に壻の參内する也。○内　内裏なり。○心もとなく　待遠きをいふ。本居宣長いふ「この語は、物の飽かぬ所あるを、かくあれかしと願ふやうの意なり。遲きを待つことにいふも、その意なり。俗にいふと少し違へり」。○所につけて我はと　「所につけて」は、その家々につけてと也。「我はと思ひたるは」は、我こそはと得意に思ひあがりたるはと也。○奥のかたにたゝずまふを　打たんとして奥の方に佇まふをと也。「たゝずまふ」は佇立むの延言。○前にゐたる人　奥にゐたる人に對して、端にゐたる人をいふ。○心えて　隱れて打たんとするを知りてと也。○あなかま　「あな」は歎辭。「かま」はかまびすしの略語。○まねきかくれど　聲に出さずして、手まねに制止すれどと也。○君　壻の君。○おほどか　おほやうの意。落ち着きたる樣をいふ。令義解序に、穩の字を訓めり。○こゝなる物とり侍らむ　こゝにある物を取らんといひて、壻君に近寄るは、怪しく思はせじとての計略なり。○はしり打ちて　走りかゝりて、壻君を打ちてと也。○あるかぎり　其處に居るだけの人なり。ある限の人の略。○男君　壻君。○にくからず見にくからずと也。立腹の色なきをいふ。○あいぎやうづきて笑みたる　「あいぎやう」は愛敬の字音。

儀正しい處も、今日は皆無禮講で、謹慎も何もない。

俗にいふ愛嬌と同じ。「つき」はその趣をもつこと。「たる」の下、がを略けり。○ことに驚かず　格別に驚きもせずと也。○顔少しあかみて　顔を少し赤くしたるは、きまり悪きさま也。「あかみて」は紅んで也。○男などさへ云々　女が打つはもとより、果は男までも出掛けて打つ様子ぞと也。原本の「男などをさへ」とありては、前文と重複して、意通らず。「める」はミエルの約にて、様子といふ意の辭。○いかなる心にか　もと戯に打合ふなるを、いかなる心にてかと也。○まが〳〵しくいふ　「まが」は禍にて、緣起わるきこと、不祥なることにいへど、こゝは悪し様にいふ意。○わたり　あたり(邊)と同じ。○やむごとなき　止むことなきにて、捨て置き難き意。高貴のあたりは疎略にできぬより、尊大の義に用ゐる。○かしこまり　禮儀謹慎などの意。

評　粥の木で人を打つといふだけの事も、面白く書けば書かれるものかな。狹衣物語に、

十五日には、若き人々、こゝかしこに群れ居つゝ、をかしげなる粥杖引隱しつゝ、かたみにうかゞひ、又、打たれじと用意したる、すまひ思はくども、おの〳〵をかしう見ゆる。

とあるのも、共に當時の風俗の活寫である。大人女房が壻君を打つところは、この文の中心點であつて、叙述最も微細に入り、打つ女の所得顔にハシャイだ様子、打たれる男の初心らしい鷹揚な態度、一々活躍してゐる。「興ありとうち笑ひたるも」、「心得て笑ふを」、「あるかぎり笑ふ」、「愛敬づきて笑ふ」と、打つも打たぬも打たれるも、一切その座に居あはせた者が、笑はずには居られぬ所に、節供氣分の充實した趣が見える。はては興に乘じて、只打たんがために打つこととなつては、子持のお禁厭も何もあつたものではない。ふざけ過ぎては、遂に泣いてくやしがるも、つまり大笑の反映である。「内裏わたり」の一句、冒頭を回顧してゐる。

壻の君の去年から新しく來かよふのも、その嫁の家から參内するのも、現代人には、一寸合點ゆかぬ習俗で、この草子を讀んでゆくと、隨處にこの問題に逢著するであらう。よつて當時の結婚手續について、一應概念を得ておく必要がある。左にその大略を述べて見よう。

（口譯）正月の地方官除任の式ある頃などは、内

まづ媒人きたりて、男の親および男に、某家によき娘あり、こなたには緣邊ふさはしなどいへば、即ち歌よみ添へたる手紙を、女のもとに贈るに、應否如何は別として、これに答ふるを情ある業とし、もし娘の恥らひて、返書を認むるに躊躇する時は、父母兄姉など後見して、敎へ勸めて、書かせなどす。かくて、その詠詞筆蹟の工拙を見て、互にその人柄を卜す。その約さだまるや、當日、男は日暮れて後、密に女のもとにきて宿る。曉に歸るや、直に後朝の文とて、名殘の情緒の禁へがたき由など認めたるを贈れば、女は返書を、その使に託す。娘の父母は、男の容貌品位を、娘より聽き、その意に愜はざる時は、娘を誡めて、これと絶たしむ。男、後朝の文をおこたりて、正午に至れば、愛想を盡かされたものとして、女及びその一家は、大なる恥として悲歎す。さて、次の夜も、密に遲く來りて、朝早く去り、書を寄すること、初日に同じ。第三夜は、三日の餅とて、餅を作りて、男も女も食ふ。男は、その三つが一つを食ふ。この夜または一二日後れても、女の方には、酒肴を設けて、壻とその從者とを饗す。この時はじめて、舅姑は、壻に對面して、杯酌をかはす。これを露顯の式といふ。その翌朝よりは、壻は、朝も日闌くるまで、女のもとを去らず。始めて公然と、その家に出入す。以來、壻の衣服、その他の始末はすべて、女の家にて取賄ふ。かくて、夫妻の情、日々遂うて濃やかに、男は、この女と、生涯を共にせんと決したる時は、正妻として、おのれの家に迎ふ。正妻のほかの女は、やはり己より通ひ行く習俗なりき。

除目のほどなど、内わたりは、いとをかし。雪降りこほりなどしたるに、申文もてありく四位五位、若やかにこゝちよげなるは、いとたのもしげなり。老いて頭白きな

裏あたりは、甚だ面白い。早春の事とて、雪が降り、氷が張つたりなどしたのに、國司所望の申文を、太政官にさし出すとて、持つてあるく四位五位連の、年がまだ若くて、愉快らしいのは、前途が長いから、甚だ有望で頼もしさうである。それが年寄つて、頭の白い先生などが、その筋の人に、何のかのと緣をもとめて、望の次第を申込み、又、中宮方の女房の部屋にたち寄つて、自分の身のえらい譯など、心ゆかせていひ聞かせるのを、陰に居る若い女房達は馬鹿にして、その眞似口をして笑ふけれど、當人はそんな事とは、何で知らうぞ知りはせぬ。只一所懸命に、宜いやうに、御門樣に奏上して下され、中宮樣へ啓上して下され」など頼んでも、その望どほり官を得たのはよい。所が、何の官にもならずにしまうのがさ、甚だ憫れなものである。

どが、人にとかくあないいひ　女房の局によりて　おのが身のかしこきよしなど、心をやりて說き聞かするを、若き人々は、まねをし笑へど、いかでか知らむ。「よきに奏し給へ。啓し給へ」などいひても、得たるはよし、得ずなりぬるこそ、いとあはれなれ。

（考異）○あない　原本あんないとあり。異本による。

釋　○除目　チモク。こゝは縣召の除目なり。除目に縣召除目、司召除目、臨時除目の三種あり。除とは前官を除く意、目とは新任を記錄に記す意なるが、轉じて、除は拜官の義となれり。職原抄に「任レ官曰二除目一、授レ位曰二除位一、目名也、除二前官之名一記二當任一之意也」と見ゆ。臨時除目は、事のありたる時、臨時に行ふもの。司召除目は、內官卽ち京官の除目にて、多くは秋行はる。縣召除目は、單に縣召とも稱して、外官卽ち地方官の除目なり。縣は地方卽ち田舍の義、召は名簿を召す義にて、諸國の國司を任叙す。この時代は、多く正月九日より十一日まで、三日間行はれたりき。○申文　マヲシブミ。公卿、その他相當の地位にある者等が、闕官闕位ある時に、これに叙任せられんことを、朝廷に申請する文書なり。自らも書き、又推選者も書き、又文章家に依頼しても書く。○四位五位若やかに云々　おなじ任官を望みて、申文持ち歩くも、若くて既に四位五位に上れるは、花族の門閥家なれば、前途頗る有望にて、側目からも頼もしげなりと也。凡國司は、五位以下相當の官なり。こゝに四位をいへるは、職原抄に「雖二四位以上一、或隨レ望應二其撰一古今之制也」とあるが如し。「心ちよげなる」は、心ちよげなる者はの略。○頭白きなど　頭白き者などの略。○あないいひ　緣故を求めて、己が願望を

掌侍正六位上高階朝臣榮子誡惶誡恐謹言
請特蒙　天恩因准先例依當職勞被叙爵狀
右榮子謹檢按內依當職勞被叙爵之輩古今之例也就中掌侍者是劇務無雙何況勞積年積乎望請以天恩依當職勞被叙爵蒙
綸旨公節矣榮子誡惶誡恐謹言
康和二年正月十一日　掌侍正六位上高階朝臣榮子

奏上せられんことを頼むをいふ。「あない」は案內の略。○局　ツボネ。殿舍の內に、一區劃をなしたる所をいふ。貞丈雜記に「局の字、カギルとよむ。榮花物語に『里の殘りの人々は參りて、臺盤所にて、はかなく屏風に几帳ばかりをひきつぼねて、隙もなく居たり。云々』こは座敷を屏風几帳などに立てしきりて、つぼねたるをいふ。つぼぬるとはつゞむること也。宮仕する女の居所を局といふも、壁にて、一人一人にしきりて居ればなり」と見えたるが如し。今いふ部屋のことにて、曹司ともいへり。後世、女房を局と稱するも、局に住むゆゑの名也。○かしこき　俗のエライに當る。○心をやりて　心をゆかせてと也。みづから慰むるをいふ。○若き人々　この女房の局に相住したる、若き女房ども也。○いかでか「か」は反語。○よきに奏し給へ云々　「奏し」は天皇に申上ぐるに用ゐる、「啓し」は皇后、東宮などに申上ぐるに用ゐる語。○得たるはよし云々　望の官を得て任ぜられたるはよけれど、折角頼みても、何の官をも得ずに終ることが、憫れにいとほしと也。

評　この段は宮仕中の事を記したのである。雪も氷も物ともせぬ、威勢のよい前途多望の若殿原に、わづかに國司を先途とする、望すくない老者を配し、世間知らずの同情心にともしい若女房に、清少自己のあつい同情心を配した。婦人の內謁によつて僥倖を希ふのは、沙汰の限ではあるが、これが當時の官公吏一般の慣習であつた。中宮の御祖父兼家公御在世のころ、世中の人、公の妾の大輔といふ女のもとに參つて、名簿をさゝげ、司召の時は、皆その局により集つたことや、赤染衞門が、縣召のはじまる夜、雪の降るに、上東門院にまゐつて、息男周の事をお頼み申したことなど、實に枚擧に遑がない。さて元輔は國守で終つた人であるから、按察更衣の局に歌をいひ入れたことや、清少は例の惡舌をも揮はず、甚だふかい同情心を寄せてゐる。これらのにがい經驗を嘗めぬいて居るので、清少は老者に對して、多少哀愍の情なしには居られまい。「若き人

々は」とあるは、實にこの意を抱含してゐるものである。「眞似をし笑ふ」は何たる皮肉ぞ。「いかでか知らむ」は畫龍點睛の妙句。

縣召の情況は、下文、すさまじきもの　の段中に再叙したものがある。見合はせると、いよ〳〵面白い。

三月三日は、うら〳〵とのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。柳など、いとをかしきこそ更なれ。それもまだ、まゆに籠りたるこそをかしけれ。ひろごりたるはにくし。花も散りたるのちは、うたてぞ見ゆる。おもしろく咲きたる櫻を、長く折りて、おほきなる花瓶にさしたるこそをかしけれ。櫻の直衣に、出袿して、まらうどにもあれ、御せうとの君達にもあれ、そこ近くゐて、物などうちいひたる、いとをかし。そのわたりに、鳥蟲のひたひつき、いとうつくしうて飛びありく、いとをかし。

（考異）○三月三日は　原本は文字なし。一本による。

釋　○三月三日　三月をやよひと訓む。彌生の義にて、草木の繁く生ひ出づる故とぞ。この日は重三上巳の佳節とて、支那にては、水邊に出でて禊事を修し、踏青の遊をなす。わが邦にても、この日秡をなし、遊宴を張る。その書に見えたるは、書紀顯宗天皇元年三月上巳の條に「幸二後苑一曲水宴」とあるを初とす。その後一旦中絶せしが、村上帝の頃より復盛んに、朝廷及び貴族間にて行はれたりき。○照りたる　の下、をかしを略けり。○更なれ　いふも更なれの略。○まゆに籠りたる　柳の芽ぐみて、枝の節立ちたる樣を、蠶の繭に籠れるになぞらへていふ。○ひろごり　ひろがりと同語。○にくし　獸らしいの意。こゝは輕く用ゐたれば、憎惡の意に見るは非なり。

（口譯）三月三日は、うらら かに長閑に、日の照つたのが面白い。桃の花の、今咲き始めるのが面白い。柳など、甚だ趣のあることはいふまでもない。しかし、それもまだ繭のやうに、芽が籠つてゐるのが面白い。時過ぎて、葉が廣がつたのは厭らしい。柳の葉ばかりではない、すべての花も、散つたあとは不愍心に見える。面白く咲いた櫻を、枝長く折つて、大きな花瓶に挿したのが面白い。櫻の直衣に出袿した洒落れた形で、お客樣でもあれ、中宮樣の御兄弟の殿方でもあれ、そこの花瓶の近くにすわつて、話などをしたのが、甚だ面白い。又その花のあたりに、小鳥や蝶やの顏つきが、大層かはゆらしくて、飛まはるのが、甚だ面白い。

○花　櫻に限らず、弘くいへり。○うたて　案外にもの憂きこと、疎まるゝこと。雅語譯解に、イヨ〳〵ワルイといへる、やゝ近し。○櫻の直衣　袷の直衣にて、春三月の時衣なり。表は白なれど、裏の色は紫、赤、（黃櫨と茜とにて染む）濃蘇芳、蒲萄等、諸說一定せず。○直衣　ナホシ。高貴の人の常服にして、正服禮服に對して、直の服といふ義なり。古言に、たゞをナホといへり。袍と略同じかれど、後にハコエなし。（ハコエは、長きを短く着なす爲に、帶の上にて引たむるをいふ）これを著る時は、烏帽子に奴袴（指貫とも書く）を用ゐ、おなじ地の織物を、腰帶にす。この服、地下卽ち昇殿せぬ者は、大方着るを得ず。參議、納言といへども、禁中にては、勅免を蒙らでは着用するを得ず。故に、これをゆるしの衣ともいへり。春冬は、表は白きしゞらにて、文は浮線綾の丸、裏は平絹にて、若年の人は紫なるが、年寄るに隨ひ、次第に薄くし、淺葱にもし、老者は白を用ゐる。夏秋は裏なしの薄物の穀織にて、文は三重襷、色は若年の人は二藍、又は薄紫、これも成人に隨ひ、濃縹より薄縹となり、後には白となる。この織地、及び染色は概略にして、しかも後世の定なれど、ほゞ當時の制を推するに足らん。（附圖參照）

○出袿　イダシウチギ。「袿」は內着の義にして、直衣の下に着たる衣の裾を、常は袴の下に籠めて着るを、晴の時には、袴の外に垂れて、表衣の襴の下より見ゆる樣に出すを、出袿とも、出衣ともいへり。雅亮裝束抄に「衣を出すことは、衣、指貫（袴）を着たる上に、綿入りたる衣にても、打衣にても着て、裏うへの褄を、指貫の前より前によく引違へて、帶をする也。後は高く引上げて、前の褄先は、指貫の上に、たけに三四寸足らぬ程にあぐべし。後は直衣にても、袍にても、襴の裾より、緣を置きたるやうに見ゆまじき也。」（附圖參照）○まらうど　稀人の音便にて、客人のこと。○にもあれ　にてもあれの略。○御せうと　「せうと」は兄人の音便にて、兄をいふ。こゝは清少が宮仕せし定子の中宮の兄君をさす。伊周公、道頼卿などなるべし。○君達　キンダチ。攝家清華の子息をいひ、又大臣大將の子の、納言中將

などになれるを稱す。○そこ近く　「そこ」は花瓶のある所。○物などうちいひたる　「うち」は動詞を強むる爲の接頭語、「いひたる」の下、が。又はは。の辭を補ひて見るべし。○鳥蟲　「鳥」は鶯などの小鳥、「蟲」は蝶などなるべし。○額つき　顔付といふに近し。「つき」は形、樣子などの意。當時、女の容貌をいふ時は、髮付を頭付といひ、顔付を額付といへり。紫式部日記に「臥し給へる額付、いとらうたげになまめかし」と見えたり。實に生え際の樣子は、顔の美醜に關係するものにて、後世も、富士額の、何額のといへり。○うつくしうて　齋かる、意より出でて、愛らしけなるをいふ。

評　春遲々たる彌生の空に、桃の花柳の眉を點出し、柳の廣葉から落花に想到し、落花から「面しろく咲きたる櫻」の一章を飜出して、變幻自在な筆づかひである。櫻を花瓶にさすことは、古今集にも見え、その趣西洋式の挿花のやうに、只盛んに盛り込んだものらしい。櫻花爛漫と匂うた簀子のもとに、直衣姿のあて人がうち解けて、のどやかに談笑した樣は、どんなにか優美なものであつたらう。まして愛らしい蝶鳥が、花の香をしたうて、そのあたりを飛あるくとなつては、長閑さと優美さの頂上であらう。この光景を、作者はよく〳〵、身にしみて感じたかして、下文、清涼殿の丑寅の隅の一段に、丁寧反復して、今一層具象的に、印象ふかく書いてある。

祭の頃は、いみじうをかし。木々のこの葉、まだしげうはなうて、わかやかに青みたるに、霞も霧もへだてぬ空のけしきの、何となくそゞろにをかしきに、すこし曇りたる夕つかた、よるなど、忍びたる時鳥の、遠うそら耳かと覺ゆるまで、たど〳〵しきを聞きつけたらむ、何ごこちかはせむ。祭近くなりて、青朽葉、二藍などの物どもおしまきつゝ、細櫃の蓋に入れ、紙などにけしきばかり包みて、行きちがひもとなく譯もなく面白いのに、少し曇つた夕方、又は夜など、忍んだ時鳥の聲が遠く、聞違ひかしらと思はれる程に、ぼんやりしたのを聞付けたならば、どんな心持がせうか、實に何ともいはれぬ興味ある心持がせうぞ。お祭の當日近くなつて、その日の着物を作る料の青朽葉や二藍などの反物を、ぐる〳〵に卷き〳〵して、紙などに、一寸申譯ばかりに包んで、細櫃の蓋に入れて、使の者が、あちこちへゆき違つて持ち歩くのが面白い。小袖などにする末濃、村濃、卷染などの染物類が、平素よりも、趣があつて見える。お祭の行列に出る女の童が、當日の支度に、髮だけ洗てありくこそをかしけれ。すそ濃、むら濃、卷染など、常よりもをかしう見ゆ。わらべの頭ばかり洗ひ繕ひて、なりは皆なえ綻び、うち亂れかゝりたるもあるが、けいし、履などの「緒すげさせ。裏をさせ」などもて騷ぎ、いつしかその日にならむといそぎ走りありくもをかし。あやしう跳りてありく者どもの、さうぞきたてつればいみじく、ぢやうざといふ法師などのやうに、練りさまよふこそをかしけれ。ほどほどにつけて、親をばの女、姉などの、供してつくろひありくもをかし。

（考異）○いみじうをかし　の下、原本き文字あり。一本による。

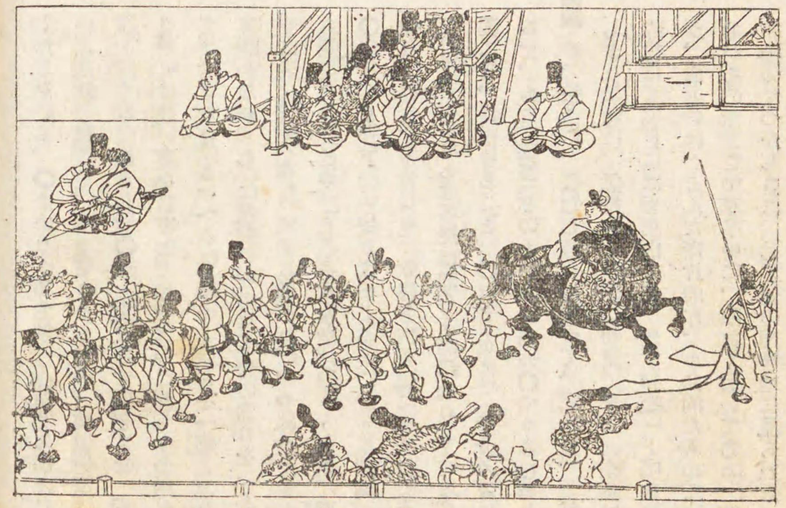
釋　○祭　京都の賀茂神社の祭をいふ。この日葵の蘰を以て社前を飾り、供奉の人々の衣冠につけ、車簾などに飾れば、葵祭ともいふ。四月中の第二の酉の日に行はる。祭前の午の日、齋院（賀茂社に奉仕する内親王）賀茂川原に出でて、御禊あり。申の日關白の賀茂詣あり。酉の日（當日）齋院の行啓あり。御輿なり。近衛中將奉幣の敕使として供奉し、前驅後陣甚だ壯嚴なり。地下の官人、御鉾御弓品々の神寶持ちつらねたるに、思ひ思ひの風流を盡し、花を飾りたれば、天下の壯麗を極む。一條の大路には、物見車立並び、棧敷所せきまで構へ、近縣諸國より出でたる見物人など群集して、立錐の地もなきに至る。祭終り勅使還りて、更に歌舞の遊あり。これを還立といふ。かく壯觀を極めたる大祭なれば、この頃の書に祭とのみあれば、皆この賀茂祭をさせる也。賀茂社は上下の別ありて、上賀茂は別雷神を祀り、下賀茂は別雷神の御母玉依媛、及び外祖父賀茂建角見命を祀れり。祭禮は欽明天皇の御宇より始り、嵯峨の朝、始めて齋院を置き、中祀に列せらる。宇多帝の時より十一月に臨時祭あり。○しけうはなうて　しけ

（口譯）賀茂祭のある時分は、ひどく面白い。夏季の初であるから、木毎の葉がまだ茂くはなくて、若々しく青ずんだのに、霞も霧も遮らぬ、澄んだ空の景色が、何

つて手入をして、まだ著物は不斷のまゝに皆へなへゝになつて、綻が切れて、埒もなくなりかゝつたのもあるが、「展子の鼻緒をたてさせよ、履の裏を打てよ」など騒ぎ立つて、何時お祭の日になる事かと待兼ねて、家の内をかけ歩くのも面白い。不斷は奇麗に跳りはねて歩く子供が、いよ〳〵お祭の衣裳を着てめかしたてると、まるで定者といふ坊さんのやうに、神妙に練つて歩きまはるのが面白い。その身分々々相應に、親とか叔母とかである女、又は姉などが、その兒の供をして、世話をして歩くのも面白い。

くはなくての音便。陰暦四月なれば、花散りて間もなく、さのみ茂らぬ也。○霞も霧もへだてぬ空云々　霞は春、霧は秋の水蒸氣なるが、初夏は晴れて、霞も霧もたゝぬなり。○そゞろに　漫に、取りとめもなくの意。○夕つかた　夕方のこと。「つ」は名詞と名詞との連屬を示す辭。○忍びたる時鳥　時鳥の聲の幽なるを、世に忍びたる趣に取做していふ。○そら耳　虚空をそらといふより轉りて、凡て實なき事をそら事といふ。こゝもその意にて、鳴きもせぬ聲を聞くをいふ。○たどゝしき　たどるの形容詞格にて、ハツキリせぬにいふ。おぼつかなし、確かならずの意。○聞きつけたらむ　の下、はを略けり。○何ごころかはせむ　「何ごころ」はいかなる心持なり。「か」は疑辭。○青朽葉　この衣、賀茂祭、最勝講の時多く用ゐる。普通には表は經青、緯黄の絲の織物にして、裏は青なり。但清水濱臣は「今は夏なれば、裏はなし。經萌黄、緯香色の織物なり」といへり。なほ青朽葉などにを見よ。○二藍　藍と紅花とにて染むる間色なれば二藍といふ。今の薄紫の如し。織物ならば經紅、緯藍なり。こゝは染色にても、織色にても通ずべし。○細櫃　唐櫃の細長きもの。下文に、その蓋に物を入れて持ちあるくことあれば、小形の物なり。普通の唐櫃は、貞丈雜記に「長持の短き物にして、足六つあり。棹を通して二人にて擔ぐ。小形のは棹の兩端に一つ宛懸けて、中央を擔ぐ」。○紙などにけしきばかり包みて　祭近くなりて忙しければ、丁寧にその織物を包みもせぬさま也。この句、上なる「細櫃の蓋に入れ」の句と上下にして聞くべし。さらずば文意違ふべし。「けしきばかり」は樣子ばかり也。○行きちがひ　使の者がなり。○すそご　裾濃にて、上の方を薄く、裾の方を濃く、紫或は紺などに染めたるもの。○むら濃　淡き濃きうち交ぜて、斑に染めたるもの。○卷染　纈纈染の一種にて、貞丈雜記に「卷染とは、絹にても布にても、固く卷きて、その上を細き絹にて固く卷きて、何色にても染めて後、卷きたる緒を解けば、卷きたるあとは白くなる也」。○わらはべの　童女なるべし。○なりは皆なえ　「なり」は衣裳をいふ。「なえ」は皺になりて、クタ〳〵したるをいふ。○けいし　和名抄に「屐履、久都々計之阿之太、一云屐子」とあり。屐子の音便なり。今いふ足駄の類にて、漆を塗りたるもの。嬉遊笑覽に、今の草履下駄なりといへるはいかゞ。又、けいし履と續くるはわるし。○緒をすげさせ裏をさせ　「緒をすげさせ」は屐子の鼻緒をたてさせよと也。「裏をさせ」は履の裏を打てよと也。二つながら命令格にて止めたり。安齋隨筆に「うらは末にて、前鼻緒を立てさせよなり」といへるは、屐子と履とを一物と思ひての說なるべし。○いつしかその日　「いつしか」は何時かなり。「し」は强辭。その日は祭の當日をいふ。○跳りてありく者ども　「者ども」は童どもをいふ。下に親、姨、姉などの供する事あれば、やはり女童ならん。江次第に、賀茂祭の行列をいへる中に「女車六輛、童女在二此中一」とある童女か。○さうぞき　裝束の尾音を活かせたる語なり。身支度すること。○いみじく　下の「練りさまよふ」にかゝる副詞。○ぢやうざ　定者なり。法會の時の行道に、香爐を執りて前行する役なり。尊勝寺供養記に「次打二金鼓一唄師發レ音、定者隨レ音徐行」とあり。長者と解し、東寺の長者とする說は取らず。○練りさまよふ　悠々とゆるぎあるく樣なり。「さまよふ」は小迷ふの義にて、彷徨すること。○ほど〳〵に　身分々々になり。○親をばの女云々　濱臣の說に「親姨なりける女、あるは姉などのといふ意也」。○つくろひありく　世話をしてあるくと也。

評　春の快活に、否むしろうはずつて、底には、一種のいひしらぬ哀愁を含んだ調子にひき換へて、やゝ引しまり氣味に、氣持のよいのは初夏である。奈良時代には、すでに卯花や時鳥やの景物が歌はれ、德川時代にも「目には青葉山ほとゝぎす初鰹」と喝破され、支那では「綠陰幽草勝二花時一」と作つた人もあるが、淸少のは、そんな斷片的な、小品的なものでは無い。初夏に仲夏に、全く深い憧憬をもつてゐたので、その意がこの草子中に、隈なく閃いてゐる。蓋し京都の土地が、翠黛三十六峯をめぐらして、その新綠のなつかしさは、殆ど他の都會地に見られないことが、たしかに、一因を成してゐると思ふ。



賀茂祭の圖

時鳥の忍音は、おちついた初夏の氣分を動搖させる點において、何ともいへぬ興がある。この興趣は、時鳥に對して、深い〳〵憧憬をもつた平安時代の、しかも、鶯よりは時鳥が優つてゐるとまでいひ張つた、清少の感じた程、眞じめに眞劍に、今の我々に感ぜられるかは、一寸疑問である。

賀茂祭ときては、その頃の天下祭で、五月の中旬は、都人士が、それが爲に、もう熱狂し切つたものである。源氏物語、葵の巻に、

祭のほど、御禊の日、上達部など數定りて、仕う奉り給ふ業なれど、覺ことにかたちある限、下襲の色、うへの袴の紋、馬鞍まで皆とゝのへたり。取分きたる宣旨にて、大將の君にも仕う奉り給ふ。かれてより物見車、心づかひしけり。一條の大路所なく、むくつけきまで騷ぎたり。所々の御棧敷、心々にし盡したるしつらひ、人の袖さへ、いみじき見物なり。

こんな風で、中には棧敷の前に、作り庭を拵へ、手摺などを廻して、風流を盡すやら、車に下簾に出衣に、色々の趣向を凝すやら、扇や何やの新調をするやらで、祭の行粧の外に、これが又見物で、人々

（年中行事繪巻）

が押出すのであつた。榮華物語、初花の巻に、

殿（道長）は、一條に棧敷の屋、長々と造らせ給ひて、檜皮葺高欄など、いみじうせさせ給ふ。殿は使の君（息賴通）の御出立の事御覽じはてゝぞ、御棧敷へはおはします。（使の君の）御供の侍雜色小舍人御馬副まで、し盡させ給ふ。今年はこの使の響にて、帥宮花山院など、わざと御車したてゝ、物を御覽じ、御棧敷の前、數多度渡らせ給ふ。帥宮の御車の尻には、和泉を乘せ給へり。花山院の御車は、金漆などやうに塗らせ給へり。網代の車を、すべてえもいはず造らせ給へり。—御車の尻に、殿上人引つれて、色々樣々にて、赤き扇をひろめかし使ひて、云々。

そこで勅使に立つた官人も、出來るだけの見えを張つて、一世の語草になるやうにと心掛け、

賀茂祭日、近衛使、中宮等使、餝二其車一、施二種々風流一者、治承三年右少將顯家朝臣五節風流也、爾來雖レ盡二華麗一、過差無レ及レ之、代々聖主惡二其驕奢一、弭レ之以二解官一、猶無レ懲。（新野問答）

といつたやうな始末であつた。

青朽葉、二藍などの織物、末濃、村濃などの染物は、その織目なり、色澤なり、染料の芳香なりが、

盡く初夏氣分を漂はせる材料であつて、又、「けしきばかり包みて」にも、「ゆきちがひもてありく」にも、その世話しない祭氣分が、あり〳〵としてゐる。そして主人や召使の扮裝から、自分達の見物の支度にまで、婦人連が、一年中の最大活躍を試みてゐる樣が、間接に描き出されてある。細櫃の蓋は、今日の盆の如き重寶な物がない時代だつたので、物など入れるには、長櫃細櫃の蓋をかへしたり、硯筥の蓋を使つたりしたものである。不斷着で、頭だけ餘所ゆきになつた童女は、面白い見つけ物である。愈盛裝しては、生まれ變つたやうに、大人しく澄しかへつた、その心象の變化は、祭氣分を最適確に現したものである。親族などが後見してあるくのは、丁度後世の祭禮の練小供と似てゐる。

清少が時鳥と祭とに、特殊の趣味を感じてゐたことは、下文諸處に散見してゐる。但時鳥を除いては初夏の景物なく、祭を除いては初夏の人事がない、といつてもよい位の時代であつたことも、記憶しなくてはならぬ。

以上一年中の面しろい季節を、たゞ正月、三月、四月を叙して、他をさし置いたのは、別に深意のあるのではないらしい。清少の例の氣まかせであらう。

四段

ことゞ〳〵なるもの　法師の詞。男女の詞。げすの詞には、必ず文字あまりしたり。

釋 ○ことゞ〳〵なるもの　言異なるものにて、詞の違へるをいふ。諸註、こと〳〵は異事にて、その事の變りたるものなりといへるはいかゞ。○けす　下衆の字音にて、賤しき者をいふ。上衆に對す。○文字あまりしたり　下賤の者は貴人と異なりて、いはでものことを、多く添へいふと也。

文字が附いてゐる。

（口譯）詞の調子の違ふもの　それは僧侶の詞、男の詞と女の詞である。下賤な者の詞には、貴人の詞とは違つて、きつと餘計な

（口譯）可愛く思ふ子を法師にしたのは、甚だ氣の毒である。それは甚だ賴もしい有難い事であるのを、世間では、一途に木の端か何ぞのやうに思つてゐるやうであるのが、甚だ可愛相である。そのうへ食物は、精進物の粗末なのを食ひ、寐る事をさ

評 長い歴史は、社會の團體間に、おの〳〵異なつた風俗習慣を形作ることになる。そこで、法師には法師向の詞が出來て、自然俗人とは、調子の變つた所もあらう。源氏物語にも、僧都入道などいふ人の詞は風變であるやうにいつてゐる。男女の詞は、藤原時代あたりでは、あまり違つて居ないやうに思ふのは皮相の見であつて、よく調べて見ると、甚だ相違してゐることが發見される。アクセントの相違は、一向にわからぬが、これも勿論あつた筈である。下衆の詞の文字あまり、これは横訛つて、餘計な音が添はるのをいふのだらう。あなやさなんめりをあらしやさんなんめりといつた例は、宇治拾遺にも出てゐる。徒然草に「古は車もたげよ、火かゝげよとこそいひしを、今はもてあげよ、搔上げよといふ、口惜しきこと也」とあるは適例ではないが、旁例にはなる。

五段

思はむ子を法師になしたらむこそは、いと心ぐるしけれ。さるは、いとたのもしき業を　たゞ木のはしなどのやうに思ひたらむこそ、いといとほしけれ。さうじ物のあしきを食ひ　いぬるをも。若きは物もゆかしからむ。女などのある所をも、などか忌みたるやうに、さしのぞかずもあらむ。それをも安からずいふ。まして驗者などのかたは、いと苦しげなり。御嶽、熊野、かゝらぬ山なくありくほどに、おそろしき目も見、しるしあるきこえ出できぬれば、こゝかしこによばれ、時めくにつけて、やすげもなし。いたくわづらふ人にかゝりて　物のけてうずるも　いと苦しければ

〈彼是いはれるよ。いくら法師でも若い者は、すべて物珍しくて奥床しからう。だから女などの居る所をも、何で忌み嫌つたやうに、覗きもしないでも居らう、覗きもせうさ。それをも世間では、思ひやりなくわるくいふ。まして驗者などの方となると、最も苦しさうである。金峰山や熊野や、そのほか足跡の到らぬ山もなく、靈山を巡拜するうちに、恐しい目にも遭ひ、難行苦行の結果、漸く祈禱の効驗があるといふ評判が立つてくると、あちこちに祈禱に呼ばれて、賣出してくるにつけて、氣安さうでもない。ひどく患ふ病人に關つて、その取付物を調伏するのも、甚だ骨が折れるので、疲れきつて居睡をすると「あの坊さんは祈禱もろくにしないで、居睡ばかりして怪しからん」と、傍の者が咎めるにつけても、當人の驗者は、ひどく立端がなく、何と思ふであらうと、氣の毒である。但これは昔の事である。當世風は、一般に法師の作法が亂れてゐるから、氣樂さうである。〉

こうじてうちねぶれば、「ねぶりなどのみして」ととがむるも、いと所せく、いかに思はむと。これは昔のことなり。今やうはやすげなり。

釋 ○思はむ子　かはゆく思はむ子なり。○法師になしたらむ　出家させたるをいふ。○心ぐるし　氣の毒の意。○ゐるは　法師になしたるをさす。○たのもしき業を　頼もしき事なるをと也。佛家の說に「一人出家すれば、魔宮皆動く」、又「一人出家すれば、七世の父母皆得脫す」、又「一子出家する時は、九族天に生ず」などいへり。況や自身の成佛は疑なければ、いと頼もしき業なるべし。○たゞ　ひたすらの意。○木のはし　木の切端なり。何の役にもたゝぬ詰らぬ物の比喩。もと佛家にて異端者を罵る、木頭の語に出づ。梵網經に「名爲ニ外道邪見人輩一、木頭無レ異」。○思ひたらむ　世人の思ひたらむと也。○さうじ物精進物のこと。シャウを直音サウによび、ジンの撥音ンを省きて、國語の調に諧へたり。「精進」とは佛道を勤めて怠らざるをいふ。その精進の爲に、葷酒肉などを忌みて、蔬菜のみを食ふより、醒臭のなき食物を精進物といふ。○あしきを　あしき物をと也。粗末なるをいふ。○いぬるをも　「いぬる」は寢ること。この句、精進物の續きにて、下文には續かず。但これにて切る時は、甚だ不完全なり。強ひて下に、安からずいはる、よなど補ひて聞かば聞くべし。「いぬるをも安からずいはる」とは、僧は平常、後夜晨朝などの勤行あり、臨時には、祈禱夜居などの爲の通夜あり。然るに、おこたりていねなどすれば、忽ち非難せらるると也。諸註、僧は妻帶せぬものなれば、孤閨の内また寂しからんと思はれて氣の毒なり、と解けるは強ひたり。こは次なる文意より押當にいへるものぞ。○若きは　若き法師はと也。○ゆかし　往しの義にて、心の其方に引付けられ往きて、なつかしくなるをいふ。乃ち見る物は見たく、聽く物は聞きたく思ふこと。○女などの云々　法華經安樂品に「若爲ニ女人一說レ法、不ニ露レ齒笑一、不レ現ニ胸臆一、云々」など、佛家の婦人に對しての禁戒、殊に多し。されば穢行無くとも、僧として女の局など覗けば、大に世間の非難を受くるに至る。○などか　「か」は反語。○さし覗かずも　僧とはいひながら同じ人間ゆゑ、女などのゐる所を覗かずして居るべきか、人並に覗くが當然なりと也。「さし」は接頭語。○驗者　ケンザ。修驗者のこと。法を修して效驗を現す僧をいふ。所謂山伏なり。役小角を祖とし、後世一宗となりて、天台眞言兩宗に屬し、大和の葛城山金峰山などを、その道場とせり。當時の習慣として、驗者を頼みて病氣平癒、惡鬼退散、息災延命など、あらゆる祈禱をなさしめたりき。○御嶽　金の御嶽の略。大和の金峰山のことにて、吉野山の高峯なり。吉野の藏王權現の奥の院とす。往時修驗者の苦行せし靈地にして、その躋攀を峯入といふ。役小角これを始む。峯入をなさんとする前には、千日の精進をなす。これを御嶽精進といふ。○熊野　紀伊東牟婁郡にある熊野權現なり。新宮、本宮、那智を熊野三所（或は三山とも）と稱し、その險葛城、金峰に次ぐを以て、修驗道の靈地とす。雍州府志に「往昔役行者入峰の路を慕ひ、熊野より大峰を經て吉野に出づ、之を順の峯入といひ、吉野より大峰山を經て熊野に出づ、之を逆の峯入といふ」。○かゝらぬ山なく　到らぬ山なくと也。「かゝる」はかゝづらふと同語にて、關り合ふをいふ。○しるしあるきこえ　その祈禱の效驗ある評判なり。○時めく　時に遇ひて盛んになるをいふ。「めく」は見え來の轉語にして、形容の意の接尾語。○物のけ　鬼魅の類をものといへり。和名抄に邪鬼を「アシキモノ」と訓めり。「けし」は氣なり。怪の字を書くは借字。死靈生靈の祟るにいひ、又形をあらはす妖鬼などにもいふ。こゝは前者の方にて、人の病に附込みて、惡しき靈の取付き惱ますこと。○てうずる　調伏すること。調伏に二種あり。一は衆生の諸惡行を制伏すること、二は神佛に祈りて怨敵魔障の者を降伏せしむることも也。こゝは後の方の意なり。當時物怪とみる時は、必ず僧をして調伏せしむ。續日本後紀に「延僧六十口、於紫宸常寧殿一令レ轉ニ讀大般若經一、以テ禁中有ニ物怪一也」とある是なり。產婦病人などあれば、醫

を聘せずして、まづ驗者を招きて加持祈禱せしむ。その病篤き時は、物怪の付きたるなりとて、その者の一人を選びて寄兜となし、讀經修法して、護法（法術者の使役する神）を使ひて、病者の物怪を寄兜に驅りうつす。物怪寄兜に移れば、我の何者なるかをいひ、又その怨恨の筋をいひ罵る。その時修驗者、寄兜に對して祈掛け、遂に物怪を服從せしむ。物怪服從すれば、病氣全快す。もし強き物怪に至りては、容易く寄兜に移らず。却りて修法者を打仆すことなどなり。紫式部日記に「宮內侍の局には、ちそう阿闍梨を預けたれば、物怪に引仆されていとほしうなりければ、ねんかく阿闍梨を召加へてぞ罵る。阿闍梨の驗の薄きにあらず、御物怪のいみじう強きなりけり」。○こうじて　困じての字音便。こゝは疲れ果てたるをいふ。○所せく　居所のなき心地するをいふ。「せく」は狹しの意。○いかに思はむと　さぞつらく苦しからんと也。同情の語なり。「思はむと」の下、あはれにいとほしなどの語を略けり。○今やう　今樣即ち當世風なり。

評 この段は、上の法師の詞から、系統を引いてゐる。「思はむ子を」から「いと心ぐるしけれ」までは一篇の大綱、餘はその細說、細說中「安からずいふ」までが第一節、それから終までが第二節である。

結末の「今やうは安けなり」の一句、ひどい冷語である。そして力ある掉尾の筆である。通篇、僧侶へ同情した文字のやうではあるが、よく〳〵味ふと、意外にも、僧侶を輕侮した意が彷彿するであらう。清少はもとより、大した信敎者でもない。出家と聞く時は、理のうへではとにかく、情のうへでは、人一人捨てたやうな氣がしたのらしい。

奈良の舊佛敎でも、叡山高岳の新佛敎でも、社會に對して、敎相の方は、直接交涉の薄いため、自然敬遠され、事相の方は、迷信ふかい時代の要求に應じて、盛んに歡迎され、諸宗きそつて、祈禱修驗の業を力めるやうになつた。高が畿南の山だから知れてはゐるが、その頃の熊野御嶽と來ては、隨分おそろしい魔所だつたらう。狂言の言草ではないが、そこで飛ぶ鳥も祈り落すほどの法力を修し得てからが、法驗の有無は、覿面の仕事であるから、實にたまらない。しかしそれが、常習的に餘りなり過ぎると、遂には形式的の事になつてしまつて、大した期待も置かれないことになるから、驗があながち無くても、大變に氣安い譯もあらう。隨つて驗者の氣風がすさんで、人が何といはうと、平氣で居るやうになつた。下にも「あはれ驗なしやと打いひて——欠伸をおのれ打してより臥しぬる」とある。すさまじいには違ないが、それでも濟んだ。これが「今樣は安けなり」といはれる所以である。

（口譯）大進生昌の家に、中宮の行啓遊ばされるのに、東の門はお成の爲、四足門に造りかへて、それから御乘輿はおはひりになる。北の門から、女房達の車などがはひるに、守衛諸所に人影もないから、その儘に乘打せうよと思つて、車にゆられて髮つきの惡い人も、格別繕はず、車を緣に橫付にして下りる筈のものとのみ油斷し

六段

大進生昌が家に、宮の出でさせ給ふに、東の門は四足になして、それより御輿は入らせ給ふ。北の門より、女房の車ども、陣屋のゐねば入りなむやと思ひて、頭つきわろき人も、いたくもつくろはず、寄せておるべきものと思ひあなづりたるに、檳榔毛の車などは、門ちひさければ、さはりてえ入らねば、例の筵道敷きておるゝに、いとにくゝ腹だたしけれど、いかゞはせむ。殿上人、地下なるも、陣に立ちそひ見るもねたし。御前に參りて、ありつるやう啓すれば　宮「こゝにも人は見るまじくやは。などかは、さしもうち解けつる」と笑はせ給ふ。清「されど、それは、皆めなれて侍れば、よくしたてゝ侍らむにしこそ驚く人も侍らめ。さてもかばかりなる家に　車入らぬ門やはあらむ。見えば笑はむ」などいふ程にしも、生昌「これまゐらせむ」とて、御硯な

て居たのに、大形の檳榔毛の車などは、門が小さいから、閾へてようはひらないから、お定りの筵道を敷いて、車から下りるのに、甚だ氣にくはず腹が立つけれど、どうせうぞ、致方もない。自分達が筵道を練つて行くと、殿上人も地下の官人も、詰所の脇により添つて見物するも憎らしい。中宮のお前に參つて、以上の次第を申上げると中宮が「何も外ばかりではない。此處でも人が見まいことかう、なぜそんなに打解けて居るぞ」とお笑ひなさる。「けれど、それは朋輩同志で、皆私どものだらしもない所を見馴れて居りますから、よく身じまひを致しませうなら、却つて喫驚する人もございませう。一體まあこれ程の家に、車のはひらぬ門といふがあらう事か。生昌が見えたら笑つてやらう」などといふうちにさ、主人生昌が來て「これを差上げませう」といつて、隔の御簾の下から、御使料の硯を差入れる。「いや、貴方は甚だ怪しからんお方であります。なぜあの門を、狹く造つて住んでお出でなさるのか」と詰ると、生昌が笑つて「この家の程合と自分の身分とに相應させたのです」と返答する。「けれど、門の出來るだけを高く造つた人も、聞及んでをりますわ」といふと、生昌が「まあ恐ろしい」と驚いて「それは于定國の故事でございます。年

どさしいる。清「いて、いとわろくこそおはしけれ。などてか、その門せばく造りて住み給ひけるぞ」といへば、笑ひて、生昌「家のほど身のほどに合せて侍るなり」といらふ。清「されど、門のかぎりを、高く造りける人も聞ゆるは」といへば、あなおそろしと驚きて、生昌「それは于定國がことにこそ侍るなれ。ふるき進士などに侍らずば、承り知るべくも侍らざりけり。たまたまこの道にまかり入りにければ、かうだに辨へられ侍る」といふ。清「この御道もかしこからざめり。筵道敷きたれば、皆おちいりて騒ぎつるは」といへば、生昌「雨のふり侍れば、げにさも侍らむ。よし〳〵又仰せかくべきこともぞ侍る。罷り立ち侍りなむ」とていぬ。宮「何事ぞ、生昌がいみじうおぢつるは」と問はせ給ふ。清「あらず。車の入らざりつることといひ侍る」と申しておりぬ。

釋 ○大進　ダイジン。皇后付の役人にて、判官（三等）に當る。職原抄に中宮職の官名を擧げて「大夫（從四位下相當）權大夫、亮（從五位下）權亮、大進（從六位上）少進、大屬、小屬」とあり。○生昌　贈三位平珍材の二男にして、中納言惟仲の弟。文章生より中宮大進となり、但馬守となる。後正四位下播磨守に至る。榮花物語に「たゞこの但馬守（生昌）ぞ、よろづ賴もしう仕うまつる」とあり。○宮の出でさせ給ふに　「宮」は一條帝の中宮藤原定子の御事。關白藤原道隆の女にして、作者の奉公せし主君なり。「出でさせ給ふ」は、宮中を出でて餘所に行かれたるをいふ。これを諸註、職の曹司より出で給ふといへるは誤にて、この時は內裏燒失後にて、一條の今內裏の北殿より出で給ひし也。○四足になして　四足門になしてと也。「四足門」は扉のつきたる親柱の前後に、二本宛の添柱を立てたる門をいふ。高貴の家の門にして、海人藻芥には「大臣以上ならでは、此門造らず」とあり。生昌は六位の小身者なれども、特に中宮の御成門として造られし也。○御輿　ミコシ。輿は「車の、輪なきなり」と和名抄に見ゆ。文武天皇の時の制に「天子の他は之に乘るを得ず。但皇后、東宮は許さる」とあり。中古以後この制亂れ、公卿以下、僧侶に至るまで、往々乘輿するに至り、その種類も樣々出來たれど、なほ鳳輦、葱花輦は天皇に限り、皇后は葱花輦に召す。（附圖參照）○女房の車ども　供奉の女房の車共なり。○陣屋の居ねば　陣屋の人の居ねばと也。禁中ならねば、警固の武官も陣に詰めて居らぬ也。「陣屋」は番所といふが如し。さて生昌邸の北門は、後にも「陣に立添ひ」とあれば、陣屋のみありて、無人なりしと見ゆ。陣を參看せよ。○入りなむや車ながら門を入りなむやと也。「なむ」は推量の助動詞、「や」は歎辭。○かしらつきわろき　髮の下端などの亂れたるをいふ。なほ、額つきを見よ。○寄せて　車を緣に寄せてと也。○あなづりたるに　油斷したるにといふほとの意。これをおもく見て、大進の家なれば馬鹿にしてとまで說くは、當時の語例を辨へざる誤なり。○檳榔毛の車　ビラウゲノ車。ビラウは又ビリャウともいひて、檳榔の字音なり。この車は檳榔とはいへど、實は蒲葵の葉にて、車蓋を覆ひ飾りたる車なり。貞丈の說に「檳榔は蒲葵なり。大きくして櫻梠の葉の如し。云々」。「毛」は鎧の威毛などの毛と同じく、飾のこと。西宮記に「檳榔毛太上天皇以下四位以上通用」と見え、蛙抄に「女房又乘レ之」とあり。桃華蘂葉に「檳榔毛赤色簾（錦緣）蘇芳末濃下簾、纐纈端帖、或時被レ用二青簾（革緣）青末濃下簾、金銅金物榻」と見えたり。（附圖參照）○筵道　エンダウ。庭上を步むに、官人は裾を曳き、婦人は袴裳など曳くを以て、道に筵を敷くをいふ。延の緣に絹を付くることあり。上に毯又は錦を敷き、又布毯とて白布を布く。○地下なるも　地下なる人もと也。「地下」は殿上人に對したる稱にて、昇殿許されぬ五六位以下の官人の稱。○陣に　陣屋にと也。○ありつるやう　ありし次第にて、車より下りて、殿上人以下の人々に、打解けたる姿を見られしをさ

す。○こゝにも　こゝにて。もと也。この家の内をさす。○見るまじくやは　やはあるの略。○さしも
さもに同じ。「し」は強辭。○笑はせ給ふ　宮の笑はせ給ふと也。○目なれて　見馴れてにおなじ。○
よくしたてゝ侍らむにしこそ　「よくしたてゝ」は立派に繕ひたてゝと也。「にしこそ」のしは強辭。○
さてもかばかりなる家に　「さても」は俗のソレハサウトシテモに當る。「も」は歎辭。「かばかりなる家
に」は、行啓もあるべき程の家なるをいふ。○見えば笑はむ　生昌が見えば、門の小なる事を笑はんと也。
○これまゐらせむ　これを宮に獻ぜんと也。「これ」は、今生昌自身の持來れる硯などをさす。○御硯な
ど云々　御硯などを簾の中にさし入ると也。中宮の持たせられし御硯を、生昌が持參して、御側の女房
に渡すなり。○いで　發語にて、俗のマア、イヤサなどに近し。○わろくこそおはしけれ　貴方は怪し
からぬと也。○笑ひて　生昌の笑ひてと也。○門のかぎりを——聞ゆるは　「限」は俗の出來ルダケに同
じ。「聞ゆるは」のは、は歎辭にて、今口語に用ゐるのと同じ。○驚きて　生昌の驚きてと也。○于定國
定國は前漢の于公の子。門を高く造りしは父于公なるを、于氏の顯れたるは定國の時なれば、しかい
へるならん。前漢書、蒙求などによれば「于公は東海郯の人。獄吏となる。獄を決すること平なり。曾て
その閭門壞る。父老之を治む。于公曰く『少しく門を高大にして、駟馬高蓋の車を容れしめよ。我獄を
治むるに陰德多し。子孫必ず興る者あらん』と。果して定國に至り、宣帝の時丞相となり、西平侯に封
ぜらる」とあり。○ふるき進士　いまだ博士となるを得ざれど、螢雪の功を積みたる學者をいふ。進士
を見よ。○進士　シンジ。士を進むる義にして、諸國の國學にありて、才學秀でたる者を選擧して、之
を式部省へ進む。省にて試驗をなし、及第したる者は、大學生に補す。大學にて學問をなし、更に試驗
を受けて及第したる者を擬文章生とし、更に宣旨によりて、式部の輔これを試驗して、及第したる者
を文章生、又は進士といふ。こはもと唐制に倣ひしものにて、大寶令の定むる所なり。進士といふ語は、

功積んだ進士などでありませずば、承知しさうにもない事であります。私は偶然にも、この道（學問の道）にはひつて居りましたので、お話の筋を、かういふ事であるとだけでも合點致されます」といふ。その御自讃の道も、えらくはない御樣子です。論より證據、無暗と筵道を敷いたものだから、下のぬかるみがわからず、皆凹たまりに踏込んで、騷動しましたわ」と、學問の道と筵道の道とを引かけて、洒落れてからかふと、生昌が「なる程雨が降りますから、ほんにさうでもありませう。まゝよ、此處に居ては、又面倒な事を、おいひかけなさるかも知れません。お暇して行きませう」といつて出て往つた。すると中宮が「生昌がひどく怖がつたのは何事ぞ」とお尋ね遊ばされる。「いゝえ、只門に車のはひらなかつた事を申しましたのです」とお答へ申上げて、お前を下つた。

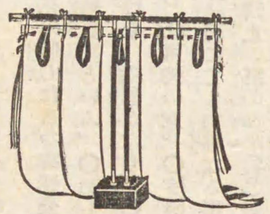
（口譯）おなじ部屋にゐる若い女房達と一所に、眠いから何もかも知らず、夢中になつて皆寢た。この部屋は、東の對の屋のうちで禮記の王制に見ゆ。○たま〳〵　この道に　「たま〳〵」はたまさかに同じ。この道とは漢學の道をさす。生昌は大學に入り、文章生を經たる人なれば、しか白らいへる也。○まかり入り　入るを敬ひていへり。もと「まかり」は退き去るの敬語なるが、轉じて、ひろく往來するにいひ、更に他語の上に熟語の如く結び付きて、單なる敬語となれり。竹取物語に「舟を海にまかり入れて」とあり。こゝもその意。○かうだに　かくだにの音便。○この御道もかしこからざめり　生昌が學問の道をさして「この道」といへるを、清少は戲れて、道路のことに取做し、筵道の陷りたる不足をいへり。「かしこからざめり」は不出來なるをいふ。○おちいりて　泥濘のうへに筵道敷きたれば、知らずして踏込みたるをいふ。○騷ぎつるは　「は」は歎辭。○けに　成る程、まことになどの意。○よし〳〵　「よし」は可なりとゆるす語にて、心に叶はねどもせん方なくて、打まかする時にいふ。又、單に諾ふにも用ゐる。○また仰せかくべき云々　又面倒なる事をお話しかけなさるかも知れぬと也。清少の攻擊を危み怖れたる趣なり。「もぞ」は萬一を氣づかふ意の辭。○いぬ　生昌の去ぬると也。○何事ぞ——をぢつるは　怖ぢつるは何事ぞとあるべきを前後せさせたり。○問はせ給ふ　中宮の問はせ給ふと也。○あらず　他の事にはあらずの略。今俗にイヽエといふに同じ。○申しておりぬ　申して局に下りぬと也。宮の御前を退きて、わが部屋に下りたるをいふ。

おなじ局に住む若き人々などして、よろづの事も知らず、ねぶたければ皆寢ぬ。東の對の西の廂かけてある北の障子には、かけがねもなかりけるを、それも尋ねず。家ぬしなれば、案内をよく知りてあけてけり。怪しうかればみたるものゝ聲にて、生昌「さぶらはむにはいかゞ」と、數多たびいふ聲に、驚きて見れば、几帳のうしろに立

あるが、西側の廂の間をかけて、北へ折廻して立てゝある北の襖障子には、戸締をつける懸金もなかつたのを、眠いまゝに、その有無も調べない。ところが、生昌はこの家の主人公だから、勝手をよく知つて、その障子を開けて來た。變にしや枯れた調子の聲で「そこへ參りましては如何でせうか」と、度々いふ聲に、目が覺めて見ると、几帳の後に置いた燈臺の光もカン〳〵して、まる見えである。障子を五寸ほど開けて、それは生昌がいふのであつた。ひどく面しろい。一向に、こんな女の部屋に忍んで來るやうな好色めいた事は、少しもしない者が、中宮樣が自分の家にお出なされたと思つて、むやみに勝手な眞似をすると見えると思ふのも、ひどく面白い。自分の傍に寢て居る若女房達を起して、こつそりと、「あれ御覽なさい。あんな見た事のない者がゐる樣子ですよ」といふと、皆寢てゐる頭を擡げて、そちらを見やつて、ひどく笑ふ。さて改つて清少が「それは誰です。あらはですのに」と咎めると、生昌が自分から名乘つて「いや家主の私が、この部屋主の貴女と、御相談したい事がございますので、それで參つたのです」といふから「私は先刻、門の事をこそ申しました。が、こゝの障子をお開けなさいとはいひましたかい」となぶると、生昌が仕

てたる燈臺の光もあらはなり。障子を五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。更にかやうのすきゞしきわざ、ゆめにせぬ者の、家におはしましたりとて、むげに心にまかするなめりと思ふも、いとをかし。わが傍なる人を起して、清「かれ見給へ。かゝる見えぬものあめるを」といへば、頭をもたげて見やりて、いみじう笑ふ。清「あれは誰そ。けそうに」といへば、生昌「あらず。家あるじ、局あるじと定め申すべき事の侍るなり」といへば、清「門の事をこそ申しつれ、障子あけ給へとやはいふ」。生昌「なほその事申し侍らむ。そこにさぶらはむは、いかに〳〵」といへば、女房達「いと見苦しきこと。更にえおはせじ」とて笑ふめれば、生昌「若き人々おはしけり」とて、引きたてゝいぬるのちに、笑ふことといみじ。あけぬとならば、只まづ入りねかし。消息をするに、「よかなり」とは、誰かはいはむと、げにをかしきに、つとめて、御前に參りて啓すれば、宮「さる事も聞えざりつるを、よべのことにめでて、入りにたりけるなめり。あはれ、あれをはしたなくいひけむこそいとほしけれ」と笑はせ給ふ。

釋 ○若き人々などして「して」は、にて、と共になどの意。○よろづの事も知らず　睡さに何事も知らずと也。「ねぶたければ萬の事も知らず」とあるべきを前後せさせたり。○東の對　「對」は對の屋の義。次の寢殿造を見よ。○寢殿造　古の上流社會の家造なり。中央に寢殿を南面に建て、その東西或は北に、對の屋を建て、廊を以てつらねたり。寢殿は主殿とも稱して、主人の住む所。對の屋は家内眷屬の居る所なり。對とは主殿に對するの義。三内口決に「對の屋二、東を一の對と號し、西を二の對と號す。北の對と東西に鳥翼の如く作る。其大さ主殿と相同じ」と見えたり。又廊の端、池に臨める所に一屋を設け、泉殿或は釣殿と稱す。(附圖參照)○廂　今いふヒサシと異なり、屋内の間の稱なり。寢殿の中央を身屋といひ、その周圍の外側の間を廂といひ、廂の外の緣側を簀子といふ。身屋は廂の床よりすこし高く、廂は簀子より高し。その界には、上下に長押あり。(附圖參照)○障子　サウジ。サウは、シヤウの直音なり。家屋雜考に「屏障とて、古くは建具、衝立、戸格子などを、凡て障子といへり。今の障子を、古へは明障子といひ、薄紙の代に絹布を張る故に、薄物の障子ともいへり。厚紙にて表裏を張りたるを襖障子といひ、其紙に紋柄あるを唐紙障子といへり」と。こゝの障子は襖障子なるべし。○かけがね　濱松中納言物語には「かきがね」とあり。懸金の義。戸と戸との間へ渡して、開かぬやうにする金具なり。狹衣物語に「疊紙をさし入れて障子のかけ金を探り給ふに、離れぬるやうなれば、たゞ少しあけて」とあるにて、大凡を知るべし。



几帳（裏）

○尋ねず　懸金の有無も調べずして、そのままにしたりと也。○怪しう　俗のヨカシナ、或はヘンナといふに同じ。○かればみたる　皺枯れたるをいふ。「ばいふ。通常は高さ三尺なれども、廂の間、母屋などの簾のつらに立つるは四尺なり。三尺の几帳は、手の長さ三尺六寸、帷は四幅又五幅にて、長五尺三寸五分、表は織物など、裏は平絹などを用ゐる。夏冬にて相

方がなしに「やはりその門の事を申しませう。そこに參りましてはどうですか、どうですか」とくどくいふと「それは非常に見苦しい事です。無理から、此處へは、決してようはひられますまい」と、大勢で笑ふ樣子なので、生昌も氣がついて「外に若い人達がお出でしたなあ」といつて、障子を締めて往つた後で、笑ふことは非常である。一體男が忍んで來て、女の部屋を開けたといふ以上は、只躊躇せずに、默つてまづ這入るがよいさ。參つてよいかなど案内をするにゝよいからさあお這入んなさい」とは誰がいはうぞいと思ふと、ほんに馬鹿げて可笑しいので、整朝、中宮のお前に參つて、この話を申上げると、中宮の仰に「生昌は、日ごろ好色めいた噂もなかつたのを、お前の昨夜の門の話に感心して、忍んで往つたのと見える。まあの律義な男を、立端のないやうにきめつけたのがさ、氣の毒である」といつて、お笑ひ遊ばされる。

結燈臺

菊燈臺

切燈臺といひ、上下菊の花の形したるを菊燈臺といひ、細く丸き木を三本組みて結び、足をひろげ立て、その上に油土器を置くを結燈臺といふ。○あらはなり　露顯なりと也。光のカン〳〵して、物の丸見えなるをいふ。○いふなりけり　生昌がなり。○更に　下の「ゆめにせぬもの」にかゝる副詞。○いみじうをかし　この「をかし」は可笑の意。○すき〳〵しき業　好色めきたる事をいふ。「すき」は好きの意なれば、「すきぐしき」は何にても物好なる事をいふべけれど、多く好色の方にいへり。○ゆめに　決して、少しもなどの意。禁止の辭のゆめ(努)の轉用。○家におはしたりとて　わが家に宮のおはしたりと思ひてと也。○むけに　一向に、一概になどいふ意。○なめり　なるめりの略。「めり」は見えありの約にて、しか見ゆる、樣子などの意。○かれ見給へ——あめるを　清少が生昌に聞えぬやうに、同宿の女房にいひたる詞なり。「見えぬもの」は見し事もなき者、卽ち見馴れぬ者の意。「あめる」はあるめるの略。「を」は歎辭。○かしらをもたげて云々　起されし人頭を擡げて、其方を見やりてと也。「もたげて」は持ちあげての約。○あれは誰そけそうに　清少が向き直りて、生昌を咎むる詞なり。「けそうに」は顯證にこそあれの略。○顯證　ケソウ。ケンショウの字音便。あらはなるをいふこの時代の通用語。○あらず　誰にてもなし、別人にあらずなどの略と見るは正格なれど、この時代には、それよりも輕く使はれたる語なるが如し。上のあらずを見よ。○家あるじ局あるじと　「家あるじ」は家主にて、生昌自らいふ。「局あるじ」は部屋主にて、清少をさす。○定め申すべき事　相談して決すべき事となり。○いへば　生昌のいへばと也。○なほその事　やはりその門の事をと也。○いかにといへば　いかにと生昌のいへばと也。○いと見苦しきこと云々　若女房達の詞。いと見苦しき事なり、更にこゝまではえおはせじといひてと也。「えおはせじ」はよう來られますまいの意。○笑ふめれば　人々の笑ふめればと也。○引き立て、　生昌が障子を引立てゝと也。○笑ふこと　人々の笑ふことと也。○あけぬとならば云々　婦人の寢室に夜深く來るべきことかは、されど一旦障子を開けたりとならば、まづ〳〵躊躇せずに入り來れかしと也。「ぬ」は現在完了の助動辭、「ね」は懇に命ずる意の辭。「かし」は强むる辭。○消息　セウソコ。易の註に「消息は進退をいふ」。また文選の註に「消は往なり、息は來なり」とあり。書札を消息といふは往來の義なり。轉りて音信案内などの意に用ゐる。こゝはおとづれのこと。○よかなりとは誰かはいはむ　誰かはよかなりとはいはむ」を、前後にいへり。「よかなり」は善くあるなりの約。「いはむと」の下、思ふにを略けり。○けにをかしきに　若き人々の「笑ふことといみじ」といふを承けたり。○啓すれば　よべ生昌の來りしことを啓すればと也。○さる事も　以下中宮の御詞。「さる事」は好色らしき事をさす。○よべの事にめでて「よべ」は昨夜をいふ。「夜邊の義」。音便によんべともいへり。俗にはユフベといふ。「めで」は好しと思ひて愛し慕ふこと。「昨夜の事」とは于公高門のことをいふ。○あはれあれを　「あはれ」は嗚呼と同じ歎辭。「あれ」は彼なり。生昌をさす。○はしたなく　不都合などいふに近し。「はしたなく」は半にて、どちらつかず不完全なる意。「なし」は形容の接尾語にて、無の意にあらず。○いとほし　痛しの轉じたるにて、不憫なる、氣の毒なるなどの意。○笑はせ給ふ　宮の笑はせ給ふと也。

評　中宮が生昌の第にお出ましになつたのは、長保元年八月と、同二年八月との二回である。こゝは文中、門を四足に造り直すことがあるから、最初の時と定める。日は九日であつた。さて行啓は、何時も御懷妊の爲であつて、わが邦古來の習慣は、產を不淨として、別に產屋を造つた程だから、豫め禁中をおりて、里第に就かれる習はしであつた。(中宮御年廿四、清少卅四五?)

中宮の當時の境遇は、實に慘憺たるものであつた。御父道隆公、長兄道頼卿、御母高内侍、外祖父高階成忠卿は、この四年間にうち續いて薨逝し、御叔母東三條の女院(藤原銓子)は、この一門と甚だ御不快であり、次兄伊周公、弟隆家卿は、花山法皇を射奉つた罪によつて流罪、一旦召還されたけれども、今は官祿もない日陰者である。他の昵近者は、盡く叔父道長公に阿つて、殆どふり向く者もない。そのうへ、前度の里第であつた東三條の二條の宮は、早く燒失してしまつたので、據なく、中宮職の大進生昌の三條の宅に出られたのである。生昌はもとより、昇殿もゆりない程の下萬だから、その門とても、板の門屋であつたのを、急に四足門に造り變へて、人目に立たぬやうに、夜に入つての行啓、そのあわたゞしさが想ひやられる。今年四歳になられた姫宮(修子内親王)も、絲毛車で、一所にお出ましである。

憎いのは道長の擧動であつた。彼は元來兄道隆とは不和であつたが、道隆、道兼二兄の死を幸として、帝(一條)の母后東三條院の旨を冀つて、急に勢力を得て關白となり、悉く中宮の一黨を陷れてもまだあき足らず、この日わざと廷臣達をひき連れて、宇治の別莊に避暑にいつてしまつた。中宮行啓の刻限は迫つても、事を執るべき公卿は、一人も居合はせない。小野宮實資が「似レ妨ニ行啓事ヲ」と憤慨したのも、信に尤もである。中宮の御心中は、どんなであらせられたらう。多分奉仕の女房達まで、悲憤の涙に咽んだであらう。漸く行粧をつくろつて、生昌の宅に來てみれば、御成門のほかは舊のまゝなので、大形の車は這入らず、雨の泥濘に莚道は落込む。重ねぐ忌々しさの腹愈に、端なく、于公高門の一問答が展開された。

「こゝにも人は」の中宮の警語に對し「されどそれは」の負をしみ、ふくれ顏の清少に「見えば笑はむ」と、手ぐすね引いて待掛けられては、生昌のやうな律義者は、一たまりもあらう筈がない。「家のほど身のほどに」と逃げたのは、生昌一生の出來と見えたのを、疊みかけて、于公高門の大段平を、眞向から浴せかけた。「たま〳〵この道にまかり入りにければ」と、多少わが地歩を占めて、面目を保たうとすると、忽ち莚道のシッペ返しに茶化されて、肝をつぶして逃げ出す。この問答の呼吸、眞に息も吐かれぬ面白さである。宮の御尋に「あらず云々」とすまし込んだのは、舞劍忽として室に入るの觀がある。

日暮からの行啓、生昌の第に落着くまでには、相應に時間を費したのであらう。されば若女房は勿論のこと、清少も眠くなつて、懸金をさがす元氣もなく、そのまゝ寢入る、ありさうな事である。几帳の「うしろ」の燈臺の光に、生昌の顏を映し出させたのは、奇妙な筆である。生昌が馴れぬ情事に躊躇した態が、「五寸ばかり」の一語に點出されてゐる。例の女房氣質、まして口達者の清少だから、何で猶豫があらうぞ。忽ち「見えぬ者」の反語を吐いて、若女房までゆり起して、飜弄し盡す。さて「あけぬとならば、只まづ入りねかし」と情事の指南、小心者の生昌と對照する時は、飽くまでをかしい。

堅朝中宮に、この事を啓上した點を以て、當時の男女間の風儀が、比較的嚴格であつたと合點してはならない。これは只頑固一點ばりの生昌が頓間さ加減の可笑しさに、お耳に入れただけである。まことは「消息をするに、よかなりとは誰かはいはむ」といつてるやうに、默つて忍込むがよいと、頗る開放的なのである。しかも「誰かはいはむ」の一語が、清少一人が、かう放縱に大胆であつた譯でもなく、當時一般の習俗が、極めて情事に對して寛大であつたことを、證明してゐる。殊に家庭に遠ざかり、尊長の手を離れた宮仕の婦人達は、淡々しいと男達から思はれる程に、この道は自由であつた。

中宮が人格者であらせられたことは、この草子全部をとほして、明らかに拜察される。生昌に對して下されたいと濃やかな御同情の御詞、當人陰で聞いたら、嬉し涙に咽ぶであらう。さてこそこの生昌は、格別な忠勤者として、度々の御產にもこれ一人、一人頼もし人で、お仕へ申したのである。生昌の兄惟仲は、この時五十六歳の老人だから、生昌も少くとも、五十歳前後であつたらう。けれど清少とても、既に三十

（口譯）姫宮樣の御方に仕へて居る童女の着物を拵へさせるやうにと、中宮から生昌に仰せられると、生昌が「その童女の袙の上張は、何色に致しませうか」と伺ひ申すを、又々女房達が笑ふのも尤である。（チヤンと汗衫といふ名があるではないか）又、生昌が中宮に「姫宮樣のお膳は、あたり前の品では大き過ぎて、見つともないで御座いませう。チウセイ折敷、チウセイ高坏で、よく御座いませう」と、伺ひ申すを「それでこそ、袙の上張を着た童女も、御前に出よからう」と冷かすを、中宮が「世間並の人のやうに思つて、生昌をさう嘲り笑ひなさるな。彼はただ生眞面な人物であるものを、可愛いさうに」と仰しやつて、御とどめなさるのも面白い。

を四つか五つも越した姥櫻であつて見れば、生昌の局這入も、あながち不釣合でもなかつたらしい。

姫宮の御かたのわらはべの裝束せさすべきよし仰せらるゝに、生昌「わらはの袙のうはおそひは、なに色に仕うまつるべき」と申すを、又笑ふもことわりなり。生昌「姫宮の御前のものは、例のやうにては、にくげにさぶらはむ。ちうせいをしき、ちうせい高つきにてこそよくさぶらはめ」と申すを、清「さてこそは、うはおそひ着たるわらはべもまゐりよからめ」といふを、宮「なほ例の人のやうに、かくないひ笑ひそ。いときすぐなるものを、いとほしげに」と制し給ふもをかし。

釋 ○姫宮　一條帝第一の皇女修子内親王を申す。御母は中宮定子にして、長德二年十二月十六日御誕生。長保二年、母后の崩にあひて宮中に養はれ、一品に累進、三宮に準ず。後尼となり、永承四年薨ず。御年五十三。○わらはべ　童女なり。○裝束せさすべき由　衣裳を着すべき由をと也。衣裳を着するは、卽ち衣裳を作ることなり。裝束をサウゾクと直音に讀む。○仰せらるゝに　宮の生昌に仰せらるにと也。○袙　アコメ。間籠の義。上衣の下に着籠むる衣なり。後世の小袖に當る。長けは普通の衣より短く、幾枚も重ねても着る。普通、男は下襲の下に着、童は汗衫の下に着る。地は小葵の綾にて、裏は平絹なり。色は紅蘇芳、萌黃、薄色など種々あれど、童のは紅なるべし。種類に綿入、袷、單あり。單は引倍木とて、袷の裏を放ちたるものにて、四月八九月に着る。極暑の時は袙を用ゐず。○うはおそひ　上襲の義。俗にいふ上張なり。單に汗衫といはゞよきを、下に袙を着る故に、袙の上襲など、まはり遠くふつゝかにいへる也。汗衫は童女の上に着る服の名なり。汗衫を見よ。○申すを　生昌の申すをと也。○又笑ふもの　女房どもの笑ふもと也。○御前のもの　御膳の具をいふ。○例のやうにては　普通の樣にてはとなり。

折敷

高坏

○ちうせいをしき云々　姫宮稚くましませば、御膳の具も小き物の方宜しからんとの意。「ちうせい」はちひさきの訛言なり。○をしき　折敷にて、食器を載する臺。上古木葉を折り敷きて杯盤となせる、その名の殘れる也。板を薄くへぎて造れるを片木折敷といひ、足のつきたるを足打折敷といふ。又繪折敷、白折敷の別あり。今の御膳なり。○たかつき　高坏にて、一本足の圓また角の臺なり。木地を漆にて塗る。上古には素燒の土器なるもあり。食物を盛る器なり。又皿を載せ、折敷をも載す。○と申すを　と生昌の申すをと也。○さてこそは云々　ちうせい折敷、ちうせい高坏などいふ奇妙なる器ありてこそ、奇態なる袙の上襲などいふ物着たる童も、陪膳に參りよからんと也。○例の人　普通の人なり。○かくないひ笑ひそ　生昌をかくいひ笑ふなと也。「な、そ」は禁止の辭にて、動詞の第二變化を挿む。○きすぐなる　生直なるにて、俗のキマジメに當る。○いとほしけに　下に、もあるかなを略けり。○制し給ふ　宮の制し給ふと也。「制」はとゞむること。

評 滿ではまだ、三つにもおなりなさらぬ姫宮だから、母宮のおふところを離れる譯にゆかぬので、かうした際にも、常にひき連れて御出入なされた。御相手の童女の衣服まで御心配になるのは、この時分の習俗で、これが貴賤にかゝはらず、當時の主婦の務であつた。ところがその御相談相手が、袙の上襲や、ちうせい折敷の生昌では、定めしお困りであつたらう。

迂遠な詞に訛詞をかけあはせたのは、面白い皮肉である。生昌の父珍材は美作守だつたから、ちうせいは美作訛かも知れぬ。古事談によると、珍材が美作の任はて、上京の途中、備後の客舍で、腰を打たせた郡司の女に出來たのが、惟仲であるといふ。生昌はその弟だから、上京後の子とすれば、田舍詞など

には、關係はない筈である。珍材とても、上達部(中納言時望)の嫡子だから、堂々たる立派な都人で、田舍に一時赴任したまでゝある。しかし詞ばかりは不思議なもので、ふと覺えた訛詞が、つい一生抜けずにしまふ例がまゝある。又、學生訛だといふ說も、すて難い。序にいふが、或說に「小兒にても大人物にてよきを、小き折敷高坏を造らんといへるを嗤へる也」とあるのはわるい。榮花物語初花の卷、後一條帝御五十日の祝に「若宮の御前の小き御臺六つより始めて、よろづ美しき」、濱松中納言物語に「姫君の御方は、こと更小き御調度どもにて、雛遊のやうにしつらひて」など見えてゐる。

生昌は文章生出身の男である。一體普通の學生から、擬文章生、文章生と、つぎ〳〵試驗を經て、それを及第するまでには、可なりの歲月を要したものである。在學九年で貢擧に堪へない者は、退學させる規定があるのでもわかる。その間は校舍に居つては、琴を彈き、射を習ふほかは、他の音樂や雜戲をすることを、一切禁じられてゐたから、彼等學生あがりの輩は、實に世事に迂遠な無骨漢となつてしまふ。まして勸學田は削減されて、薄粥もすゝりかねた瘦學生、且はおほくは下臈の寄合だから、そのガサツに卑野な振舞が、幾つになつても拔けなかつたものだらう。所謂一種の學生氣質は、門地出身の上流人士が、眉を顰めて侮蔑したものだらう。續古事談に、これを旁證する左の一話がある。

昔は、諸道の博士などは、裝束執する事なかりけるにや。光榮といひける陰陽師、上東門院の御產の時、淺ましげなる上の衣、指貫に、平沓はきて、靈も搔かで、中門より入て、階隱の間よりのぼりて、懷より、白蟲を取出して、高欄の平桁にあてゝ、大指して殺しけり。上の衣のしたには、布の襖といふ物をぞきたりける。

これは一條帝の第二皇子(後一條)御誕生のをりの事で、御產の祈として召された陰陽師が、時もあり處もあらうに、御殿の欄干で、虱を潰すとなつては、殆ど非常識に近いものだらう。文章生と陰陽師、その道はかはるが、その肌合は似寄つたものであつたらしい。

されば、たまたまこの道にまかり入つた生昌が、他の嘲笑の的となつたのも、無理はない。ましてあ

(口譯)丁度御前勤で、手がふさがつて居るはんまな時分に、「大進殿が『貴女に御話が致したい』といつて來て居る」と、取次の人のいふのを、中宮が御聞き遊ばされて「又どんな事をいひ出して、笑はれようとするのであらう」と仰しやるのも、ひどく面白い。「往つて聞いて來い」と仰しやるから、お許が出たので、表向に改つて、簾の際まで出ると、生昌が「先夜の門の話を、兄の惟仲中納言に話しました所が、ひどく感心せられまして、『どうぞ都合のよかりさうな折に、貴女に對面して、お話を承りたてに花やかな後宮方面、その後宮内で殊に才がつた淸少に對しては、その言動が餘にかけ離れすぎて、いたづらに滑稽を演じて、嗤笑の材料を提供するばかりであつた。

中間なるをりに、「大進もの聞えむとあり」と、人の告ぐるを聞し召して、宮「またなでふことといひて、笑はれむとならむ」と仰せらるゝも、いとをかし。宮「ゆきて聞け」との給はすれば、わざと出でたれば、生昌「ひと夜の門のことを、中納言に語り侍りしかば、いみじう感じ申されて、『いかでさるべからむをりにたいめんして、申しうけたまはらむ』となむ申されつる」とて、又こともなし。(ひと夜の事やいはむと、心ときめきしつれど、生昌「今しづかに御局にさぶらはむ」と辭していぬれば、歸り參りたるに、宮「さて何事ぞ」との給はすれば、申しつる事を、さなむとまねび啓して、淸「わざと消息し、呼び出づべきことにもあらぬを、おのづから、しづかに局などにあらむにもいへかし」と笑へば、宮「おのがこゝちに、かしこしと思ふ人の譽めたるを、嬉しとやと思ふとて、告げ知らするならむ」との給はする御けしきも、いとをかし。

釋　中間なるをり　「中間」はいづれにもよらぬ間の意にて、こゝは何のついでもなき時、俗にいふ半間ナ時分といふに同じ。下文に「中間にあやしの食物や」とあり。武家時代、侍と小者との間の下人を仲間と稱せしも、この意なり。されば、これを用事のあひ間の意とする說は採らず。○大進もの聞えむとあり　大進淸少に物聞えむといひて來てありと也。「聞えむ」は申さんの敬語。但申すはわが方を主とし、聞

い』と申されました」といつて、又別な用事もない。心のうちでは、先夜忍んで來た時の事を持出して、恨みはせぬかと、胸を跳らせたが、生昌が「そのうちゆつくり、お部屋に伺ひませう」と挨拶して往つたから、中宮の御前へ歸つて來ますと、中宮がお待受で「さて何事であつたぞ」と仰しやるから、生昌のいつた事を、かう〳〵でありますと口移しに申上げて「わざわざ案内をして、御前に居る者を呼出すべき程の用事でもないものを、あんな事なら、自然部屋などに下りて、ゆつくりして居る時にでもいふがよいわさ」といつて笑ふと、中宮が「生昌が、自分の心から賢いと思ふ人(惟仲)が、お前を響めたのを知らせたら、お前が嬉しいと思ふだらうかと思つて、わざわざ呼立てゝ知らせたのであらう」こ仰しやる御樣子も、大層うるはしい。

えんは先方、卽ち聞く方を主としたる也。○聞し召して　聞くの敬語。こゝは宮の聞し召して也。○なでふ　何といふの轉語。○笑はれむとならむ　笑はれんとするならんと也。○の給はすれば　宮の我に宣はすればと也。○わざと　態々におなじ。○ひと夜の門のこと　先夜の于公高門のこと。○中納言平惟仲。生昌の兄なり。贈從三位平珍材の長男にして、藤原兼家の家司なり。藏人頭、參議、左大辨を歷任し、長德二年權中納言、寬弘二年五月從二位中納言、太宰權帥に至りて薨ず。年六十二。○中納言　太政官中の重職にして、大納言に亞いで太政官の官務を執行し、大政を議す。大寶の制これを置かず。慶雲二年大納言二人を減じ、中納言三人を置く。一條帝の頃は、正權合せて大抵六人なり。「納言」とは、令義解に「謂レ納レ言、言納二下言於上一、宣二上言於下一也」。○いかでかさるべからむをりに云々　「申し承らむ」まで、生昌の傳へいふ中納言の詞なり。「いかで」はドウゾシテの意。○たいめん　對面の字音。當時は略して、たいめともいへり。○申し承らむ　御話を伺はんと也。承り申さんに同じ。○申されつるとて　中納言の申されつると生昌の語りてと也。○又こともなし　他にまた何等の用事もなしとなり。○ひと夜の事やいはむ　「一夜の事」は生昌が清少の寢室に忍び來りし夜のこと。「いはむ」に追ひ返したる怨をいはんの意籠れり。「と」の下、思ひてを略けり。○心ときめき　胸の動氣の盛んになりて、ドキ〳〵すること。○今しづかに云々　「今」は俗のオツツケに當る。「御局に候はむ」は御部屋の方に伺はむと也。なほその折に委細は申さんの意を含めたり。○辭して　生昌の辭してと也。○歸り參りたるに　宮の御所に歸り參りたるにと也。○何事ぞとの給はすれば　宮のなり。○申しつる事を　生昌の清少に申しつる事をと也。○さなむと　さなむありけるとの略。○まねび啓して　生昌のいひし事を、そのまゝ中宮に申上げてと也。こゝの「眞似び」は口振を眞似るにあらず。ソツクリうつしていふこと也。○おのが心地に云々　「おのが心ちに」は生昌自身の心ちにと也。「賢しと思ふ人」とは惟仲をさす。「嬉しとや思ふ」は清少がなり。○御けしき　御樣子。

評　清少の父は肥後守で終つた。その門地をいへば、生昌の方がはるかに優つてゐる。その一受領の女が、中宮附の女房であるといふだけの誇で、忽ち眼中人なしの有樣、中宮の御父（道隆）をすら輕んじて、殿を殿ともおもはぬ振舞があつたと傳へられてゐる。この才がつて陽氣にハシヤグ性格は、元よりその天分にも因らうが、或は長い孤獨生活が影響してゐるかも知れない。その厭はしい程にまで、生昌を嘲弄したのも、たゞ自己のわづかな驕慢と、氣轉に富んでゐるといふ小さな誇を滿足させようが爲ばかりで、からかふが面白さに、からかつてゐたのである。そこで、中宮樣が生昌へ下された御同情の御詞を伺ふごとに、なる程と感じ、生昌に對しては、「一夜の事やいはむ」と恐れたのである。清少はつまり正直者である。彼はすべて赤裸々に、善惡にかゝはらず、その胸臆を披瀝してゐる。

生昌の兄惟仲は、いはゆる利口者で、中宮の御祖父兼家公は、惟仲と藤原有國とを「わが左右の眼なり」と稱美された。次いで道隆公に寵任され、その薨後、この一門が勢力を失墜すると、忽ち道長におもねり、その旨を承けて、暗部屋女御の後見となり、掖庭のうちで、中宮と君寵を爭はしめた。實に恩知らずである。しかも一時中宮大夫を勸めて、中宮の御機嫌を取結んだやうでもあるが、半歲もろくに勤めず、丁度この前月に辭任してしまつた。障らぬ神に祟なしとでも思つたのだらう。中宮が「おのが心地に賢しと思ふ人」と仰せられたのは、何たか眞の賢者でないことを、暗々裏に仄めかされたものゝやうでもある。

この節を讀むと、殊に中宮のあでやかに情深く入らせられた事を、想はずには居られない。清少が感心したのも尤もである。前にもいつた通り、この頃は非常の御否運に出會つて、困厄を重ねられながら、なほ平生の溫容をたもたれ、何時も、春風が帳帷を繞つて吹いてゐる觀がある。かういふのが、當時の上

流人士の心掛として嗜まれたものではあるが、又洵に及びがたい人格者で入らせられたに違ない。

中宮と生昌との應答は、直接ではない。みな取次の女房によつてである。前々章の「御硯などさしゝる」も、生昌が廂ぎはの簾の下から硯をさし入れたので、女房がこれを受取つて、御前に參らせたのである。この章及び前章も、察するに長保元年八月の頃の事であらう。

七　段

うへにさぶらふ御猫は、かうぶり賜はりて、命婦のおもととて、いとをかしければ、かしづかせ給ふが、はしに出でたるを、乳母の馬の命婦、「あなまさなや。入り給へ」とよぶに、きかで、日のさしあたりたるに、うちねぶりて居たるを、おどすとて、馬命婦翁丸いづく。命婦のおもとくへ」といふに、まことかとて、しれ者走りかゝりたれば、おびえまどひて、御簾の内に入りぬ。朝餉の間に、うへはおはします。御覽じて、いみじう驚かせ給ふ。猫は御ふところに入れさせ給ひて、をのこども召せば、藏人忠隆參りたるに、「この翁丸うちてうじて、犬島につかはせ。只今」と仰せらるれば、集りて狩りさわぐ。馬の命婦もさいなみて、「乳母かへてむ。いとうしろめたし」と仰せらるれば、かしこまりて、御前にも出でず。犬は狩り出でて、瀧口などして追ひつかはしつ。

（考異）○命婦のおもと　原本命婦のおといとあり。抄本による。○いづく　活本いつらとあり。これもあしからず。

（口譯）清涼殿に飼はれてゐる御猫は、五位を戴いて、女房名がついて、命婦のお許と呼ばれて、大層可愛らしいので、主上が御大事になされてゐるが、それが端近くに出て居るのを、猫のお守役の馬の命婦が「まあ飛んでもないこと。内へお入りなさい」と呼び立てるにも、猫は聞かないで、日の當つてゐる處に眠つて居たのを、内へ入れる爲におどかすとて「翁丸（犬の名）は何所に居るぞ。命婦のお許を喰ひつけ」といふと、本當のことかと思つて、馬鹿者（翁丸）が走りかゝつたので、猫はおびえあがつて、御簾のうちに飛込んだ。丁度朝餉の間に、主上は御いで遊ばされた。この有さまを御覽なされて、大層お驚きなされた。猫は御懷にお入れなされて、殿上の男共をお呼びなさると、藏人の忠隆が參つたので、主上が「この翁丸を打懲して犬島へ流せ。だつた今」と仰しやつたので、藏人や瀧口等が集つて、翁丸を狩り立てゝ騒ぐ。また馬の命婦もお咎めで「お守役を易へよう。あれでは甚だ不安心だ」と仰しやるので、馬の命婦は謹慎して、御前にも

釋○うへにさぶらふ御猫　禁中に飼ひ置き給ふ猫にて、常に主上の御殿に居ればしかいふ。「うへ」は主上にあらず、殿上の義。「猫」は支那或は朝鮮より舶來せし獸にて、唐猫の稱あり。宇多帝の寛平御記に、父帝より猫を讓られ給へること見え、源順の和名抄に猫を擧げて、禰古麻と訓み、古今六帖には手飼の虎と詠み、靈異記には貍をネコと訓ませたるに見れば、早くより相應に繁殖せしものなるべし。或説に、一條帝の頃には珍獸にて、高貴の家ならではえ飼はざりきといへるは妄なり。但一條帝の、殊に猫を愛し給ひし事は、當時の人藤原實資の小右記にも「長保元年九月十九日内裡御猫産レ子、女院左大臣右大臣有二産養事一、有二衝重椀飯納筥之衣等一、猫乳母馬命婦、時人唉レ之、奇怪事」と見えたり。○かうぶり賜はりて　五位に敍せらるゝこと。敍爵ともいふ。「かうぶり」は冠の音便。推古帝以後天武帝以前は、冠を以て位階を表せしかば、冠位の制なくなりて後もなほ、敍爵することを「冠賜はる」といへり。○命婦のおもと　猫に敍爵してつけたる名。○命婦　ミャウブ。もと五位に敍せられたる女房を稱し、令義解に「婦人帶二五位以上一、曰二内命婦一、五位以上人妻曰二外命婦一也」と見ゆ。延喜以後に至りては、中臈の女房を命婦と稱して、令制と異なるに至れり。○おもと　御許の義にて、陛下の御許に侍る女房を、何の御許といふ。○しづかせ給ふ　うへの冊かせ給ふと也。「かしづく」は大切に育むこと。恐み付くの義。「せ」は崇敬の助動詞。○はしに出でたるを　猫の端に出でたるをと也。「端」は簀子のあたりなるべし。○乳母　猫の乳母、即ち猫の附添人なり。「乳母」はちごのめのとを見よ。○馬の命婦　女房の呼名なり。呼名は大抵親兄弟、又は夫の官職を以て呼ぶ。「馬」といへるも、この命婦の身内が、馬寮の役人なりしならん。○あなはさなや　「あな」は歎辭、「まさな」は正無にて、邪なること、即ち宜しからぬにいふ。「や」は歎辭。命婦のお許ともいはるゝ者が、さる端に出づるものかと、猫をたしなめたる也。○きかで　猫のきかでと也。○うちねぶりて　眠りてと同じ。「うち」は接頭語。○翁

出ない。翁丸は、とうとう狩出して、瀧口の武士などでもつて、追放してしまつた。

丸　オキナマロ。これも禁中に飼はれたる犬の名。○まろ　「ま」は眞實の義、「ろ」は添へていふ辭。もと自稱の代名詞なるが、轉りては、人名に添へて何麿といひ、遂には他の生物にも、器財にも添へて呼ぶに至れり。眞淵の説に「まろは才あるに對して、才なきを意味し、謙稱に用ゐる」といへるは、鑿に近からん。○いづく　何方に居るぞの略。○くへ　喰へなり。咬めに同じ。○まことかとて　まことかと思ひてと也。○しれ者　犬を詈りたる語。馬鹿者奴がといふに同じ。戯にいひたるを、眞に向けたれば也。「しれ」は癡呆なるをいふ。○おびえ惑ひて　猫のおびえ惑ひてと也。「おびえ」は恐怖すること、「惑ふ」は途方にくるゝこと。○朝餉の間　主上の供御を備ふる所。但常にも出御あり。清涼殿の西廂にあり。南は臺盤所、北は御手水の間、東は夜の御殿、西は格子ありて、簀子を隔て、朝餉壺(中庭)に接する二間なり。(但この猫の御時の御殿は、小一條の假内裏なれば、方角など違ふと知るべし)「朝餉」の餉は乾飯饋るの義にて、お膳を調進し參らするをいふ。朝といひて、夕夜をも籠めたる也。(附圖清涼殿を參照)○うへ　主上の御こと。支那にては、帝のことを土といへり。何れもウヘ、カミの義。のちに上に樣をつけて、上樣ともいへり。こゝのうへは一條帝。○をのこども　「をのこ」は殿上のをのこの略。昇殿したる四位五位、及び藏人などをいふ。○藏人　藏人所の職員。○藏人所　嵯峨帝の弘仁元年に始めて之を置かる。その員數は別當一人、詔勅を傳宣するを掌る。宇多帝の時、大納言藤原時平これに輔してより後、左大臣を以て補す。頭二人、殿上大小の公事を奉行す。四位の殿上人より選任す。一人は辨官、一人は近衛中將これを兼ぬ。頭辨、頭中將これなり。殿上人の上座なれば、之を殿上の貫主と稱す。五位藏人三人、五位の殿上人中、名家の譜第にて、殊に材器ある者を撰任す。六位藏人四人、宮中の些細の公事を勤め、朝夕の御膳の給仕を勤む。之を日下臈といふ。四人日を分けて奉行す。その他非藏人、出納、小舍人、雜色所衆、瀧口など、宮中の雜事を掌り、或は警衛を勤む。○忠隆　源氏。長保二年正月廿七日藏人となる。經基王の孫にて、源滿政の子。正五位下駿河守にて終る。○うちてうじて　「てう」は調の字音にて、順はしむること。調伏の調も同意と知るべし。但こゝには強く用ゐたれば、打懲してといふ程の意となる。○犬島に遣はせ只今　只今犬島に遣はせといふを、前後せしめたり。「犬島」は犬を流す所といふ程の意。類聚國史に、平城帝の大同年中に、犬を惡ませ給ひて、備前の離れ島に流しやりける事見えたれど、こゝはその島をさしていへるにあらず。さて罪ある者を流す事は、大寶令に制定せられ、罪の輕重によりて、場處に遠中近の別あり。今はそれに倣ひて、犬を追ひ遣はせと宣へる也。○と仰せらるれば　とうへの仰せらるればと也。○集りて　人々集りてと也。藏人所衆、瀧口の者共の集るなり。○さいなみ　さきなみの音便。罰する、叱る、苛責するなどの意。○かへてむ　「てむ」は推定の助動詞。○うしろめたし　物の氣遣ひなるにいふ。卽ち不安心の意。後目痛しの義にて、後の氣遣ひせらるゝより出づ。○仰せらるればうへの仰せらるればと也。○かしこまりて　命婦は畏まりてと也。「かしこまる」は畏敬の意なるが、こはその罪を恐れて謹慎するをいふ。○瀧口　藏人所に屬したる武人。定員二十人。清涼殿の艮の御溝水の落聚る所を瀧口といふ。そこの陣に勤番して、宮中を護衛するが故に、その人をまた瀧口といふ。宇多帝の寛平中、射藝に長ぜし武士を補せしを初とす。侍中群要に「瀧口如所衆、但仰諸陣帶弓箭、可出入之由也」と見ゆ。藏人所を見よ。

(口語)あゝひどく威張つて歩いて居たものをさ、この三月三日の御節供に、頭の辨が、犬の頭には柳の蘂をさせ、桃の花を簪にさゝせ、櫻の花を腰にさゝせたりして、お庭を歩かせられた折、今日こんなえらい目を見ようとは、思ひかけもしたものかいと、女房達が哀

あはれ、いみじくゆるぎありきつるものを、三月三日に、頭の辨、柳のかづらをさせ、桃の花かざしにさゝせ、櫻、腰にさゝせなどして、ありかせ給ひしをり、かゝる目見むとは思ひかけけむやと、あはれがる。女房おもののをりは、必ず向ひさぶらふに、さうぐしくこそあれ」などいひて、三四日になりぬる晝つかた、犬のいみじく啼

れがる。又中宮がお膳をめしあがる折は、きつと向つてお付申して居たのに、居なくなつて寂しいことである」などいひ合つて、三日四日にもなつた書時分、犬のひどく啼く聲がするので、どんな犬が、かう長いこと啼くのかしらんと思つて、耳を澄してゐると、澤山の犬仲間は驅け騷いで見舞に出掛け、御厠人が驅けて來て「まあ大變。犬を藏人が二人してお打ちなされ、あれでは死ぬでせう。お流しなすつたのが歸つて參つたといふので、打擲してお懲しなさる」といふ。情ない事よ、それは翁丸であるわ、忠隆、實房の藏人二人が打つと人がいふから、それを止めにやるうちに、やつとの事で啼きやんだ。すると便にやつた者が歸つて來て「死んだものだから、御門の外に棄てました」といふので、皆不憫がりなどしてゐるその夕方、非常に腫れ上つて、膽のつぶれるやうに、弱りはてた犬が、慄ひ〳〵、この御庭を歩くので、女房の誰やらが「あゝ翁丸かよ。外にはこんな犬を、この頃は見かけないではないか」などいふから、試に「翁丸」と呼んでも、耳にも入れない。そこで、女房達が「翁丸だ」といひ「さうでない」といひ、口々にこの由を申上げると、中宮が「右近の内侍がよく見知つてゐる。あれを呼べ」と仰しやつて、丁度右近が自分の部屋に下

く聲のすれば、なにぞの犬の、かく久しく啼くにかあらむと聞くに、よろづの犬ども走り騷ぎとぶらひに行く。みかはやうとなるもの走りきて、「あないみじ。犬を藏人二人して打ち給ひ、死ぬべし。流させ給ひけるが歸り參りたるとて、てうじ給ふ」といふ。心うのことや、翁丸なり。「忠隆、實房なむ打つ」といへば、制しに遣るほどに、辛うじてなき止みぬ。使「死にければ、門の外にひき棄てつ」といへば、あはれがりなどする夕つかた、いみじげに腫れ、あさましげなる犬のわびしげなるが、わなきありけば、女房「あはれ丸か。かゝる犬やはこの頃は見ゆる」などいふに、女房「翁丸」と呼べど、耳にも聞き入れず。「それぞ」といひ、「あらず」といひ、口々申せば、宮「右近ぞ見知りたる。呼べ」とて、下なるを、まづ「とみのこと」とて召せば參りたり。宮「これは翁丸か」と見せ給ふに、右近「似て侍れども、これはゆゝしげにこそ侍るめれ。又『翁丸』と呼べば、よろこびてまうでくるものを、呼べど寄りこず。あらぬなめり。『それは打ち殺して、棄て侍りぬ』とこそ申しつれ。さる者どもの二人して打たむには、生きなむや」と申せば、心うがらせ給ふ。

（考異）○三四日になりぬる書つ方　原本る文字なし。古本による。

釋　○あはれいみじく云々　以下女房達の、翁丸の過去を偲びてあはれがる詞也。○ゆるぎありきつるものを　威張つて歩きしものをと也。この「ものを」は「三月三日云々」の句を隔てゝ「かゝる目みむと

は云々」にかゝる。「ゆるぎ」は搖くこと。○頭の辨　太政官の辨官にて、藏人頭を兼ねたるをいふ。藏人所、及び辨を見よ。職事補任によれば、この時の頭辨は藤原行成なり。行成を見よ。○辨　太政官中に左右辨の局あり。左に中務、式部、治部、民部の四省、右に兵部、刑部、大藏、宮内の四省を分掌し、庶事を承りて下に達し、太政官内の事を糺判し、被管の諸司の宿直を監す。大中少の辨、各左右あり。大辨は從四位上の相當官なれど、一條帝時代は多く從三位なり。職原抄に「爲二重職一、名家譜第輩、殊依二清選一任レ之」。○行成　藤原義孝の子、祖父謙德公伊尹養ひて子となす。寛和中左兵衛權佐、永祚正曆の間從四位下たり。長德元年藏人頭に擢でらる。左右中大辨を經て、參議、侍從に任ぜられ、寛弘中兵部卿權中納言、寛仁中權大納言となり按察使を兼ぬ。萬壽四年薨ず。年五十六。書法の名手にして、その流を世尊寺樣と稱す。○柳のかづら云々　「かづら」は髮連の義。古草木などを髮にかけて飾とする事あり。その物を纏といひ、しかする業をかづらくといへり。角髮の形と混ずべからず。「柳のかづら」も、柳枝を綰ねて、犬の頭に被らせたる也。○かざし〳〵　髮挿の義。今音便にカンザシといふ。古は草木の花や枝を髮に挿みて飾としたりき。○かゝる目見むとは云々　「かゝる目」はかゝる悲慘なる目の意にて、「かゝる」は打調ぜられて死にたりといふをさす。「や」は反語。○とあはれがる　と人々の哀がると也。○おものの折は　中宮のお膳を召上る折はと也。「おもの」は御膳にて、天子の供御をいふは常なれど、こゝは中宮のなり。○向ひさぶらふに　の下、今は居ずなりてを略けり。○さうぐしし　寂々しの音便にて、さびしきこと。○などいひて　など人々のいひてと也。○何ぞの犬の「何ぞ」は何なるぞの略にて、如何なる犬のといふ意。○とぶらひ　安否を問ふこと、見舞ふこと。○みかはやうと　御厠人の音便。宮中の御厠を管理する下賤の女なり。○あないみじ　「あな」は歎辭。「いみじ」は甚しき極をいふにて、こゝは俗の大變といふに當る。○打ち給ひ　打ち給ふとある本は、却つて非なり。中止法にいへるに、語勢の切

つてゐるのを、まづ「急の御用」といつて召すと、すぐ御前へ參つた。中宮が「これは翁丸か、どうか」と、その犬をお見せなさると、右近が、心には翁丸とは思ひながらも「似ては居りますが、これはいやらしい樣で御坐います。又いつも『翁丸』と呼べば喜んで參るものを、これは呼んでも一向寄つても來ず。して見れば、さうでないと見えます。『翁丸は打殺して棄てました』と人が申しました。そんな大の男共が二人して打ちませうには生きられませうかい」と申上げると、中宮には、情なくお思ひなさる。

（口譯）段々日が暮れて來て

迫したる趣見ゆるをや。○歸り參りたる　の下、事よを略けり。○心うの事や　「心う」は心憂しを略して名詞にいひすゑたる語。「や」は歎辭。○實房　藤原氏。式部丞。藏人なるべし。○制しにやる　とゞめに人を遣ると也。これは御廁人を遣りしかは分明ならず。隨ひて「門の外に引棄てつ」の復命も、誰とは定め難し。強ひていはゞ尙御廁人ならん。○辛うじて　俗のヤツトノ事デに當る。○門の外に　今内裏の門外なり。○あはれがりなどする　人々の哀がりなどすると也。○あさましげなる　驚き呆るゝ樣なると也。「あさまし」は淺むの形容詞格。○わびしげなるが「わびしげ」は難儀なる樣子をいふ。こゝは見るも厭らしきにいへり。「なる」の下、犬の字あるべきを、上のに讓りて略ける也。○わなゝき　をのゝくの轉にて、戰慄すること。○まろか　翁丸かと也。○かゝる犬やはこの頃は見ゆるかゝる容態の犬を、他にこの頃見掛くることか否見掛けはせぬと也。さればこれは翁丸の打擲せられて、かく變りたるならんの餘意を含めり。「やは」は反語。○右近　女官の呼名。下文「右近の内侍」とあると同人なり。右近少將藤原季繩の女。榮花物語、浦々の別の卷、この中宮、修子内親王を生み給へる所に「御湯殿には、内よりの仰事にて、右近内侍ぞ參りたる」とあり。又同卷、敦康親王の生れさせ給ふ所にも「御湯殿には、右近内侍例の參る」と見えたれば、中宮の心よせとなる人なるべし。内侍司を見よ。○しもなるを　自分の部屋に下りて居たるをと也。「しも」は下の局の略。○とみのこと　とみのことぞ參れの略。「とみ」は頓の字音なるべし。頓は俄なる義。疾みと解くは非ならん。○ゆゝしげ　忌憚らるゝ樣子なるをいふ。ゆゝしを見よ。○まうで　參出の轉語。○あらぬなめり　「あらぬ」はしかあらぬの略。「なめり」はなるめりの略。○さる者ども　若盛の強壯なる忠隆、實房をさす。○生きなむや　「や」は反語。

暗うなりて、物くはせたれど食はねば、あらぬものにいひなして止みぬるつとめて、

から、その犬に食物をやつたが喰はないから、さうで（翁丸で）ないものにいひ切つてしまつた。その翌朝、中宮が、御髮の櫛梳をなされ、御手水を御使ひなされて、さて御鏡を人にもたせて御覽になるので、その役に私が侍ふと、丁度その犬が、緣の下に突くばつて居たのを見て「あゝ昨日、翁丸をひどく打つた事よ。死んださうなが悲しいことよ。此度は何の身に生れ變るのであらう。打殺された時は、どんなに術ない心持がしたであらう」といふうちに、この寢てゐる犬が、ぶる〳〵悸ひをのゝいて、涙をむやみと落す。ほんとに驚いた事よ、さてはこれが翁丸であつた、昨

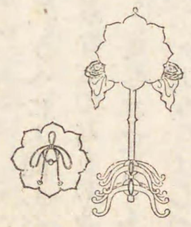
御梳櫛まゐり、御手水まゐりて、御鏡もたせて御覽ずれば、さぶらふに　犬の柱のもとについ居たるを、清「あはれ昨日、翁丸をいみじう打ちしかな。死にけむこそ悲しけれ。何の身にか、このたびはなりぬらむ。いかにわびしき心地しけむ」とうちいふほどに、この寢たる犬ふるひわなゝきて、涙をたゞ落しにおとす。いとあさまし。さはこれ、翁丸にこそありけれ。よべは隱れ忍びてあるなりけりとあはれにて、をかしきこと限なし。御鏡をもうちおきて、清「さは翁丸」といふに、ひれ伏していみじく啼く。御前にもうち笑はせ給ふ。人々參り集りて、右近の内侍召して、宮「かく」など仰せらるれば、笑ひのゝしるを、うへにも聞し召して、渡らせおはしまして、主上「あさましう、犬なども、かゝる心あるものなりけり」と笑はせ給ふ。うへの女房たちなども聞きて、參り集りて、呼ぶにも、今ぞ立ちうごく。なほ顏など腫れためり。清「物調ぜさせばや」といへば、宮「つひにいひあらはしつる」など笑はせ給ふに、忠隆聞きて、臺盤所のかたより、忠隆「まことにや侍らむ。かれ見侍らむ」といひたれば、「あなゆゝし、さる者なし」といはすれば、忠隆「さりともつひに見つくるをりも侍らむ。さのみもえかくさせ給はじ」といふ。さて後、かしこまりゆるされて、もとのやうになりにき。なほあはれがられて、ふるひ啼き出でたりし程こそ、世に知らず、をかしくあはれなりしか。人々にもいはれて、泣きなどす。

夜は勅勘に恐れて、身の上をつゝんで居たのであると思はれて、不憫で、感に打たれたことは無上である。持つて居た御鏡をも、下にさし置いて「ではお前は翁丸よ」といふと、犬が地面に平伏して、ひどく啼いた。中宮にも興ある事におぼして、お笑ひ遊ばされる。昨夜鑑定した右近の内侍を更に召して、中宮が「かうかうであつた」など仰しやると、女房達も御前に寄り集つて、一同に笑ひ騒ぐを、主上にも御聞及びなされ、此方にお出遊ばされて「驚くやうに、犬などでも、こんな勅勘を憚る心は持つてゐるものであるよ」と仰せられて、お笑ひ遊ばされる。外の主上附の女房達も、それと聞付けて、此方に集つて來て呼ぶと、翁丸は、もう御氣色が直つたと安心してか、今度こそ、呼ばれるまゝに動き出した。いまだに顔などは腫れてゐるやうに見える。食物を拵へさせたら」といふと、中宮が「これまで包みかくしてゐたものを、とう〳〵翁丸といひ現したことよ」とお笑ひ遊ばされると、この事を忠隆が聞付けて、臺盤所の方からやつて來て、簾の外で「本當ですかしら、翁丸が歸つて來たといふのは。どれそれを檢分致しませう」といつたので「まあいやな事。そんな者は居ません」と、他の者にはせて斷ると、忠隆が「さう仰しやつても、いあさましけを見よ。○かゝる心　勅勘を憚るをさす。○うへの女房　主上附の官女のこと。常に清涼殿の臺盤所に伺候すれば、「うへの」といふなり。女房を見よ。○腫れたためり　腫れたるめりの略。○物調ぜさせばや　物を食はせんと也。「調」ぜさすは調へさす也。○いひあらはしつる　今までつゝみ置きしを、遂に翁丸といひ現したりと也。下による歎辭を略けり。○臺盤所　ダイハンドコロ。清涼殿の一室にして、鬼間の北、朝餉間の南の三間なり。女房の詰所にて、女房侍ともいふ。男子の殿上（間名）におけると同じ。全く御内儀ともいふべく、男子の出入かなはず。これを臺盤所といふは、食事用の臺盤を据ゑ置けば也。（附圖清涼殿參照）○まことにや侍らむ　翁丸の歸りたるは誠にや侍らむの略。○かれ　それといふに同じ。○ゆゝし　忌々しの約。忌み憚る意より轉じて、よきにも惡しきにもいへり。甚し、容易ならず、大變など、廣く用ゐたり。○さる者なしといはすれば　さやうな者なしと、他の女房にいはすればと也。これは翁丸をかばひて、清少がいはせたる也。○さりとも　清少等の翁丸をいひ隱せるをさす。○畏り云々　畏り勘じとある本につきて、濱臣が「畏りは馬命婦のかしこまり也。勘じは翁丸が勘じ也」といへるは當れるやうなれど、この前後は翁丸の事のみを敍したれば、馬命婦の畏を書まじへんことといかゞ。○なほ　下の「をかしくあはれなりしか」に係る副詞。○世に知らず　世に知られずの意。即ち世に又なくなり。○人々にもいはれて云々　後々も人達にこの話を持出されては、その折の事思出されて、清少が泣きなどもしたりと也。古本に「人などこそ人にいはれて泣きなどはすれ」とあるは、人などこそ、他人に同情ある詞をかけられて泣きなどはすれど、犬がさうした樣子を見せたることは、不思議に感ずるとの意にて、文意一層明らかなり。

評　この段は長保二年の春の事である。中宮はこの二月十二日にまた御入内になつて、三月廿七日に又生昌宅に退出なされた。本文で見ると、三月三日より遠くない事と思はれるから、三月下旬の御退出間際

（考異）○御けづり櫛まゐり　原本御けづり櫛にとあり。に文字必ず衍なるべし。古本には「御けづり櫛御手水などまゐりて御鏡もたせて」と續きたり。○聞きて　原本聞きにとあり。活本による。○えかくさせ給はじといふ　の下、原本なりの二字あり。古本による。○かしこまりの下　原本勘じの二字あり。一本による。

釋　○暗うなりて　その日の夕暮になりたるをいふ。○物くはせ　彼の犬に物食はせと也。○あらぬものしかあらぬものの略。即ち翁丸ならぬをいふ。○御けづり櫛まゐり　中宮の御髪を理めらるゝをいふ。「梳櫛」は櫛にて髪を解くこと。○御手水まゐり　御手を洗ふをいふ。手水を使ふには匜盥、貫簀等の器を用ゐる。○御鏡もたせて　人に御鏡を持たせて、中宮の御覽ずるにと也。○さぶらふに　御鏡持に清少の候ふにと也。○ついゐたる　突き居たるの音便。俗にツクバッテ居ルといふに同じ。○何の身にかこの度はなりぬらむ　此度は何の身にかなりぬらむの倒置法にて、來世は何物に生まれ變るかと也。こは佛敎の輪廻說によれる思想なり。輪廻とは、罪障あるものが、六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）に旋轉し、胎卵濕化の四生に出入し、此處に死し彼處に生じて、窮なきこと、車輪のめぐりて盡きざるが如きをいふ。○いかにわびしき心地　の上、彼が打殺されし程はの語を補ひて聞くべし。○たゞ落しにおとす　「たゞ」はひたすらの意。「落しに落す」は頻に落すこと。○さはこれ　さてはこれはと也。○よべ　昨夜をいふ。夜方の義。土佐日記に「よんべ」とあるも、この音便なり。今はユフベといふ。○かくれ忍びて　自分の身の上を知られぬやうに包みたるをいふ。○ひれふして　平伏すなり。○御前　中宮のお前の略にて、中宮をさす敬語。○人々參りて　次の句を隔てゝ「笑ひのゝしる」にかゝる。○のゝしる　聲高にいひ騒ぐこと、罵詈すること。こゝは前の方にて、女房達一同が笑ひ騒ぐなり。○渡らせおはしまして　中宮の御方へ來給ひてと也。○あさまし



鏡及鏡臺

つか見付けろ時もありませう。さう〳〵、ようお匿しは出來ますまいよ」と、厭味をいつた。さてこの後、翁丸は公然と勅勘を許されて、以前のやうになつたが、やはり人達に不憫がられて、慄うて啼き出したあの時がさ、又となく面白く興ある事であつた。この話を後々も、人達にいひ出され、私は感に迫つては泣きなどした。

の事らしい。（主上御年廿一、中宮廿五、清少卅五六？）

當時禁中に飼はれた猫は一匹でない。小右記に「内裏御猫産レ子」とあるのでわかる。但産養の儀や乳母を立てることなどは、兒猫のうへにかゝつてゐるから、命婦のお許と呼ばれて敍爵したのは、この兒猫だらう。神事部類抄に、他の一匹は左衞門のお許といつたとあるが、それは親の牝猫ででもあらう。この命婦のお許は、前年の九月十九日に生まれて、この頃は半歳ほど經つた、愛らし盛であるから、主上の殊に御寵愛なされたのであらう。翁丸に追はれたのを、御懷に入れられたのも、兒猫であつてこそふさはしい。又、その名稱から推測すると、翁丸は純白の雄犬であつたらしい。よし雌雄は、尙異論の餘地があるとしても、白犬であつた事は爭へないと思ふ。

内裏は前年の六月に燒失して、今は小一條院の假御所だから、正式の清涼殿の指圖では、話が出來ない。たゞし寢殿造は、樣式がほゞ一定してゐるから、下文、小一條院をば今内裏といふの段に「おはします殿は清涼殿にて、その北なる殿に（中宮が）おはします。西東は渡殿にて渡らせ給ふ」とあるのを併せて見ると、この假清涼殿は、南面の御殿に相違ない。そして、中宮の居らるゝ北の御殿と向合つて居て、その間は中庭である。翁丸は渡殿の緣の下を通つて、この中庭にも參つてゐたらしい。猫は御殿の南か西かの簀子に、日向ぼこりしてゐたのを、翁丸か食ひかゝつたのであらう。また打殺した犬を「門の外にひき棄てつ」とあるが、これは假御所のことで、御門一重外は、もう内裏ではなく、普通の往來であつたからである。しかし御所前の往來に、犬の死骸を打棄るに至つては、今から考へると、亂暴のやうだが、その頃の往來ときては、甚だ不潔なもので、丁度併合前の朝鮮のやうに、糞小便も往來でやつたものである。

茲に一寸注意を要するのは、當時内裏でも里内裏でも、犬の多かつた事である。翁丸のやうに特に飼はれたものもあるが、その多くは野良犬であつた。本文「よろづの犬どもとぶらひにゆき」とあるが、卽ちそれである。殿舍の端には犬防を立て、犬狩はつねに執行され、その死屍は御所中にしば〳〵横はつて、秡除の手數をかけ、甚しいのは、この前々年の夏、主上の御座に、勿體なくも左捻りを遺し奉りこの數年後には、殿上を驅拔けた奴もあつた。狺々ワン〳〵、餘のうるさゝに、すでに二百年も前に、平城帝は「都の内の犬を流しつかはせ」と仰せられた。蓋し佛敎の生類哀憐の影響である。

遊宴の際、時の花を蘰にし、挿頭にかざすことは、古來の習俗であつた。上巳曲水の佳節に、翁丸が柳の蘰桃の挿頭は、頭辨が私の思付のみではあるまい。餝犬として、主上の引かせられた御趣向であらう。御犬は翁丸の外に富士丸、竜鶴などいふ逸物があつたといふ。また殿上の貫主、藏人頭從四位上右大辨行成朝臣ともあらう人が、こんな小供じみた戲をしたのも、時代がさうした、悠悠閑々たる、無事な時代であつた事を證明する。

元來翁丸は、お表の飼犬だから、打擲されて淺ましけになつては、お奥の女房達には、とてもその鑑定はむづかしい。そこで、常に翁丸を見馴れた、うへの女房中、格別芳心ある右近を召されたのである。この人は中宮御產の折は、いつもお湯殿に召された人で、榮花物語によれば、主上の御親任が、極めて厚かつた女房で、男には生昌、女にはこの右近のみが、落目になられた中宮に、殊にまめやかに奉仕したとある。果して彼女は、畜類にまで、同情心のふかい、優しい婦人であつた。翁丸であるとは知りながらも、勅勘なればと、わざとさし控へて「あらず」といつて、それをかばつてやつた。ところで、藏人忠隆の父源滿政が、盜賊逮捕のために、一族の賴親、賴信などと共に、武勇の人として召されたのは、この六七年前のことである。そんなきつい武夫の子だから、忠隆の腕節の強いことはいふまでも無い。「さる者ども二人して——生きなむや」と、右近のいつたのは、この間の消息を洩したものではあるまいか。

彼の行動と「さのみはえ匿させ給はじ」の冷語とは、右近の溫情と好對照をなしてゐる。

翁丸も利口である。表方で打たれたのに懲りて、中宮の御殿の庭先に來て、忍んで居つた。極度の折檻に、人をおそれて近づかず、物食ふ元氣もなかつたのである。あへて勅勘を憚つた譯でもあるまい。翌日になつて、や、落付いて來たので、聲をかけられて、尻尾を掉つたのである。それを清少の才筆によつて、千古の名犬となりおふせ、人口に膾炙されるやうになつた。

中宮の御梳櫛についておもひ起すのは、その御髮である。それは、長德二年五月、御兄弟の伊周隆家流罪の大變に出遭つて、手づから鋏をとつての御落餝、くりくり坊主でこそないが、肩のあたりの切髮姿であつた。されど、主上の御寵遇は渝らせられず、尼姿の中宮を、後宮にむかへ入れられた。「天下不二感心一」と、當時の識者が書置かれたのも、尤な次第である。その時から今に足かけ五年、御髮も四五尺には伸びたであらう。御梳櫛にさむらふ清少も、美男蔓も、そのかひあるを喜んだらう。

通篇ことゞく、翁丸に同情の文字。「痴者」と罵つたのも、それを憫むあまりの激語で、「涙を落しに落す」も「よべは隱れ忍びてあるなり」も、その最貧眼に映つた幻影に過ぎない。しかも、この才女の認定は、端なく事實として承認され、天威のかしこい證據となつた。詰らぬ事にも迷信を遣うした時代、まして宮廷内に生活した婦人の事とて、萬事をお上にひき付けて、感傷的に感受したものである。か程まで、犬に同情したのは、清少の性格として、侵媚な猫などよりは、快活な犬の方を好んだ故もあらう。

この文、主格、助辭、成語をはぶくことは例のやうだが、文調は、その得意の簡勁な筆法とちがつて、悠揚迫らざる趣がある。元來當時の敍事文は、大抵かうした筆致ではあるが、清少の文才は、なほその光彩を煥發せずには置かない。猫の段もとより妙である。「あはれいみじく」の追憶から本題に入つて、極力翁丸のうへを敍す、運筆自在である。御鏡持の段、「さはこれ翁丸」といひ、又「さは翁丸」とある、一は心におもひ、一は詞に現したのではあるが、文章として見ると、やはり重複の感じがする。さて、中宮、右近、主上と、順次に「笑ふ」の四疊、殿の内くつがへるまでに、どんなにか賑やかであつたらう。しかしこの邊、行文やゝ晦澁に陷つて、筆力がすこし鈍つた觀があるを「忠隆きゝて」から、さらに復活して來て、文勢が大に揚つた。敍事も概して、妙であるが、殊にめでたく聞えるのは、その會話である。源氏物語とちがつて、全くの實事譚であるから、會話も、口語そのまゝの調子を失はず、すべてキビキビして、その齒切のよいこと、江戸時代の作物を讀むやうな氣がする。變化の上からこの文をみると、翁丸が猫に走りかゝる一段は抑、「あはれゆるぎ歩き云々」は揚、以下打擲の段、腫犬の段は抑、「御鏡をもうち置き」よりは揚、「忠隆きゝて」よりは抑、「畏りゆるされて」より終までは揚である。以上は經絲で、婦人連の同情と、忠隆の頑固とは相反映して、緯絲となつてゐる。かうした變化があつてこそ、長文も退屈を生じないのである。息をも吐かず讀まられるのである。

この翁丸勅勘の條を讀んで、まことに感慨に堪へないのは、中宮のお身の上である。見よ、御兄の伊周は、先年勅勘を蒙つて、流罪になつたのに、半歲もたゝぬうち、勝手に歸京した。何とその事迹が、翁丸と似てゐるではないか。さて中宮御所にきて潛伏したのを、忽に逮捕された。忠隆が翁丸を求める時の詞は、暗にこれを當てこすつたものではあるまいか。お聞きなされた中宮の心のうち、想ひ遣り奉るさへ、お氣の毒の極である。主上の「淺ましう犬なども、かゝる心あるなり」との仰も、或は下におぼし召す所があつたのではあるまいか。翁丸が畏りを宥されたのは、伊周兄弟が、東三條院の御病氣の御赦に逢つて還つたのにも似てゐる。そして、翁丸は「元のやうになりにき」とあるが、伊周兄弟は、恩寵また元のやうでもなく、勢力は政治的にも社會的にも、全く道長の壟斷する所となつてしまつた。」

中宮今回の入内は立后の爲であつて、二月廿日に皇后宮となつたのは、おめでたいやうではあるが、

その實は、道長の女彰子が、新に中宮に立つた結果で、公式的に後宮の勢力を分割して對抗する、强敵が出現したのである。榮花物語に、

「この度は、參るにつゝましう覺え侍れど、今一度、(主上を)見奉り、又、今宮(敦康)の御有樣後めたくて、かく思立ち侍るなり」など、まめやかに申させ給ふ。

と見えて、拜祭するほど、お氣の毒な御境遇である。そしてこの間に、また御妊娠になつて、九箇月目の十二月十六日、皇女媄子内親王を產んで崩ぜられたのである。

八段

正月一日、三月三日は、いとうらゝかなる。五月五日は曇りくらしたる。七月七日は曇り、夕つかたは晴れたる空に、月いとあかく、星のすがた見えたる。九月九日は、曉がたより雨すこし降りて、菊の露もこちたくそぼち、おほひたる綿などもいたくぬれ、うつしの香ももてはやされたる。つとめてはやみにたれど、なほ曇りてやゝもすればふり落ちぬべく見えたるもをかし。

〇五月五日「五月」をサツキと訓む。早苗を採る月なれば早苗月の略なりといひ、又さは農事をも意味する語にて、五月は田植をする月なればいふともいへり。さて五月五日は端午の節なり。〇端午の節　端午は月始の午の義なれば、もとは午の日なりけんも、早くより五月五日と定れり。この日朝廷にては節會を行はる。その儀式は、まづ三日に六衛府より菖蒲、艾を奉るを、四日に主殿寮、これを所々の殿舍の

〔口譯〕正月一日や三月三日は、大層空がうらゝかに晴れたのが面白い。五月五日は、終日曇つてしまつたのが面白い。七月七日は、晝のうち曇り、夕方は晴れた空に、月が大層あかるく、今宵逢ふといふ星の形も見えたのが面白い。九月九日は、曉時分から雨が少し降つて、菊の露も仰山にぬれ、花に覆うた綿などもひどく濡れ、その綿に移つた菊の香も、高く薫るので、格別に珍重されたのが面白い。朝はもう雨が止んでしまつたが、やはり曇つて、やゝともすると雨が落ちて來さうに見えてゐるのも面白い。

軒に葺く。五日に絲所より菖蒲鬘を獻じ、天皇これをかけて武德殿に出御し、群臣に酒を賜ふ。人々皆菖蒲を鬘にす。又藥玉を賜ふ。終りて騎射の事あり。推古天皇の時より始まる由、公事根源に見ゆ。もと支那の風俗の輸入せられたるものなり。〇七月七日「七月」をフヅキ、フミヅキ、又フンヅキとも訓む。穗見月或は穗含月の義なりとぞ。七月七日の夜は七夕とて、乞巧奠あり。〇乞巧奠　キコウデン。牽牛、織女の二星を祭りて、婦人その手工を祈れば、必ず三年内に叶ふといふ。これ乞巧なり。朝廷にては、その夜藏人御調度を拂ひ、清涼殿の御庭に机四脚を立てゝ、灯臺九本に點火し、箏の琴を置き、鹽に水を入れて星を映す。これも支那風俗の輸入にて、孝謙天皇の天平勝寶七年に始る。續齊諧記に、七月七日、織女星天河を渡りて、牽牛星に會ふこと見ゆ。曹植九詠の註に「牽牛夫たり、織女婦たり、二星各一旁に處る。七月七日一會同を得」と。〇星の「星」は牽牛、織女の二星をさす。〇九月九日　重陽の節なり。〇重陽の節　易經に六を陰數となし、九を陽數となす。九月九日は九と九との重れるを以て、重陽とはいふなり。この日主上南殿に出御ありて、節會を行はる。御帳の左右に茱萸の袋をかけ、御前に菊瓶を置く。王卿以下探韻を賜り、詩を作りて獻ず。終つて氷魚及び菊酒を賜ふ。これを菊花の宴といふ。これも支那の風俗に本づく。〇曉方　この時代にいふ曉は、大抵夜深なり。こゝもその意と見ゆ。〇こちたく　言痛しの義とぞ。言痛しとは言の甚だ多くて騷しきにいふ。轉りて物の多きにも、甚しきにもいふ。俗のゴテゴテシタ、仰山などに當る。〇そぼち　甚しく沾るゝこと。〇おほひたる綿　菊花に被ひたる綿にて、菊の着綿をいふ。春湊浪語に「菊は仙境に咲ける花なれば、延年の功能ありとて、九月八日の夕、菊花に綿を着せ、九日露にぬれたる其綿にて、身の老を拭ひ捨つる也。老人にならぬ厭なり。もし九日花咲かざることあらば、綿にて菊花を作り、八日の夕菊に被せ置き、九日これを取りて拭ふ」と見ゆ。安齋隨筆に、黃にも赤にもその花の色に染めて置くとあるは、稍後の世の事であらう。「綿」は眞綿

なり。この事、當時禁中を始め貴族間には、盛んに行はれたりき。○うつしの香　菊の着綿に移れる香をいふ。○もてはやされ　珍重がること。持榮すの義。○ふり落ちぬべく　雨の降り落ちぬべくと也。○つとめては云々　深夜より降りたる雨の、早朝には止みたれどと也。○「曇りくらしたる」、「姿みえたる」、「もてはやされたる」の下、各をかしを略けり。

評　令に定められた節日は、正月の一日、七日、十六日、三月の三日、五月の五日、七月の七日、十一月の大嘗の日であるが、宇多の朝に正月十五日、三月三日、五月五日、七月七日、十月初亥の日を節供と定め、更に後世にいふ、五節供の日取と變つて來た。正月一日の外は、宮中では文士を召して、詩歌の興宴があつた。

この文、五節供を晴雨といふ氣象の方面から觀察してゐる。正月一日、三月三日の麗らかさを喜ぶのは、清少の持論であるが、あまり當然過ぎてゐる。五月五日を曇れと希つたのは、しめやかな五月氣分を味はうが爲である。七月七日に書の曇を願つたのは、その日雨が降ると、天の川の水嵩がまして、牽牛織女の二星が出あひ難いといふ傳說によつて、二星に同情して、晴か雨かと、氣をもむ所に、面白味があるのである。さすがに夕方は晴れて、二星の姿の見えるのを願うたのは、何處までも優しい女の情である。九月九日の曉の雨は、雨のしめりに、菊の香が高く立たうかと思ふからである。しかし、終日降つては事醒しだから、動もすれば落ちて來さうな位の所に、趣を求めたのである。

かうして見ると、日中の雨を希つたのは、一つもない。陰欝な雨は、清少の性格では、ことに好かなかつたであらうが、元來この時代の上流社會の習慣として、一般に雨は厭がられたのである。荻野博士の說に、彼等の服裝と、その宮中においての行事の方法とが、雨日には甚だ不適當であつた故だらうと。まことに尤もと思はれる。更に清少の雨に對しての、滿腔の不平が聞きたいなら、下文、成信中將はの段

（口譯）臣下が參內して、官位昇進の御禮を申上げるのが面白い。裾を地上に曳いて、笏を持つて、主上の御前の方に向つて、立つて居るよ。そして拜をし、舞蹈して驚くことよ。

を見るがよい。

九段

よろこび奏するこそをかしけれ。うしろをまかせて、笏とりて、御前の方に向ひてたてるを。拜し舞蹈しさわぐよ。

釋　○よろこび奏する　任官敍位の後、參內して御禮を申上ぐるをいふ。慶申とも、拜賀、奏慶ともいふ。○うしろ「後」とは下襲の尻（裾ともいふ）のこと。○下襲　シタガサネ。束帶の時に、必ず用ゐるものにて、半臂の下に着用す。形小袖の如く、後に胴より續きたる裾ありて、長く引く。後世は、裾を下襲より切放ちて用ゐる。裾の長さは、村上帝の頃は袍の襴より出すこと一尺五寸位なりしが、後一條帝の頃は大臣七尺、納言六尺、參議五尺となり、その後長きを貴ぶに至り、一丈五尺にもなしたる時あり。一條帝の頃は、後一條帝の頃と大差なきが如し。下襲の色は大抵表白にて浮線綾の丸、裏黑、夏は穀の單にて、紋は菱の類、色は蘇芳、四位以下は平絹を用ゐ、冬は表白裏黑、夏は二藍なりと。（附圖參照）○まかせて　引くこと。神功紀に引の字をまかすと訓めり。和訓栞に「古事記、彌豆麻岐の神は水引の義なり。まかしの反まきなり」と見ゆ。○笏　シャク。文武官束帶の時に、右手に持つ手板。君前に在りて事を行ふに、備忘の爲に、之に物を書きつけたりき。後にはそれを紙に書きて、笏の裏に貼る。之を笏紙といふ。倭名鈔に「笏音忽、俗云尺、長一尺六寸、闊三寸、厚五分也」と見ゆ。音骨に通ずるを忌みて、尺といひし也。蓋しその長さはもと一尺なりしならん。元來支那の制に習へるものなれば倭名なし。和名抄に見えたる寸法は、後世のには異なりたれど、一條帝の頃は尙この制なるべし。大寶令の制に「天皇及親

王、臣下五位以上牙笏、六位以下木笏」とあり。名目抄に「牙笏、禮服之時用レ之、慶賀笏、奏慶時用レ之」。○立てるを　「を」は歎辭にて、よといふ程の意。本居太平は「立てりをり」の誤かといへり。○拜し舞蹈し　敍位任官し、或は祿を賜はりたる時に、拜舞して謝する禮。卽ち手にて舞ひ、足にて踏み、一度立ち一度坐し、右左に顧みて、悅の態を表すなり。拾芥抄に「舞踏事、再拜置レ笏、立左右左、居左右左、取レ笏小拜、立再拜」。作法故實に「顧レ左之時、以二右手一取二左端袖上一、以二左手一入二左袖內下方一、左手在二袖內一也、右准可レ知レ之、顧レ左之時、而不レ屈不レ重、云々」。

評　後をまかせることは、容儀の修飾を重んじた當時では、さぞ優美に見えたことだらう。下文にも、裾の短いのを、わるいやうにいつてゐる。一體長袖長裾で翩々たる姿を、優雅と感ずるのは、古今東西の差別もないことで、心理的に當然の歸結ではあるが、裾はやゝ、その程度の過ぎたものだらう。「騷ぐ」の一語に、奏慶の人數ある趣があらはれてゐる。

十　段

今內裏の東をば、北の陣とぞいふ。櫓の木のはるかにたかきが立てるを、常に見て、「幾ひろかあらむ」などいふに、權中將の、「もとより打ちきりて、定澄僧都の枝扇にせさせばや」との給ひしを、山階寺の別當になりて、よろこび申の日、近衞づかさにて、この君の出で給へるに、高き屐子をさへはきたれば、ゆゝしく高し。出でぬる後に、淸「など、その枝扇はもたせ給はぬ」といへば、權中將「ものわすれせず」と笑ひ給ふ。

（考異）○定澄　諸本定證とあり。今は興福寺別當次第による。○よろこび申　原本申すとあり。古本による。

（口語）今內裏の東面をば、假に北の陣と呼んでゐる。そこに檜の木の丈の、ぐつと高いのが立つて居るのを、何時も見て、「幾尋ぐらゐあらうか」などいふと、權中將が「あの木を根からうち切つて、脊高の定澄僧都の枝扇にさせたらよからう」とお洒落れなすつたのを、定澄が興福寺の別當になつて、參內してそのお禮を申上げる日、この權中將が近衞の役人で、儀式の爲に庭上に出られたが、定澄は、只ですら脊高の上に、高い屐子をさへ穿いたので、えらく高い。拜賀が濟んで、定澄が退出した後で「なぜ、此間仰しやつた枝扇は、定澄にお持たせなさらぬのです」といふと、權中將が「貴女は物覺がいゝな」とお笑ひなされた。

釋　○今內裏　假に移御し給へる當時の皇居をいふ。こゝにては一條の院をさせり。下文に「小一條の院をば今內裏といふ」とあり。日本紀略によるに、長保元年六月十四日亥の刻內裏燒亡し、同十六日に、天皇一條大宮院に渡らせ給へり。拾芥抄に「一條南大宮東二町、謙德公家、又爲二法住寺大臣爲光家一」とあり。一條院にても、尙陛下のおはします所は淸涼殿といひ、殿舍宮門、何れも本內裏の稱號を用ゐられたり。（二十五段の一條院の挿圖參照）○北の陣　縫殿陣をいふ。朔平門にあり。○櫓の木　槲の一種。紅葉樹なり。○ひろ　兩手をひろげたる長さ、凡そ六尺をいふ。大戴禮に「舒レ肱知レ尋」。○權中將　源成信。致平親王の子なり。權記に左近衞中將從四位上と見えたり。藤原道長の妻倫子の妹の子にて、道長の養子となる。長保三年廿三歲にして出家す。「中將」は近衞府の次官。○近衞府　左右あり。兵仗を帶して禁中を警護し、朝會に隊仗を率ゐて威儀を備へ、行幸に警衞をなす。大將各一人、（從三位）カミと訓ず。中將各一人後四人、（從四位下）少將各一人後四人となる。（正五位下）共にスケと訓ず。下に將監、將曹、府生、番長及び舍人左右各三百人あり。○もとより　根本よりなり。○定澄　ジヤウチヨウ。御堂關白記長保二年三月十七日の條に、以二定澄律師一任二興福寺別當一、興福寺別當次第に、同年八月權少僧都に任じ、後大僧都となり、長和四年十一月八十一にて寂すと見ゆ。○僧都　僧正に次ぐ僧官にて、四位の殿上人に准ず。推古帝の時、始めて僧正、僧都、法頭の三官を置きて僧尼を統領せしめ、天武帝の時に至り、僧正、僧都、律師を三綱としたり。員數も時代により增減あり。○枝扇　木の細枝を三股に採り、一方を柄とし、二方に紙を張りたる扇にて、風流の爲にもちしものか。旁註に「扇の大骨を木の枝ある處にて要の方にして、法衣の紐にかくる樣に造れるもの」といひ、又碩鼠漫筆に「もし板扇を枝と誤りしにはあらじか。扇は檜の板を重ねたるなれば、板扇ともいはるべし」といへり。○山階寺　興福寺のこと。孝德帝の時、藤原鎌足が山城の山階に草創せし寺にて、元明帝の時、藤原不比等これを大和の奈良に移

して後も、元のまゝに山階寺といへり。藤原氏の氏寺。法相宗。○別當　ベットウ。寺内の法務を取り統ぶる長官。○よろこび申の日　慶申する日の略。よろこび奏するを見よ。○近衛づかさにてこの君の出で給へるに　「近衛司にて」は近衛の役人にてと也。「この君」とは成信をさす。「出で給へる」は成信は近衛の中將なれば、威儀の爲、奏慶の庭上に立てる也。○出でぬる後　僧都の退出したるのちと也。

評 この段は、定澄が別當補任の日に、すぐ慶申をしたとすれば、長保二年三月十七日の事である。（成信廿二、定澄六十五、清少卅五六？）

去年六月、この一條院に、遷御があつてから。中宮は、そこに八月上旬まで居られ、今年は、二月中旬から三月下旬までと、八月八日から同廿七日までとの二回をあがつて居られた。最初からこの三月まではざつと十箇月、常に今内裏に出入して、楢の木の高い噂も爲飽きた頃なのを、はからず成信が甚しい誇張の洒落に、更にあたらしい意味を以て、この木を見あげたであらう。定澄は元來「定澄僧都に桂なし」（一七二段）と囃された程の背高であつた。「など持たせ給はぬ」と、一本突込まれて、成信は、おのが双物で切られた形である。「物忘せず」の捨台詞、全く敗亡して苦笑した態が見えるやうである。

成信は道長の養子だから、中宮側からは、好感情を持たれる人ではない筈である。それでも耳のはやい人だの、兵部に馴染んだのがわるいのと、とかくに噂にのぼるのは何故か。彼は少將重家と共に、輝く中將、光る少將と、一世にうたはれた美男である。

東を以て北とする、今内裏の假初なことは推量されよう。けれど何故に、こんな方角違の稱呼を用るたかに至つては、古來明解がない。これは本内裏では、主上の御座所の清涼殿は、東を正面とした南北行の建物である。ゆゑに東面に正坐する時は、北の陣は左方にあたる。然るにこの今内裏は、南面東西行の建物である。故に南面正坐の場合には、左方は東にあたるが、左に北の陣を望んだ慣習のまゝに、東門の陣をば、北の陣と呼んだものである。

御堂關白記に據れば、長保二年の三月十七日、定澄は律師で山階寺即ち興福寺の別當に任じたのである。隨つてその慶申の日取が、前度の中宮在宮中の折に當つてゐる。興福寺別當次第に「八月廿九日權少僧都に任じ興福寺別當となる」とあるは誤で、八月廿九日は僧都任官の日附である。然るに本文に定澄僧都としてあるのは、この文が定澄が任僧都の八月廿九日以後の執筆であることが知られる。

十一段

山は　小倉山。三笠山。このくれ山。わすれずの山。いりたち山。鹿背山。ひはの山。かたさり山こそ、誰に所おきけるにかと、をかしけれ。五幡山。後瀬山。笠取山。ひらの山。鳥籠の山は「わが名もらすな」と、みかどのよませ給ひけむ、いとをかし。伊吹山。朝倉山、よそに見るこそをかしけれ。いは田山。大比禮山もをかし。臨時の祭の使などおもひ出でらるべし。手向山。三輪の山、いとをかし。音羽山。まちかね山。たまさか山。耳なし山。末の松山。葛城山。美濃のお山。柞山。位山。吉備の中山。嵐山。更級山。姨捨山。小鹽山。淺間山。かたゝめ山。かへる山。妹背山。

釋 ○小倉山　萬葉集に見えたるは、大和の龍田山なる小倉山なれど、平安京になりて詩歌に詠みならへる、は、山城の大井河を隔てゝ、嵐山に對する小倉山なり。をぐら（小闇）の名の面白きみのならず、特に秋色

（口譯）山は　小倉山、三笠山、このくれ山、忘れずの山、いりたち山、鹿背山、比叡の山が面白い。かたさり山は、誰に遠慮して脇へ退いたのかしらと思はれて面白い。五幡山、後瀬山、笠取山、比良の山が面白い。鳥籠の山は「人が聞いたら、いや知らぬと答へて、決して自分の名を人に洩らすな」と、あめ

の帝が、近江の采女に詠んでお遣りなされたであらうことが面白い。伊吹山が面白い。朝倉山は、昔逢つた人をかけ離れて、今は餘所に見るであらうことが、大層面白い。石田山が面白い。大ひれ山も面白い。名を聞くと、大比禮といふ歌から、石清水の臨時祭に、勅使のたつことが聯想されるであらう。手向山が面白い。三輪の山が大層面白い。音羽山、待兼山、玉阪山、耳無山、すゑの松山、葛城山、美濃のお山、位山、吉備の中山、嵐山、更級山、姨捨山、小鹽山、淺間山、かたゝめ山、かへる山、妹背山が面白い。

に富めるを以て名あり。拾遺集に藤原忠平「小倉山峯のもみぢ葉心あらば今一度の御幸またなむ」。○三笠山　大和春日山の一部。藤原の氏神春日神社のある靈地なり。萬葉集に「春日なる三笠の山に月の舟出づみやびをの飲む盃に影のみえつゝ」。○このくれ山　濱臣いふ「萬葉集に、二上山にこのくれの繁き溪べを、その他このくれ繁き、このくれ暗など見えたり。木の繁りて暗きをいふにて、地名に非ず。清少の誤ならん」。○忘れずの山　陸前刈田郡藏王嶽の古名。六帖に「みちのくのあぶ隈川のあなたにや人忘れずの山はさかしき」。忘れずの名の面白きなり。○いりたち山　所不明。思ふに「入立」はいひかけにて、立山ならんか。さては越中なり。「入立」は立入るといふに同じくて、名の面白きなり。○鹿背山　山城相樂郡。古今集に「都出でてけふみかの原泉川風さむし衣かせ山」。山の名の面白きなり。○ひはの山　古事記伊邪那美命を隱しまつる段に、出雲國と伯耆との境に比婆山とあり。然れども濱臣が「ひえの山の誤か」といへる、從ふべきに似たり。比叡の山は延曆寺のある處にして、京都の艮に聳ゆる名山。○かたさり山　所不明。人に所を讓りて、我はかたへに去るを「方去」といふ。○所をおく　遠慮すること。○五幡山　越前敦賀より鹿蒜に至る間に在り。新古今集に伊勢「忘れなむ世にも越路のかへる山いつはた人にあはむとすらむ」。何時將に通ふ名の面白きならん。○後瀬の山　若狹の小濱。萬葉集に「かにかくに人はいへども若狹路の後瀬の山の後もあはむ君」。「後瀬」は又の逢ふ瀬といふ意なれば面白きなり。水のうへにて後瀬といふは、川下の瀬なり。○笠取山　山城宇治郡。古今集に「雨ふれど露ももらじを笠取の山はいかでかもみぢそめけむ」。「笠とり」は笠を着る、傘をさすの意。それが滑稽に感ずる也。○比良の山　近江の名山。萬葉集に「さゝなみのひら山風の海ふけば釣する海人の袖かへる見ゆ」。○鳥籠の山　近江犬上郡、不知哉川の北岸にあり。○わが名もらすな　古今集に「犬上のとこの山なるいさや川いさと答へてわが名もらすな」。その左註に「此歌は或人あめの帝の、近江の采女に賜へる」とあるによれり。上三句は、いさといはん爲の序詞にて、親などが、もし、其方に男あるべし誰そと問はゝ、さやうなる事はいや知らぬと返事せよ、決してわが名を洩らすなよといふ意。あめの帝は聖武天皇を申す。大鏡に「あめのみかどの造り給へる東大寺」とあり。この歌、萬葉集なる讀人不知「犬上の床の山なるいさや川いさとをきこせあが名告らすな」の訛にて、實は御製にあらず。○伊吹山　近江の名山。日本武尊登涉ありしより史籍に著れ、江北の鎭山として、京都七高山の一に列せり。「いぶき」は息吹にて、名も面白きなり。上三句は、いさといはん爲の序詞にて、親などが、もし、其方に男あるべし誰そと問はゝ、さやうなる事はいや知らぬと返事せよ、決してわが名を洩らすなよといふ意。あめの帝は聖武天皇を申す。大鏡に「あめのみかどの造り給へる東大寺」とあり。この歌、萬葉集なる讀人不知「犬上の床の山なるいさや川いさとをきこせあが名告らすな」の訛にて、實は御製にあらず。○伊吹山　近江の名山。日本武尊登涉ありしより史籍に著れ、江北の鎭山として、京都七高山の一に列せり。「いぶき」は息吹にて、名も面白きなり。○朝倉山　筑前朝倉郡。○よそにみる云々　六帖に「昔見し人をば我はよそにせし朝倉山の雲居遙に」とあるによれるか。意は朝倉山が大空はるかに隔れる如く、昔馴染みし人を、自分は餘所に隔てしことの悔しさよと也。○をかしき　の下、よの歎辭を略けり。○いはた山　山城宇治郡の今石田といふ所か。六帖「いづくにぞありとは聞きしいはた山君が心のなれるなりけり」。○大比禮山　抄に攝津とあれど不明。○臨時の祭の使　石清水の臨時祭の勅使をいふ。石清水とは山城の男山八幡宮のこと。この臨時祭は、八月十五日の放生會に對して、三月に行はる。江次第に「起二天慶五年四月廿七日一依三平將門亂逆報賽一也」とある是なり。朱雀帝の時に始まり、圓融帝の時より毎年行はれしなり。公事根源に「祭は二の午の日にて、まづ奉行の藏人、使、舞人などを定め、三月中の辰の日試樂あり、主上清涼殿の孫庇に御椅子立て、出御あり。舞人竹の臺の下にて、竹の枝を折りて髮挿にさす。仁壽殿の廊の下より進みて、御前に連り立つ。陪從、近衞の召人、求子うたひ、琴笛篳篥の音をあはす。舞人舞ひ終りて、大比禮樂を歌ひて、舞絶えずして退出づ」と見えたり。大比禮山の名によりて、石清水の臨時祭の大比禮樂を聯想して、勅使など立つが思ひ出さる、を興がりし也。「大比禮」は東遊の歌にて「大比禮、小比禮の山そはや、よりてこそよりてこそ、山はよらなれや、云々」。○手向山　大和の奈良。行基菩薩の勸請せし八幡宮あるを以て有名なり。菅原道眞の「紅葉の錦神のまにまに」とよめる處。山城近江の國境なる相阪

山を、萬葉集に「ゆふだたみ手向の山」と詠めるによりて、これをも相阪山とする說あれど、平安時代には相阪山とのみいひて、手向山といへる事なし。當時に於いては、必ず菅神の詠に見ゆる大和の手向山なるべき理由あり。○三輪の山　大和磯城郡。大物主のまします神山なるを以て著名なり。綜麻の三わけ殘れることや、標の杉や傳說多かり。萬葉集に「みわ山をしかもかくすか雲だにも心あらなむかくさふべしや」。○音羽山　山城の山科（清水の上）にあり。古今集に「山科の音羽の山の音にだに人のしるべくわが戀ひめかも」など詠まれたる勝地。また同國宇治にもあり。○待かね山　六帖に「津の國の待兼山のよぶこ鳥なけど今來といふ人もなし」とあれば攝津なるべし。待ちかぬるといふ名の面白きなり。○玉さか山　攝津豐島郡。忠見集の詞書に「津の國の玉坂といふ所に」、また元良親王集の歌に「てしまなる名を玉坂のたまさかに」とあり。たまさかの名の、稀にの意に通ふが面白きなり。○耳なし山　大和の香具山の北なる小山。香具山、畝火山と共に三山の稱ありて、上代より話說多し。又耳無の名も滑稽なる也。萬葉集に「かぐ山は畝火ををしと、耳梨と相たゝかひき、云々」。○末の松山　陸前宮城郡か。陸奥二戸の浪打峠とする說は當らず。古今集「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪も越えなむ」の歌にて著名なり。○葛城山　大和河內の國境にある名山にして、修驗道の靈場。古今集に「しもとゆふ葛城山にふる雪のまなく時なくおもほゆる哉」。○美濃のお山　美濃の南宮山のこと。伊勢集に「思ひ出づみのゝお山の一つ松契りし心今も忘れず」。これは名の優なる也。○柞山　山城相樂郡祝園村柞ノ杜か。後撰集に貫之「柞山峯の嵐の風をいたみふる言の葉を書きぞ集むる」。柞（漆の類）の名の母に通ふを以て懷しき也。○位山　信濃。或は飛彈ともいふ。六帖「衣手の色まさりつゝ信濃なる位の山は君がまにまに」。位といふ名の珍しきならん。○吉備の中山　備中。催馬樂に「もとしけき吉備の中山昔より名のふりこぬは今の世の爲」。これは名の優なる也。○嵐山　山城大井河に沿へる勝地にして、嵐の名も面白きなり。拾遺集に「とふ人も今はあらしの山風に友まつ蟲の聲ぞ悲しき」。○更級山　信濃更級郡冠着山のこと。月の名所なり。拾遺集に貫之「月影はあかず見るとも更科の山の麓に長居すな君」。○姨捨山　更級郡の長谷寺山か。古今集に「わが心慰めかねつ更科やをば捨山に照る月を見て」。月の名所にして、姨捨の名が、感傷に堪へざる也。○小鹽山　山城乙訓郡の大原山なり。藤原氏の后妃の爲に、春日の神を勸請したる大原野神社あるを以てゆかしき也。古今集に業平「大原や小鹽の山も今日こそは神代のことも思ひいづらめ」。○淺間山　信濃上野の國境にある噴火山。伊勢物語に「信濃なる淺間の山に立つ煙をちこち人の見やはとがめぬ」。煙の立昇るがをかしき也。○かたゝめ山　所不明。思ふにかたゝ敷山か。敷の草體、爲の草體に似たるよりの誤ならん。六帖に「夏衣片敷山の時鳥なく聲しげくなりまさる也」。さては名のをかしき也。○かへる山　古くはかへる山といへり。上なる五幡山を見よ。古今集に「かへる山ありとは聞けど春霞たち別れなば戀しかるべし」。名の歸るに通ふが面白きならん。○妹背山　萬葉集に「兄の山にたゞに向へる妹の山」とありて、紀伊伊都郡。紀の川を隔てゝ相對す。今紀の川の上流なる大和の吉野川にも同名の地あり。「妹背」は、古へ汎く男女互に呼びし稱なりしが、狹義には夫をせといひ、妻をいもといへり。山に妹と背即ち夫婦といふ名の附きたるは、珍しくもをかしき也。

評　この段以下の名所の記述は、歌枕として著名なものを擧げたものである。清少は、實に才女には相違ないが、かうも澤山な名所を、どうして記憶してゐたかが疑はれる。もとより行旅の不便な時代に、しかも婦人の身で、さう廣い範圍において旅行する譯もなし、出來もしない。又、そんな形迹も認められない。下文に、海に關した記事が、甚だ巨細を悉して叙されてあるのを見ると、父元輔が、周防守肥後守で往復した折に、或は一緒に往つたかも知れないとは思ふが、それなら、全草子中の記事に、もうすこし著く、その道程に當る方面や、九州邊の地名が現れなければならぬ筈である。やはり往かなかつたの

であらう。さうとすると、益不思議に思はれるが、よく考へれば、別に何でもない事であつた。それは曾祖父深養父、父元輔は、いづれも名高い歌人であつたから、家に傳へた重代の歌枕の打聽類が、必ず澤山にあつたのであらう。清少は奇貨居くべしとして、これを自分の得意な方面の文章に利用したのである。やはり彼は才女である。

この文は、單に名詞の列記に過ぎないやうではあるが、大抵古歌に因緣して、聯想上、特殊の好感を以て迎へらるべきもので、史蹟や、勝地や、名義のをかしいものや、優なものやを擧げた。そこに挿んだ短評が、また頗る警句に富んでゐる。但あながちな山をさへ取出しながら、名山富士を逸したのは、聊か無念である。伊勢物語によつて、形は鹽尻のやうで、高さは比叡山の廿倍と知り、竹取物語によつて、その名稱に不死の涸落のあることも知つて居たらうに。

十二段

峰は　ゆづるはの峯。阿彌陀の峰。彌高の峯。

釋 ○ゆづるはの峰　攝津武庫郡。古註に「楪の嵩といふに同じ。」とあり。楪（交讓木）の名が讓るといふに通ひて興あるなり。○あみだの峰　京都の東山の一峰、即ち今の豐國山をいふ。公任（清少と同時代の人）の歌に「今よりはあみだの峰の月かげを千代の後まで頼むべき哉」。阿彌陀といふ名の畏きなり。○彌高の峯　近江にも、備中にもあり。峰にて彌高といふが面白きならん。

（口譯）峯は　ゆづるの峰、あみだの峰、彌高の峰が面白い。

十三段

原は　たか原。みかの原。あしたの原。その原。萩原。粟津の原。なし原。うなゐこが原。安倍の原。篠原。

釋 ○たか原　古註大和とあれど詳ならず。或は河内中河内郡竹原井田といふ處か。景勝の地にて、平城の朝に離宮を置かる。○みかの原　山城綴喜郡。元明帝以來離宮あり、聖武帝の代、一時皇都となる。萬葉集に「みかの原ふたぎの野邊を清みこそ大宮處定めけらしも」。瓶の緣にて蓋をいひ、且三二と數へたり。勝地にもあり、名も面白きなり。○あしたの原　大和二上山の東方、片岡のあたりの原野を葦田の原といふ。古今集に「霧たちて雁ぞなくなる片岡のあしたの原はもみぢしぬらむ」。あしたは朝に通ひて氣持よき也。○その原　薗原。信濃下伊那郡。新古今集に是則「園原や伏屋に生ふる箒木のありとは見えてあはぬ君かな」とあり、遠く見る時は箒の如く聳え立ち、近づけば見えずといふ箒木によりて有名なり。○萩原　紀伊日高郡。○粟津の原　近江。催馬樂に「鷹の子は、麿にたうばらんや、手にすゑて、粟津の御粟栖の、めぐりの鶉とらさんや、さきん達や」などの歌にてゆかしきならん。○なし原　大和奈良。古へ春日祭の時、勅使の着御したりし地。内侍原と書く（大和に梨原といふが、今一所あり）。○うなゐこが原　所不明。六帖に山上憶良「名にしおへば何れもかなし朝な朝なでておふししうなゐ子が原」。髫髪兒といふ名のいはたしき也。○あべの原　攝津天王寺の以南の地。○篠原　加賀にもあれど、近江の方なるべし。野路の篠原と歌に詠めり。小竹原がやさしく思はるゝならん。

（口譯）原は　竹原、甕の原、あしたの原、園原、萩原、粟津の原、梨原、うなゐ子が原、あべの原、篠原が面白い。

十四段

市は　辰の市。つば市は、大和にあまたある中に、長谷寺にまうづる人の、かならず

（口譯）市は　辰の市が面白

い。大和に澤山市のある中に、椿市は長谷の觀音に參詣する人が、きつと此處に立ちよるのであるから、觀音樣の御緣があるのかしらと思はれて、思ひなしが、格別である。おふさの市、餝摩の市、飛鳥の市が面白い。

そこにとゞまりければ、觀音の御緣あるにやと、心ことなるなり。おふさの市。餝摩の市。飛鳥の市。

釋 ○市　物を賣買する市場。○辰の市　大和奈良。拾遺集に人丸「無き名のみたつの市とは騷げどもいさまた人をうるよしもなし」など詠まれたり。○つば市　椿市、海石榴市など書けり。大和の今の金谷の地。初瀨峽谷の入口なり。本邦市場の最も早く開けし所なり。萬葉集に「紫は灰さすものをつば市の八十の街にあひし子やたれ」。○大和にあまたある中に　大和に市は數多ある中にと也。輕の市、磐余の市、三輪の市など尙多かり。○長谷寺　大和初瀨にあり。眞言宗の大寺。奈良朝の建立にて、本尊は十一面觀世音菩薩なり。當時朝野の尊信淺からざりき。李部王記に「延長八年八月、作二願文一、遙祈二長谷寺觀音一、願二御病平癒一爲、造二白檀觀音像一、乃奉二鏡一面灯明十萬灯一」とあり。香火の盛なりしこと想ふべし。○必ずそこにとゞまりければ　初瀨參詣支度の爲に、椿市に誰も立止るをいふ。その支度には、かねて用意したる布帛を、燈明皿などに、取換へて捧ぐることもありしと見ゆ。小右記に「正曆元年九月八日參二長谷寺一、午後至二椿市一、令レ交二易御灯明土器等一」とあり。○觀音の御緣　御緣とは御引合せといふ程の意。佛家にては、因は緣に依つて果を生ずと說き、緣を結ばんことを勸めたり。○心ことなる　他の市とは違ひて、思なし異なると也。○おふさの市　大和物語に、三河に「あふさのうまや」の名見えたり。或は同處か。○餝磨の市　播磨餝磨郡。詞花集、曾根好忠「播磨なる餝磨にそむるあながちに人を戀ひしと思ふ頃かな。」○飛鳥の市　大和高市郡飛鳥村。往古數世の宮地の市なれば、懷しくも覺えしならん。

評 市を列記した中に、長谷の觀音を點綴して、文致をもとめた。そもそも觀音薩埵は重寶な佛樣で、法華經に、その功德を事々しく說いてあるが、支那でもわが邦でも、一般に信仰されるのは、その慈眼視衆生の利益の顯面なのをよろこんだものである。されば早くから、京畿地方にその靈場は建立され、崇福寺、初瀨寺、南圓堂、三井寺、石山寺、淸水寺、粉川寺をはじめとして、遂に卅三箇所の多數になつた。傳によると、當時花山法皇は、これ等の靈場を巡拜なされたといふではないか。まして法華經は、意義甚深の聖典として持經せぬ者なく、その八講は間斷なく諸處に興行された當時では、わづかに初瀨詣の道心者が立ち寄るぐらゐの事でも、椿市を、心ことに思はせる値打が、十分にあつたのである。椿市をのけた他の市は、皆廢市であるのを思へば、例の歌枕の打聽から抄出したものに過ぎないことは明らかである。延喜の頃は、京中でも東市五十一店、西市三十三店が、月を上下にわかつて、盛に賣買して居たもので、しかるべき身分の人も妻君と同車かなんかで、市に買物に出掛けたものである。淸少當時は、さほどの事はないとしても、生活上必須の機關だのに、これには一言も言及して居ない。現實主義のやうでゐて、かういふ實際問題には一向觸れない所が、やはり遊樂氣分に富んでゐる、當時の上流人士の意向を代表したものといはれよう。

十五段

淵は　かしこ淵、いかなる底の心を見えて、さる名をつきけむと、いとをかし。ないりその淵、誰にいかなる人の教へしならむ。靑色の淵こそ、またをかしけれ、藏人などの具にしつべくて。いな淵。かくれの淵。のぞきの淵。玉淵。

考異 ○具に　原本身にとあり。一本による。

釋 ○かしこ淵云々　所不明。「かしこ」は賢に通ずれば、如何なる深き心を見知られて、賢淵などよき名の附きしならんと思はれてと也。「見えて」は見られての意。「さる名をつきけむ」はさる名のつきけむといふ名が附いたのであらうと思ふと面白い。ないりその淵は、誰にどういふ人が、さう敎へたのであら

口譯 淵は　かしこ淵、あれは、どのやうな深い心を人に見られて、そんな賢いといふ名が附いたのであらうと思ふと面白い。ないりその淵は、誰にどういふ人が、さう敎へたのであら

う。青色の淵が、また藏人などの着料に出來さうで面白い。いな淵、隱の淵、のぞきの淵、玉淵も面白い。

ふに同じきこの頃の語法。○ないりそ　ないりそ云々　河内中河内郡。「ないりそ」は入ることなかれの意なれば、誰に何人が這入る勿と敎へしならんと思はれて、をかしと也。○青色の淵云々「青色の淵こそ、藏人などの具にしつべくて、亦をかしけれと」あるべきを前後にいへり。「青色の淵」は所不明。○藏人などの具にしつべくて　藏人の着料に出來さうにてと也。六位の藏人の定服は淺綠なれど、又青色をも着る。○青色は鞠塵色とて、黃綠色の天皇の御衣なるが、藏人はその下しを賜はり着る。○いな淵　大和高市郡、古くは南淵といへり。否といふ名がをかしき也。○かくれの淵。○のぞきの淵。○玉淵　所いづれも不明。隱れといひ、覗きといふ名が奇に聞え、玉の名が美しく感ぜらるゝ也。

評　淵となつては、いよ〳〵實際離れがした。たゞ名義に就いて、人事的、文字的の聯想を廻したに過ぎない。居ながら知つた名所では、到底徹底した批判を下すことの出來ないのは當然で、一二の警句があつてからが、文章全體からいへば、無意義である。藏人の青色をいつたのは、淸少自身の生活を、間接に語つてゐるものである。

（口譯）海は　近江の水海、與謝の海、川ぐちの海、伊勢の海が面白い。

十六段

海は　水うみ。與謝の海。かはぐちの海。伊勢の海。

釋　○水うみ　この頃「水海」とのみいへるは近江の湖水なり。拾遺集に、竹生島に詣でたる時、觀敎「水うみに秋の山べをうつしてははたばり廣き錦とぞ見る」。○與謝の海　丹後天の橋立の勝地を含める海なり。能宣集に「誰が爲に渡しそめけむよさの海の浦に世をふるあまの橋立」。○かはぐちの海　攝津淀川の河口の海といふことが。八雲御抄、萬歲抄には「川ぐちの海」とあり。○伊勢の海　伊勢灣のこと。催馬樂に「伊勢の海の淸きなぎさの汐がひに、なのりそや摘まむ、貝や拾はむ、王や拾はむ」。

評　題目にあはせては、材料が甚だ貧弱である。家の打聽に、あまり書いて無かつたのだらう。尤も二百年後の八雲御抄も亦然りである。これで、平安人士が、地理的觀念に乏しかつたことが證明される。

（口譯）渡は　しかすがの渡、みづはしの渡、こりずまの渡が面白い。

十七段

わたりは　しかすがの渡。みづはしの渡。こりずまの渡。

釋　○しかすがの渡　三河飽海川（豐川）の渡。海錄に「しかは石の乾きたるをいひ、すかは砂の乾きたるをいへる方言也」と見ゆ。詞にては「しかすが」は流石なり。渡にこの名あるがをかしき也。中務集「ゆくはありゆかねばくるしかすがの渡にきてぞ思ひわづらふ」。○みづはしの渡　越中常願寺川の右岸に水橋といふ處あり。そこの渡なるべし。春曙抄に引ける古歌に「徒に人だのめなるみづはしや船より外にゆく方もなし」。○こりずまの渡　攝津の須磨にて、淡路への渡をいふ。「こりず」を須磨にいひかけたり。下にも、こりずまの浦あり。物事に懲りぬといふ名のをかしき也。

（口譯）みさゝぎは　鷲の陵。柏原の陵。あめの陵がよい。

十八段

みさゝぎは　うぐひすの陵。かしはばらの陵。あめの陵。

釋　○みさゝぎ　御小城の義。陵の字をあつるは、喪葬令の義解に「帝皇墳墓、如山如陵、故謂之山陵」と見えて、いにしへは甚だ宏大に築きしものなるが、奈良朝を經て平安朝に至り、佛敎の感化を受けて、火葬盛んに行はれ、加ふるに薄葬を主とせしかば、遺詔により山陵を起さず。遂には御墓の所在す

ら詳ならざるがあるに至れり。○うぐひすの陵　河内の南河内郡なる孝德帝の大坂磯長の陵なり。一に鶯の陵といふ。○かしはばらの陵　桓武帝の陵なり。山城紀伊郡。○あめの陵　諸陵式に見えず。古註に「あめの帝の御陵にや」とあり。さらば、聖武帝の大和の佐保山の陵なるべし。

（口譯）家は、近衛の御門が立派である。二條院、一條院もよい。そめ殿の宮、清和院、菅原の院、冷泉院、朱雀院、洞院、小野の宮、紅梅殿、縣の井戸殿、東三條、小六條、小一條殿など、それ〴〵よい。

十九段

家は　近衛の御門。二條、一條もよし。染殿の宮。せかゐ。菅原の院。冷泉院。朱雀院。とう院。小野の宮。紅梅。あがたの井戸。東三條。小六條。小一條。

釋　○近衛の御門　陽明門のこと。門内に左近衛府あるによりて名づく。大内裏外郭十二門の一にして、嵯峨帝の勅額を掲ぐ。○二條　二條院の略。村上帝の母后藤原穩子の御領。拾芥抄に「二條北、堀川東」。○一條　一條院の略。謙德公藤原伊尹の家にして、弟右大臣爲光傳領す。拾芥抄に「一條南、大宮東二町」。○染殿の宮　忠仁公藤原良房の家。後に染殿の后（文德帝の后藤原明子）の御所となれり。拾芥抄に「正親町北、京極西二町」。○せかゐ　清和院のこと。セイカキンの略。清和帝の母后、卽ち染殿の后の御所たり。拾芥抄に「正親町南、京極西」。○菅原の院　菅原道眞の家。或はいふ、道眞の父參議是善の家と。拾芥抄に「勘解由小路南、烏丸西一町、當時號ニ歡喜光寺一」。○冷泉院　レイゼイキン。嵯峨帝以降累代の後院たり。本名冷然院なりしを、火災によりて、今の名に改む。後院とは天皇御在位中に、御讓位後の御座所として、豫め定めおかるゝ御所なり。拾芥抄に「大炊御門南、堀川西」。○朱雀院　スザクキン。これも累代の後院にて、四條の後院ともいふ。拾芥抄に「三條北、朱雀西」。○とう院　洞院。仙洞御所をいふ。左京西洞院に、宇多法皇の御所亭子院あり。これをさせるにや。○小野の宮　比叡山の西麓小野に遁世ありし惟喬親王の家にて、清慎公藤原實賴傳領す。拾芥抄に「大炊御門南、烏丸西」。○紅梅　紅梅殿の略。道眞の家とも、道眞の子息の家ともいふ。道眞の流さるゝ時「東風ふかば匂おこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ」と詠みし處。拾芥抄に「五條坊門北一町」。○あがたの井戸　井戸殿のこと。後選集に、橘公平の女、この家に住みて詠みける「都人來てもをらなむ蛙なく縣の井戸の山吹の花」とあり。拾芥抄に「井戸殿、又縣井戸、一條北、東洞院西角」。○東三條　東三條院の略。忠仁公良房の家にして、子孫貞信公忠平、法興院關白兼家傳領す。拾芥抄に「二條南町西、南北二町」。○小六條　小六條院の略。北院ともいふ。拾芥抄に「楊梅北、烏丸西」。○小一條　小一條院の略。左大臣藤原師尹の家にて、山吹殿ともいふ。拾芥抄に「近衛南、洞院西」。この「小一條」の下、などをかしを略けり。

評　近衛の御門は家ではないが、おなじ建築物だから、假にこの部に攝したのである。大内裏の東面の諸門中、ことに重んぜられた門で、門前には攝政以下諸臣の立車の儀などがあり、網代車のやうな略儀の車は、立てられないことになつて居た。神樂の早歌の「近衛の御門に巾子おといつ」も、かうした場所柄だけに、滑稽の味ひが、いとゞ強まるのである。冷泉、朱雀、洞院は上皇の、染殿、清和院は皇后の、小野の宮は親王の御座所であつて見れば、その來歷とその輪奐の美とは、必ず大きな注意を惹いたに違ない。又その頃は、菅公の神威をおそれて、はじめて贈位を行つた程だから、公の居處だつた菅原院や、「東風ふかば」の遺詠をとめた紅梅殿などは、格別な畏さとゆかしみとを以て見られたものだらう。その他の建築物は、大抵村上帝以來の藤原氏の勢家の邸宅で、慶滋保胤の池亭記に、

應和以來、世人好起二豐屋峻宇一、殆至二山レ節畫レ棟、其費且巨千萬、其住纔二三年、古人云造者不レ居、誠哉。

といつたやうな始末。方二町の何のと、往來をかこひ込んで、贅澤のかぎりを盡したが、すぐ荒廢したり、燒亡したりして、存してゐるものは少かつたものである。

（口譯）天皇の常の御殿である清涼殿の東北の隅の、北の方からの隔に立てゝある御障子には、荒海の模樣と、それに生きた物どもの恐しさうな、手長足長の繪が書いてある。弘徽殿の上の御局の戸を明けると、何時も目につくのを、他の女房達と、その醜い姿を憎みなどして笑つてゐると、勾欄のきはに、大きな青磁の花瓶を据ゑて、それに櫻の非常に面白い枝ぶりの五尺ばかりなのを、澤山挿したので、それが勾欄の際まで咲こぼれてゐると、その晝頃、大納言殿が、櫻の直衣の少し萎えたのに、濃い紫の指貫をはき、白い下着など著て、上に色濃い綾織物の大層あざやかなのを、出衣にして來られた。主上が前から、此上の御局に入らせられたので、大納言殿は戸口の前のせまい板敷に居られて、お話など申上げられた。御簾の中には、女房達が櫻襲の唐衣など、ゆつたりと拔衣紋にいづれもきて、藤襲や山吹襲の上着などいろいろに好ましく、それを小半蔀の簾の下から押し出した時分、晝の御座の間の方に、主上の御膳を運ぶ藏人の足音が高い。けはひなどいちじるく、「おし〳〵」といふ警蹕の聲が聞える。折からのうらうらとのんびりした春の日の有樣が、大層趣があるのに、最ゆけども久にふる三室の山の」といふことをゆるらかにうち詠み出して居給へる、いとをかしと覺ゆる。げにぞ千歳もあらまほしげなる、御ありさまなりや。

二十段

清涼殿の丑寅の隅の、北の隔なるみさうじには、荒海のかた、いきたる物どものおそろしげなる、手長足長をぞかゝれたる。うへの御局の戸押しあけたれば常に目に見ゆるを、にくみなどして笑ふほどに、勾欄のもとに、青き瓶の大きなるするて、櫻のいみじく面白き枝の、五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、勾欄のもとまでこぼれ咲きたるに、晝つかた、大納言殿、櫻の直衣の少しなよらかなるに、濃き紫の指貫、白き御衣ども、うへに濃き綾の、いとあざやかなるを出して、參り給へり。上のこなたにおはしませば、戸口の前なるほそき板敷に居給ひて、ものなど奏し給ふ。御簾のうちに、女房、櫻の唐衣ども、くつろかにぬぎ垂れつゝ、藤、山吹など いろいろにこのもしく、あまた、小半蔀の御簾よりおし出でたるほど、晝御座のかたに、おものまゐる足音高し。けはひなど、「おし〳〵」といふ聲聞ゆ。うら〳〵とのどかなる日のけしき、いとをかしきに、はての御盤もたる藏人參りて、おもの奏すれば、中の戸より渡らせ給ふ。御供に大納言殿參らせ給ひて、ありつる花のもとに歸り居給へり。宮の御前の御几帳押しやりて、長押のもとに出でさせ給へるなど、たゞ何事もなく、よろづにめでたきを、さぶらふ人も、思ふことなき心ちするに、一月も日も變り

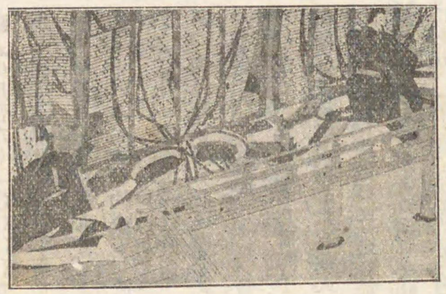
釋 ○清涼殿　セイリヤウデン。又、セイラウデン、セイエウデンともいふ。大内裏宮殿の一にして、天皇のお常御殿なり。仁壽殿の西、弘徽殿の南にあり。又、中殿とも、單に御殿ともいひ、九間四面、東向の御殿なり。四方拜、敍位、官奏、御遊など、大抵の公事は、こゝにて行はせらる。（附圖參照）○丑寅の隅　東北隅にて、弘徽殿の上御局の東側の廂の隅なり。○北の隔なるみさうじ　北の簀子より、内の透けて見えぬやうに立てたる、隅の障子をいふ。「みさうじ」は御障子なり。荒海の障子のことにて、布張の引立障子なり。禁祕抄に「弘廂云々、北有荒海障子、南方手長足長、北面障子宇治網代墨繪也」とあるに據りて、諸圖皆、廣廂の北なる二間の界に、この障子を圖したれど、そは後世の事にて、一條帝の御時には、本文に見ゆる如く、弘徽殿の上御局の東、孫廂の北端に立てしなり。○生きたる者どもの恐しけなる　動物の恐しき樣したると也。即ち手長、足長をさせり。○手長、足長　山海經に「長臂國在二其（焦僥國をさす）東一、捕二魚水中一、兩手各握二一魚一」、又「長股國在二雄常北一、被レ髮、一曰二長脚一」とある長臂長股のこと也。帝王編年紀には、嵯峨帝の弘仁年中畫圖せらると見え、古今著聞集には、一條帝以來のものといへり。○うへの御局の戸　「上の御局」とは后女御など參上の時休息し給ふ局にて、清涼殿の北廂にあり。弘徽殿の上御局、藤壺の上御局これなり。弘徽殿の上御局とは、弘徽殿は皇后中宮の居らるゝ所なるが、その御方が清涼殿に伺候せらるゝ時は、この局に休息せらるゝ故にいふ。藤壺の上御局も亦、女御の住まるゝ御殿の名をうつして、局に名づけたる也。さてこ

荒海の障子

後の御膳をはこんだ藏人が參つて、お膳の用意の出來た由を申上げると、主上は中の戸から、書の御座の方へお出遊ばされた。御供に大納言殿がついて參られて、さて又歸つて來て、以前の櫻の花のもとに居られた。中宮は前の御几帳をおし遣られて、長押のきはまでお出ましになつて、兄の大納言殿におあひになるなど、たゞ理窟なしに、萬事めでたく見えるにつけて、お仕へ申す人々も、何の思事もない氣持がするのに、折も折、大納言殿が「月も日も變り行けども久に經る三諸の山のとつ宮處」（歳月は移つていつても、永久に存してゐるのはこの三諸山の離宮であ

る）といふ古歌を、緩やかに歌ひ出して居られるのが、大層おもしろいと思はれた。誠にその歌の通り、千年もかうしてありたいやうな、めでたい中宮の御樣子であることよ。

れは、弘徽殿の上御局なり。「戸」は局の東の戸なり（附圖參照）。○常に目に見ゆるを　常に手長足長の目に見ゆるをと也。○にくみなどして笑ふほどに　その薄氣味惡きを憎みなどして、女房達が笑ふ間にと也。この憎みは輕き意味にて用ゐらる。○勾欄　簀子の端に廻したる欄干なるが、その端を曲げ反したれば名づく。「勾」は曲る意。○青き瓶　青磁の瓶なり。青磁は支那の唐末の頃、南越にて發明せしもの にて、帝室のお禁窰なれば、祕色といへり。一條帝時代には、多少舶來したれど、頗る貴重なる品なり し也。○大きなる据ゑて　大きなるを据ゑてと也。○大納言殿　伊周なり。關白道隆の子にて、中宮の御兄弟。○大納言　太政官の次官なり。故に亞相といふ。大寶令に「掌下參二議庶事一、敷奏・宣旨・侍從・獻替上」と見え、大臣と共に天下の政事を議し、大臣なき時は、太政官の政務を專行す。納言とは令義解に「納二下言於上一、宣二上言於下一也」とある意にて、尙書に出づ。和名抄に「オホイモノマウスツカサ」と訓めり。定員は、大寶令に四人とありて、一條帝の頃は、正員二人、權官二人なり。○なよらか　しなやかなるをいふ。著馴れて、少し柔になれる也。○濃き紫　黑色に近き深紫なり。これを滅紫といふ。○指貫　指貫の袴の略稱。裾は括の緒を附け、穿く時、これを足にくゝり付く。指貫とは緒をさし貫く義なり。和名抄に、奴袴をサシヌキの袴と訓めり。又、絹狩袴ともあり。貞丈は「奴袴と書くは、もと奴僕の袴なる故にて、奴僕は高く括り上げて、奔走に都合よきやうに著たるを、後に公卿の服となりて、綾織物を用ゐるやうになれり」といへり。婦人も、掌侍、命婦など、行幸の時馬にて供奉すれば、必ずこれを著く。又女の徒歩きにも著ることあり。（附圖參照）○御衣ども　御衣ども着ての略。これは直衣の下着の衣にて、所謂内衣なり。○うへに　白き御衣ども着て、指貫を穿きて、その上にとなり。○濃き綾の云云　出衣のさまなれば、「濃き」は紅の濃きなり。紫にあらず。「綾」は綾織物なり。「出して」は指貫の上、直衣の下より出すなり。これを出衣といふ。出桂を見よ。○上　一條帝。○こなたにおはしませば　「こなた」は弘徽殿の上御局なり。この時中宮ののぼり居給へるに、陛下の渡らせ給へる也。○戸口の前なるほそき板敷　上御局の北側の戸口の前はせまき板敷なり。○居給ひて　大納言の居給ひてと也。○櫻の唐衣　櫻は襲の色目なり。櫻の直衣を見よ。○唐衣　カラギヌ。女官の禮服にて、上着の上に着る。唐制を模したるものなればいふ。長甚だみじかく、袖は半巾にて、前長と同じく、後はことに短し。和名抄に「背子、加良岐沼、形如二半臂一無二腰襴一之袷衣也」とあり。又、その青色赤色なるもの、及び織物は、聽許なくては着られず。これを禁色といふ。（附圖參照）○くつろかにぬぎ垂れ　緩かに肩より脱け落ちさうにしてと也。御前勤の事として、唐衣など着て正裝はしたるものゝ、物馴れて、格別畏敬の態なきをいふ、「くつろかに」は寛ぐの副詞格。○藤　襲の色目にて、表淺黄又は薄紫、裏萌黄なるをいふ。○山吹　これも襲の色目にて、表薄朽葉色、裏黄なるをいふ。藤も山吹も、春の服色なり。○色々に好もしく　「色々」は女房達の裝束の思々の色をいふ。「好もしく」は好ましくと同じ。○小半部　コハジトミ。半部の小きをいふ。○部　シトミ。風雨、は北廊の黑戸にある小半部なり。部を見よ。○及び日除の戸にして、細き木を縱横に組みて格子としたる片面に、板を張りたるもの也。一間を上下二枚に分ち、下部を取外しにし、上部を蝶番にて釣上ぐるやうにす。戸の半分以下の小形なるを半部といひ、更に小なるを小半部といひ、部を衝立の如く作りて、庭先に見隱しにしたるを立部といふ。○おし出でたる程　簾の下より、女房達の袖口の押出されたる時分と也。女房達の盡く席に即きたる頃をいふ。その衣や袖口を出すが、一つの形容的儀式なり。胡曹抄に「押出事、薄綿袖不レ出レ褄、是宮女房御所也、又云、褻時押出、不レ出二褄竝裳一、要月五節之時押出、禁中出二褄竝裳一、要月許也」。○日のおまし



押出

晝御座にて、清涼殿の身屋にある、主上の御座所なり。東西二間、南北五間。北よりに玉座の御帳臺あり。その他大床子、陪膳圓座、置物厨子等あり。（附圖參照）○おもの　主上に進むる供御なり、こゝは晝御座における大床子の御膳にて。帝未だおはしまさぬ先に竝べ置く。その陪膳には、公卿奉仕す。又、典侍采女など髪上して奉仕し、四五位の殿上人も奉仕す。朝餉にての御膳は、女房陪膳す。○足音　供膳の藏人の足音なり。○けはひなど　「けはひ」は氣色又は樣子をいふ。氣榮の義。「など」の下、しるくの語あるべし。氣はひなどしるくとは、御膳參る樣子のいち著きをいふ。○おし〳〵と云々　御膳を運ぶに、おし〳〵と警蹕する聲の、上御局の方へ聞ゆるをいふ。「おし〳〵」は警蹕の聲なり。平田篤胤は「於々、志々といふべきを約めて、於志と一言にいへるか」といへり。松の落葉に「於々と高く聲を立てゝ長くいふこと、神前にてもあり。最敬のいらへ也。宮中にて於々と稱するも、尊き御前なることを知らしめ、物の音を制する爲也」とあり。侍中群要に「凡供御一人、皆悉警蹕、但昇二一臺盤一後人、竝昇二第三臺盤一人、不二警蹕一」。又、日中行事に「次々の藏人二人、この御臺盤を昇きて、一の御だいの南に、縱ざまに据う。鬼の間の鳥居障子を入るほど、陪膳警蹕す」とあり。○はての御盤　もたる藏人參りて　終の御盤（高坏盤）を据ゑたる藏人が、上御局に參りてと也。○おもの奏すれば　御膳の据りたる由を奏上すればと也。侍中群要に「供乾取二最後御盤一之人、奏二事由一、其詞云、於毛乃末以多利、又說云、於毛乃末以奴」。○中の戸より渡らせ給ふ　主上中の戸より、晝御座へ入らせ給ふと也。「中の戸」は清涼殿の北廂にあり。萩の戸と藤壺の上御局との界より、黑戸にかけて仕切りたる戸をいふ。○御供に大納言殿云々　伊周は主上の御膳に入らせ給ふ御供に往きて、又歸りて、以前の勾欄の邊の花の下に居給ふと也。○宮のお前　「宮」は中宮の御事、「お前」は敬稱。○長押のもとに　下長押の際まで出で給へるをいふ。○長押　ナゲシ。柱面に取付けたる、長き横木のことにて、寢殿造の家には、必ず上下に長押あり。下長押は、殿舍の中に上段下段ある時、その上段の敷居に添へて、横に取付く。故に、簀子境などには、必ずあり。下長押ある處には、必ずまた上長押あり。○さぶらふ人も　お前に侍ふ人もと也。○思ふ事なき心ちするに　何事をも打忘れて愉快なる心地するにと也。「するに」の下、大納言殿のを略けり。○月も日もかはりゆけども云々　「みむろの山」の下、とつ宮どころの一句を略けり。萬葉集十三「月は日はゆき變れども久にふるみもろの山のとつ宮處」とある歌を、この頃にはかくいひ傳へたるなり。意は月日はうつり行けども、三諸山の離宮は、何時までも變らずと也。「とつ宮」は外つ宮の義。「三諸山」は大和高市郡飛鳥の神岳なり。○ふるごと　古言なり。古き詩歌をいふ。故事にあらず。○ゆるらかに　ゆつたりと長閑なる狀。○うち詠み出し　「うち」は接頭語。「居給へる」の下、がの辭を略けり。○をかしと覺ゆる　下によの歎辭を含めり。○けにぞ千歲も云々　「けにぞ」は、大納言殿の唱ひ給へる歌を承けて、成程千年もかくてありたけなる、宮のお前の御有樣なりやと、同意して感歎したる也。「や」は歎辭。

陪膳つかうまつる人の、をのこどもなど召すほどもなく、渡らせ給ひぬ。主上御硯の墨すれ」と仰せらるゝに、目は空にのみにて、たゞおはしますをのみ見奉れば、ほとほと繼ぎ目も放ちつべし。白き色紙おし畳みて、主上「これに、只今覺えむふるごと一つづつ書け」と仰せらるゝ、外に居給へるに、清「これはいかに」と申せば、大納言「とく〳〵、たゞ思ひめぐらさで、難波津もなにもふと覺えむことを」と責めさせ給ふに、などさは臆せしにか。すべておもてさへ赤みてぞ思ひみだるゝや。

（口譯）主上の御食事がおすみと見えて、陪膳に奉仕する人が、お膳を下げる爲に、行事の藏人を呼ぶと間もなく、主上はこの御局にお出遊ばされた。そして私に「墨をすれ」と仰せられるので、墨を磨りはじめたけれども、目はそつ方にいつて、

たゞ主上のおはしますかばかりを見奉れば、あぶなく墨挾と墨との繼ぎ目をもいでしまひさうである。主上が白い色紙を疊んで、「これに今覺えてゐる古い詩歌を、一つづつ書け」と、女房達に仰せられるので、御簾の外にゐられた大納言殿に「これはどうしたらいゝでせう」と相談すると、大納言殿は「早く書いて御覽にお入れなさい。皆さんへの仰であるから、男子が口入すべき譯のものではない」といつて、自ら御前の硯を取り寄せて「さあ早く、一途に考込まないで、難波津の歌でも何でもいゝから、ふつと頭に浮んだことを、お書きなさい」とお責めなさるに、その時は、なぜそんなに氣後れしたのか、顏まで赤くなつて、途方にくれたことよ。さうはいひながらも、時にあつた春の歌とか花の心を詠んだ歌など、上萬達が二つ三つ書いて「さあこれにお書きなさい」といつて、私にまはして來たので、

年經れば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし（年月を經ると、我しらず老い込んでしまう。これは自分にとつてつらい事であるが、咲榮えるこの花を見ると、何の屈託もない。）

といふ歌を「君をし見れば」と書きかへてさしあげると、主上が御覽になつて、「たゞこの機轉が奥

春の歌、花の心など、さいふ〳〵も、上萬二つ三つ書きて、「これに」とあるに、

年經れば齡は老いぬ。しかはあれど、花をし見れば物おもひもなし。

といふことを、「君をし見れば」と書きなしたるを御覽じて、主上「唯この心ばへどものゆかしかりつるぞ」と仰せらるゝついでに、主上「圓融院の御時、御前にて、圓融『草子に、歌一つ書け』と、殿上人に仰せられけるを　いみじう書きにくゝすまひ申す人ありけるに、圓融『更に手のあしさよさ、歌の折にあはざらむをも知らじ』と仰せられければ、わびて皆書きける中に、只今の關白殿の　三位の中將と聞えける時、

しほのみつ、いつもの浦の、いつも〳〵、君をばふかく、おもふはやわが。

といふ歌の末を『たのむはやわが』と書き給へりけるをなむ、いみじくめでさせ給ひける」と仰せらるゝも、すゞろに汗あゆる心地ぞしける。若からむ人は、さも得書くまじき事のさまにやとぞ覺ゆる。例はいとよく書く人も、あいなく皆つゝまれて書きけがしなどしたるもあり。

（考異）○ほとほと繼ぎ目も放ちつべし　原本ほど遠き目も放ちつべしとあり。一本による。

釋　○陪膳つかうまつる人の「陪膳」は天皇に供御を奉る時に伺候する人、即ち給事人なり。禁秘抄に「公卿候二陪膳一、上古常候也、直衣常事也」とあれば、こゝの陪膳は、三位以上の公卿なるべし。おものを見よ。○をのこどもなど召す「をのこども」は殿上の男共にて、藏人をいふ。「召す」は主上既に御膳を終へ給ひしかば、陪膳の公卿、御膳部を下げんとて、今日の供膳者なる藏人を呼ぶをいふ。さてこの聲の、上御局の方に聞

えたる也。日中行事に「陪膳、座にて男共を召す二聲。藏人鬼の間の鳥居障子の下に進む。陪膳まかり候と仰す。云々。」○渡らせ給ひぬ　主上は上の御局に渡らせ給ひぬと也。○仰せらるゝに　主上の清少に仰せらるゝに　女房達に仰せらるゝに　と也。○目は空にのみして　目の注くべき所に注かぬをいふ。足を空に、心も空になどの空に意おなじ。○おはしますを　主上のおはします方をと也。○ほとほと繼ぎ目も放ちつべし　あぶなく墨挾みと墨との繼ぎ目を取放しさうなりとの意。當時は貴人と雖も、墨短くなれば墨挾みに挾みて用ゐたりき。この句原本によれば、千歳どころにあらず、末遙なる萬々年までの目をも見やらるゝよの意となる。○白き色紙「色紙」は染紙、いろ紙などいふに同じくて、色々に染めもし、漉きもしたる紙なり。「白き色紙」は即ち只の白紙なり。和名抄に「色紙牋也」とありて、方形の紙なり。その寸法の定れるは後世のことなり。○おし疊みて　主上のおし疊みてと也。「おし」は接頭語。○一つづつ書け　一人が一つ宛書けと也。○仰せらるゝ　女房達に仰せらるゝにと也。かゝる「に」の辭を省くは、この草子の筆癖なり。下の「すまひ申す人々ありける」の所をも見合はすべし。○とに居給へるに　外に居給へる大納言にと也。「と」は外なり。この時伊周簀子に候ひたり。○これはいかにと　これは如何にせばよからんとの略。突然の仰なれば當惑して、清少の伊周に相談したる也。○をのことはこと加へ云々　女房達への仰なれば、男子は容啄すべきにあらずと也。「こと加へ」は言加へにて、助言なり。○御硯取りおろして　主上のお前なる御硯取下してと也。先に清少の墨摺りて奉りし硯なり。○難波津もなにも難波津にもあれ、何にもあれと也。「難波津」は、古今集の序に「難波津の歌は、みかどのおほんはじめにもしける」とて、註に「難波津にさくやこの花冬籠り、いまを春べとさくやこの花」といふ歌を出せり。こは仁德帝の時、王仁といふ博士の詠みて奉れるものといひ傳へたり。源氏物語若紫の

ゆかしかつたのである。それで試したのである」と仰せられたその序に、仰せられた御物語には、「昔圓融院の御時、院の御前で、『この本に歌一つ書け』と侍ふ人達に仰せられたので、ひどく書きにくがつて、御辭退申す人々があつたが、院のお詞に『字の上手下手も、また歌の季節に合ふ合はぬも、一向構はぬ』と仰せられたので、迷惑がつて皆書いたが、その中に、只今の關白殿（道隆）が三位の中將で居られた時、

しほのみつ　いつも
の浦の　いつも〳〵
君ぞ　ふかく　おも
ふはやわが（汐の
さす出雲の浦の名
のやうに、いつも
いつも、深く君を
ぞ思ひまするよ、

といふ戀の歌の下句を「頼むはやわが」と、君を深く頼み奉るといふ意に書換へてさし上げたのを、院にはひどくお褒めになつた」と仰せられて、自分のさし上げた歌によそへらるゝも、まことに恐縮の至で、汗がしみ出るやうな心地がした。自分の歌は、やはり若い人には、さうはよう書き得まいひ方がしらと思はれる。平生は大變よく書く人も、妙に畏縮してしまつて、書損じなどしたものもある。

私がき）

卷にも「まだ難波津をだにはかぐしいうも續け給はず」と見えて、當時手習始には、今いろは歌を書く如くに書きしものにて、小兒も知れる歌なりし也。○ふと覺えむことを　「ふと」は俗のヒョツト、フイトと同じ。「ことを」の下、書き給へを略けり。上の「とく〳〵」は、この「書き給へ」にかゝる副詞。○などさは臆せしにか　何故さやうには氣後れせしにかと也。「臆せしにか」の下、あらむを略けり。○すべておもてさへ赤みてぞ云々　赤面して、何がなしに途方にくるゝと也。「すべて」は「思亂るゝ」にかゝる副詞。「や」は歎辭。○春の歌花の心など　「花の心」は花の心の歌の略。花を詠める歌をいふ。春や花の歌は、卽ち今の折につけたる歌なり。○さいふ〳〵も　しかいひながらもと也。上の「などさは臆せしにか」を承く。岩崎美隆いふ「さいふ〳〵も、上臈の人々、春の歌花の心など、二つ三つ書きて、とあるべきを、上下にいひなして、文を成せり。」○上臈　ジャウラウ。「臈」とは、もと僧侶の一夏の安居を一臈として、功を積みたる年を數ふる語なりしを、移りて身分貴きを上臈といひ、卑きを下臈といひて、一般に用ゐるに至れり。こゝの上臈は、清少自身よりも、身分高き女房達をさせる也。○これにとあるに　これに書き給へとあるにと也。○年經れば云々　古今集春「染殿の后のお前に、花瓶に、櫻の花をさせ給へるを見てよめる、前のおほきおほいまうち君」とありて、この歌を出せり。作者の前太政大臣は藤原良房のこと。染殿の后は良房の女明子とて、文德帝の皇后、清和帝の御母なり。歌の意は、榮華窮なき我が女の后を、眞盛の花に喩へて、喜びたる也。「しかはあれど」は然はあれども也。「花をし」の「し」は强辭。「物思」は心配屈託なり。○君をし見れば　良房の歌の第四句の花を「君」の字に換へて書ける也。こは主上の命にて書きて奉るなれば、主上を賞讃し奉れるなり。○御覽じて　主上の御覽じてと也。○この心ばへどもの　この氣轉などのと也。清少の所行をさす。「心ばへ」は心の働なり。心延の義。○ゆかしかりつるぞ　下に、さればこそ物書かせつれを略けり。ゆかしを見よ。○仰せらるゝついでに

お話の序にと也。「仰せらるゝ」にて切るべからず。○圓融院の御時　以下主上の御物語にて、よく似たる話ゆゑ思ひ出しての給へる也。「圓融院」はこの御代より二代前にて　一條帝の父帝。○お前にて　圓融院の御前にてと也。○草子　草稿の義。又、册子の音便。左右に頁の並ぶ意にて雙紙とも書く。綴本又卷物をもいふ。○仰せられける院の仰せられけると也。○書きにくゝ　書き澁るをいふ。○すまひ　進まぬ義なるが、一轉して辭退の意となり、再轉して相拒む意となれり。こゝは辭退の意なり。○人々ありける　下に、にを略けり。○更に手のあしさよさ云々　人々進みて書かざれば、今は一向に字の上手下手、歌の時に叶ふ叶はぬをもいはざれば、何にてもよし、早く書けと促し給ふなり。「手」は手蹟のこと。「知らじ」は俗の頓着セヌ、構ハヌといふに當る。○わびて　難儀に思ふ、當惑するなどの意。○只今の關白殿　中宮の御父道隆のこと。こゝは主上の御詞の中なれど、關白なれば敬ひて「殿」、「聞えける」、「書き給へり」など仰せられたる也。道隆は、一條帝の永祚二年五月、父兼家の病むに及び關白となる。次いで攝政、正暦四年四月また關白たり。○關白　天子を補佐し、百官を總べ、萬機の政を行ふ。漢書昭帝紀に「諸事皆先關白光、然後奏御」とあるによりて、宇多帝の時、藤原基經に關白せしめられしに始る。官左右の大臣と雖も、之に補すれば、太政大臣の上に座す。故に一座、又一の上とも稱す。○三位中將と聞えける時　道隆の從三位に敍せられしは、その三十二歳の時なり。公卿補任に「圓融院永觀二年正月七日叙從三位、右中將如元」とあり。「聞えける」は敬語にて、いひけると同じ。○汐の滿つ云々　初二句は「いつも〳〵」をいひ出でん爲の序なり。歌は、君をば深くわが思ふはやの意なるが、結句倒置法を用ゐて、「はやわが」といへり。「はや」は歎辭。「いつもの浦」は未詳。元來この歌の出所も不明なり。濱臣は、萬葉四「川上のいつもの花のいつも」を「いつも來ませわがせこ時じけめやも」を少し轉じたる也といへど、序詞の同じきのみにて、全く異なれる歌なり。鹿持雅澄は、六帖の歌といひたれど、同書には見當ら

ず。○歌の末　歌の下句の七七をいふ。上句五七五七を本といふに對す。源氏物語にも、上下句を本末といへり。○頼むはやわがと　「汐の滿つ」といふ古歌の下句の思ふを「頼む」と書換へて、戀の意を、君を頼み奉る意に取成したり。○いみじくめでさせ給ひけると　圓融院の甚だ賞美ありしと、主上の仰せらるゝもと也。「いみじく」の上院の「と」の下「へ」のを略けり。○すゞろに汗あゆる心ちぞ　わが古歌の一字を書換へたるを、主上の御賞讃ありて、中宮の御父君の舊き逸事の、清少の機轉によく似たるを、御物語ありしかば、恥しさに汗の流るゝ心地すと也。○あゆる　汗にまれ血にまれ、液體の、皮膚より滲み出すをいふ。○若からむ人は云々　自分は年寄りたる故、「年ふれば齡は老いぬ」の歌の作替も出來たれど、年若ならん人は、折角思付きても、書き能はざる事狀ならんかと也。この時清少三十歳を超えたり。「覺ゆる」は清少の思ふなり。「さまにや」の下、あらむを略けり。○例は　何時もなり。平常に同じ。○あいなく　あやなくなり。こゝは生憎の意。○つゝまれて　慎しまれて也。敬の極、畏縮せらるる樣なり。○書きけがし　書損なり。○したるもあり　したる人もありと也。

古今の草子を、御前に置かせ給ひて、歌どもの本を仰せられて、宮「これが末はいかに」と仰せらるゝに、すべて夜晝心にかゝりて覺ゆるもあるが、げによく覺えず、申し出でられぬことは、いかなることぞ。宰相の君ぞ十ばかり。それも覺ゆるかは。まいて五つ六つなどは、たゞ覺えぬよしをぞ啓すべけれど、女房「さやはけにくゝ、仰ごとを。はえなくもてなすべき」といひ、口をしがるもをかし。知ると申す人なきをばやがて讀みつゞけさせ給ふを、女房「さてこれは、皆知りたる事ぞかし。などかくつたなくはあるぞ」といひ歎く。宮「中にも、古今あまた書き寫しなどする人は、皆覺えぬれないのは、どうした事ぞ。宰相の君は、十首ばかりお答へした。けれどもそれば かりでは、覺えたうちに、とてもなりはせぬ。まして五つ六つ知つてゐる位なのは、一つも覺えないやうに申上ぐべきだが、「さう味もソツケもなく、折角の仰言を、何のはえないものにしてしまつては、どうかしら、宜くもあるまい」といつて口惜しがるのも面白い。中宮が、知つてるといふ人のない歌をば、すぐに續けてお讀みなさるのを「さてこれは皆知つてゐる歌であるわさ。どうしてこんなに物おぼえが悪いのであるぞ」といつて、女房達が歎息する。そこで中宮が「皆の中でも、古今を傳

（口譯）中宮が古今集の御本を御前にお置きなされて、その中の歌の上の句を仰せられて「此歌の下の句は何といふか」とお尋ねになると、夜も晝も、何時も心にかゝつて覺えてゐるのもあるが、又ほんによくも、頭に浮んで來ないので、何ともいひ出さ

べきことぞかし。「村上の御時、宣耀殿の女御と聞えけるは、小一條の左大臣殿の御むすめにおはしましければ、誰かは知り聞えざらむ。まだ姫君におはしける時、父おとゞの敎へ聞えさせ給ひけるは、『一には御手をならひ給へ。つぎには琴を、いかで人にひきまさむとおぼせ。さて古今の歌はたまきを、皆うかべさせ給はむを、御學問にはせさせ給へ』となむ聞えさせ給ひけるとぞ。きこしめしおかせ給ひて、御物忌なりける日、古今をかくして、もてわたらせ給ひて、例ならず、御几帳をひきたてさせ給ひければ、女御あやしとおぼしけるに、御草子をひろげさせ給ひて、村上『その年その月、何のをり、その人の詠みたる歌はいかに』と問ひきこえさせ給ふに、かうなりと心得させ給ふもをかしきものゝ、ひがおぼえもし、忘れたるなどもあらば、いみじかるべき事と、わりなくおぼし亂れぬべし。そのかたおぼめかしからぬ人、二三人ばかり召し出でて、碁石して數を置かせ給はむとて、しひ聞えさせ給ひけむほど、いかにめでたくをかしかりけむ。御前にさぶらひけむ人さへこそ羨しけれ。せめて申させ給ひければ、さかしうやがて末までなどはあらねど、すべてつゆたがふ事なかりけり。いかでなほ少しおぼめかしく、ひがごと見つけてをやまむと、ねたきまで思しける。十卷にもなりぬ。更にふようなりけりとて、御草子にけうさんして、みとのごもりぬるも、いとめでたしかし。いと久しうありて起き

山書寫しなどした人は、全部でも覺えてゐる筈であるわさ。昔村上帝の御代に、宣耀殿の女御と申された方は、小一條の左大臣殿の御娘であらせられたから、誰が存じあげぬ者があらうか。その方がまだ姫君樣であらせられた時に、父の殿のお敎へ申上げられたことには『まづ第一には、字をお習ひなさいませ。次には、きんの御琴をお習ひなされて、どうぞして人よりも上手に彈かうと、お心掛けなさいませ。そしてまた古今集の歌二十卷を、みな諳誦なさる事を、御學問になさいませ』とお敎へなされたといふ事を、村上帝がかねてお聞置になつて、御殿の御物忌であつた日、古今の御本を、そつと隱してお持ちなされて、女御の御部屋へお出になつて、いつになく御几帳を引立てゝお隔てなされたから、女御は變な事だとお思ひなさると、帝はその御本をお廣げになつて、『何の年、何の月、何のなり、其或人のよんだ歌は何といふのか』と、詞書や作者を擧げて、歌をお尋ねなさると、女御は、ははあこれは、古今のおためしであるなと、御合點のいくのも面白くはあるものゝ、もし覺えちがへでもし、忘れた所などもあるなら、ひどく恥かしからう事よと、無上に御心配なされたことであらう。帝は歌の方の事をしかと心得てゐる女房を、二三人ばかさせ給へるに、なほこの事、さうなくてやまむ、いとわろかるべしとて、下の十卷を明日にもならば、ことをもぞ見給ひあはするとて、今宵定めむと、おほとなぶら近くまゐりて、夜ふくるまでなむ讀ませ給ひける。されど、つひに負け聞えさせ給はずなりにけり、うへ渡らせ給ひてのち、かゝる事なむと、人々、殿に申し奉りければ、いみじうおぼし騷ぎて、御誦經などあまたせさせ給ひて、そなたに向ひてなむ、念じくらさせ給ひけるも、すきゞしくあはれなる事なり」など語り出でさせ給ふ。

（考異）○覺ゆるもあるが　原本が文字なし。古本による。○しひ聞え　原本しひの二字なし。古本による。

釋　○古今の草子　古今和歌集の綴本をいふ。古今集は醍醐帝の延喜五年勅を奉じて、紀友則、同貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑等の撰進したる歌集なり。二十卷、約千百首あり。萬葉集以後、醍醐朝までの歌を集む。勅撰歌集の嚆矢として、又その歌風の純正なる點において、古來推稱せらる。○御前に置かせ給ひて　中宮の御前に置かせ給ひてとなり。○本を「本」は歌の上句。上なる歌の末を見よ。○すべて夜晝　夜晝すべてを、倒置したる辭樣なり。夜も晝も悉くの意。○心にかゝりて、念頭に存するをいふ。○げによく覺えず　中宮の記憶を試し給ふ御心を承けて、かくいへるなり。○申し出でられぬ事はいかなる事ぞ　その下句の忘られていひ出されぬ事は、如何なる譯ぞと、わが記憶力の鈍さを歎き疑へるなり。○宰相の君　左衞門佐藤原重輔の女。この一箇月前の二月十日の積善寺供養の段に、「宰相の君とは富小路の右大臣の御孫」とある人なり。中宮付の女房の上萬なるべし。この翌年（長德元年）二月、淑景舍東宮に參り給へる段に「北野三位の女宰相の君」とあるとは、別人なり。○十ばかり　十ばかり覺え居たるの略。○それも覺ゆるかは　それも覺ゆるうちには入るべきかは

と也。集中の歌は千百首もあるに、知れるは僅に十首ほどなれば、知らぬに等しと也。○五つ六つなどは「五つ六つ」は、宰相の君の外の女房達のおぼえ居たる歌數なり。○覺えぬ由を云々　一首も知らぬ由を啓するがましならんもと也。○さやはけにくゝ云々　さやうに憎らしげに、折角の中宮樣の仰を、何の榮もなく取扱ふべきならず。それ故僅五つ六つ知れるをも、御答申上げたりと也。「さ」は覺えぬ由をさす。「けにくゝ」は氣惡くにて、俗のソツケナクといふに近し。「仰ごと」の上、宮のを「もてなすべき」の下、故に僅に五つ六つ知れるをも啓しつを略けり。○とくちをしがる　と人々のくちをしがるとなり。○人なきをば　人なき歌をばと也。○やがて讀みつゞけ　中宮のなり「やがて」はそのまゝ、即ちなどの意。○さてこれは——つたなくはあるぞ　中宮の下句を讀續け給ふを聞きて思ひ出して、それならば、皆知居ることぞ、何故かくおろかなることぞと、ひそかに歎くと也。「いひ歎く」は人々のいひ歎くなり。○中にも古今あまた云々　以下中宮の御詞。「中にも」は女房達の中にもと也。○村上の御時　村上は天曆の帝なり。以下よく似たる話を、中宮の語らせ給ふなり。○宣耀殿の女御　藤原芳子のこと。左大臣師尹の女。入内して宣耀殿に住給ひければ、しか申す。髮長くして艶美、頗る寵を專にし給へり。康保四年薨ず。○宣耀殿　センエウデン。後宮の一殿にして、女御の居所なり。○女御　ニョウゴ。天皇侍妾の一にして、その位置は更衣の上、皇后の下にあり。桓武帝の世、始めて置かる。名稱は、周禮に「女御、掌御ニ叙于王之燕寢ニ」。○小一條の左大臣　藤原師尹のこと。「小一條」はその第のある處の名。攝政忠平の五男。冷泉帝の安和二年左大臣右大將たり。同年十月薨ず。五十一歲。○誰かは知り聞えざらむ　誰も知り申さぬ者はなからんと也。○まだ姫君に　入内以前をいふ。「に」はにての意。○おとゞ　大臣を稱す。御殿の義。時に大臣ならぬ人をもいふことあり。○敎へ聞え　父大臣の、娘に敎へ申されけると也。○一には　濱臣いふ「イチにはと訓むべし」。第一といふ意なり。○きんの御

りを呼出になつて、碁石で人々の間違へたり忘れたりした歌の、數取をおさせならうといふので、女御に勝負をお強ひなされたその時は、どんなにめでたく面白かつたらう。その時御前に伺候した人々までも羨しいことである。帝が強ひてお尋れなされたので、利口ぶつてすぐに歌のしまひまでお言ひになることなどはなけれど、すべて少しも間違ふことはなかつた。そこで帝はどうぞして、やはり少しでも不分明な間違つた所を見つけて、まあ止めようと、あまり女御のお記憶のよいのに、くやしい程にまで思召されたが、尋れ〳〵て、とう〳〵十卷にもなつた。けれども誤りが

琴　七絃の琴なり。琴操に「長さ三尺六寸六分、前廣く後狹く、上圓く下方なり」とあり。琴には六絃の和琴、十三絃の箏、七絃の琴、四絃の琵琶の四種あり。「きん」は琴の字音なるが、專ら七絃のをいへり。○いかで人にひきまさむ　如何にもして、人よりは上手に彈かんと思ひ給へと也。「まさむ」は勝さんの意。○うかべ　胸に浮ぶること、卽ち諳誦するをいふ。○學問　文學の修業を、すべて學問といへること、源語、榮花などに見ゆ。○聞えさせ給ひける　いひ聞かせ給ひしと也。○聞し召しおかせ　村上帝のなり。○御物忌なりける日　禁中の物忌に當りたる日なり。○物忌　モノイミ。昔陰陽家のいひ出でし事にて、星鬼遊行の方面に當り犯す時は、人身に災禍を來すとて、これを避けんが爲に、家に籠りて愼むなり。その時、冠帽には、柳の木を薄く削りたる、長さ三寸ばかりなる簡に、物忌と書きて附く。殿舍には紙に書きて、簾に附く。おもき愼には無論外出せず、客に接せず、書簡の來るも取入れずして閉居す。輕きには、まゝ外出することもあり。禁中の物忌は、禁祕抄に「御物忌之時、惣不レ出二御他殿舍中一、諸事於二簾中一有レ之、或出二御廣廂一不レ固之時例也、又云、以レ柳造レ簡、三分計、指二冠纓上一、御放本鳥時付二左御袖一（書二白紙一也）」と見えて、この日は政務もなく、拜謁も叶はぬ也。拾芥抄に、物忌を鬼王の名として、災禍を厭ふ爲に、その名を書く由見えたれど、附會の說なるべし。○古今を隱して云々　帝古今集の草子を隱して、女御の御方にも渡らせ給ひてと也。さてこの事ありし場處は、清涼殿の上御局とすべし。御物忌の時は、他の殿舍に出御なきこと、上文の禁祕抄に見えたり。○例ならず　常と異なりてと也。○御几帳を云々　入御あるや否や、几帳を間に引立てゝ、隔て給へばと也。○御草子を　古今集の御草子をとなり。○その年その月云々　こは古今集の詞書と作者とを擧げて、その歌は如何なる歌かと問はせ給へる也。例へば「彌生の晦の日、雨の降りけるに、藤の花を折りて人に遣はしける、業平朝臣」など讀給ふをいふ。○かうなりと云々　女御は御心中に、古今の試驗を遊ばさるゝなりと、

ないので、帝は『一向無駄の事だつた』と仰せられて、御本に夾算をはさんで、御寢所に入らせられたのも、いとめでたい事よ。餘程久しくたつてお起きなされたが『やはりこの事を、どちらつかずで止めてしまはうのは、いけなからう』と仰せられて、下の十卷を、『明日にもなるなら、別の本をお見なさるかも知れぬ。何でも今夜の中に、どちともまとめよう』と仰せられて、御あかりを近くお寄せになつて、一夜更くるまでお讀みなされた。けれど、女御は、とう〳〵お負けなさらずにしまつた。帝が女御の御方へお出でなされて後、人達が「かういふことがありました」など、父帝の御動作より合點して、興あるものながらと也。「かう」はかくの音便にて、古今を試み給ふことをさす。「かう」の上、女御はを略けり。○ひがおぼえ　僻覺なり。覺ちがへをいふ。「ひが」は僻むにて、不正なる意。○いみじかるべき事　甚しかるべき事にて、非常なる恥をいふ。○わりなく　雅語譯解にムシヤウニ、ヨギナクなど譯せり。○おぼし亂れぬべし　こは話手の中宮の想像せさせ給へる御詞なり。○その方おぼめかしからぬ人「その方」は歌の方、「おぼめかしらぬ」は不たしかならぬこと、卽ちよく心得たるをいふ。「人」は女房をさす。○碁石して數を云々　碁石を以て、人々の忘れたり、覺え違へたる歌の數を取りて、勝負を爭はしめ給はんと也。○しひ聞えさせ給ひけむほど　村上帝の宣耀殿女御に、無理に命じ給ひけんほどと也。○いかにめでたく云々　中宮の御推察の詞なり。○御前にさぶらひけむ人さへこそ　その時、帝及び宣耀殿の女御の御前に伺候したる女房達までも羨しとなり。中宮のめでの餘りに羨ませ給ふなり。「いかに云々」以下を、春註、清少の心に思へること、解きたるは非。○せめて申させ給ひければ　帝のなり。「せめて」は強ひて、「申させ給ひ」は問給ひなり。一說に「せめて」を押詰めて、卽ち矢繼早にの意といへど、なほ前說優るべし。○さかしうやがて末まで云々　「さかしう」の上、女御の御答はを略けり。賢ぶりて、直に歌の終りまでいひ果つるなどの事はせねどと也。歌の詞の然るべき所までを答へて、末を略したるをいふ。全部いはでも聞ゆる以上は、それをいはぬが、餘裕あるゆかしき仕打にて、上臈しき態度なれば、女御はわざと控目にして、いひさしたる也。この「末」はひろき使ひざまにて、必ず下句と限るにあらず。○つゆたがふ事なかりけり　少しも本文に違ふことなかりしと也。○いかで尙すこし云々　女御の餘り明に答へ給ふを、憎きまで帝の思召すとなり。「いかで」は俗のドウゾシテにて、願望の辭。「なほ」は俗のヤハリに當る。「見付けてを」のをは歎辭、「やまむ」は止めんに同じ。「ねたき」は嫉きにて、憎らしといふに近し。○更にふようなりけりと　村上帝の御詞なり。

の左大臣殿にお知らせしたので、左大臣殿が非常に御心配なされて、女御の誤なくお答へなさるやう、寺々に御誦經など澤山お頼みなされて、御自身は禁中の方へ向つて、祈念の時刻を移されたのも、その物好が熱心で、あはれな事であつた」など御物語をなさる。

いか程よみ續け給ひても、少しも誤なければ、帝の倦み給へる體なり。「とて」はと帝の宣ひての略。「更に」は一向にの意。「ふよう」は不用の字音にて、俗のムダにあたる。○けうさんして　夾算を挿みて と也。「けうさん」は夾算の字音。貞丈いふ「書を讀みて半に至りて止む時、未だ讀まざる印に夾み置く物なり」。江家次第の頭注に「夾算、長三寸、以竹作之、以絲結之、或以紙捻結之、兩說也」。今

夾算

ケサン、といふは夾算の轉語なれど、物は夾算にあらずして、文鎭なり。○みとのごもり　御殿隱なり。大殿隱ともいふ。御寢のこと。清涼殿の夜の御殿（畫御座の北の間）に、御帳臺あり。その内を御寢所とす。○いとめでたしかし　中宮の感歎せさせ給へる御詞。○いと久しうありて　いと久しう御寢ありてと也。○なほこの事さうなくて　帝の御詞なり。「この事」は古今問答のこと、「さうなく」はいづれともきまりたる勝負なくてと也。「さう」は左右の字音。○わろかるべしとて「とて」はと帝の宣ひての略。○ことをもぞ見給ひあはする　「こと」は異草子の略にて、他の古今集の本をいふ。「もぞ」は萬一をいふ辭。「見給ひあはする」は女御の見給ひ合すると也。○こよひ定めむ　今夜の内に、左右を定めんと也。○おほとなぶら　大殿油にて、御寢所にともす燈火をいふ。こゝは切燈臺なるべし。○負け聞えさせ給はず　遂に女御は負け申さずと也。○うへ渡らせ給ひてのち　村上帝の、女御の御方へ入らせ給ひて後と也。「のち」とは古今の試始りて、間もなき後なるべし。○かゝる事なむと云々　「なむ」の下、あるを略けり。「かゝる事」は、帝の女御に古今の歌を問はせ給ふをさす。「人々」は女御に奉仕する女房達ならん。「殿」は女御の御父師尹をいふ。○いみじうおぼし騷ぎて　師尹のいたく御心配になりてと也。○御誦經などあまた　女御の誤なく對へ給ふやう、祈禱の爲、諸寺へ使を遣りて、高僧に經を讀ましめ給ふと也。○そなたに向ひて念じ暮させ給ひけるも　「そなた」は禁中の方、「念じ暮させ給ひ」は祈念して時刻を移し給ふをいふ。「暮す」は、こゝにては時を移すをいふ。日を暮すにはあらず。○すきゞしく　物好なるをいふ。好色のことにもいへど、そは轉れる也。○あはれなる事なり　子を思ふ親心を感じ宣ふ詞。こゝまで中宮の御物語なり。

（口譯）主上もこの事をお聞きになつて御感心なされ「村上の帝は、どうしてそんなに、十卷の二十卷のと、澤山お讀みなすつたのだらう。自分はわづか三卷四卷でさへも、讀みおほせることは出來まい」と仰せられる。「昔は女御など身分の高い御方は勿論、つまらぬ者でも、物事に凝つて面白かつた。この節はさやうなおくゆかしい遊事は、てんで世間にきこえぬ」などと、常に中宮の御前に伺候する人々や、帝に奉仕する女房達で、中宮の御前にまゐる事を許されてゐる人々などが參つて、口々にいひ出しなどした有樣は、ほんに氣苦勞もないことに思はれた。

釋　○うへも　主上、卽ち一條帝もなり。○めでさせ給ひ　女御の强記と、村上帝の御氣根とを賞讃し給ふとなり。○いかでさ多く　一夜のうちに、古今集二十卷の歌を悉く讀まれしを、「さ多く」と宣へる也。○昔はえせ者も　昔は女御など身分のあらゝ御方は勿論、身輕き者もと也。「えせ者」は僻者にて、下つ方の人らしからぬ者をいふ。○すきをかしう　藝能に好きて、風流にめでたかりしと也。○この頃は云云　今時はさやうの興ある遊事ありや、噂にも聞かぬと也。○御前にさぶらふ人々　中宮に奉仕する女房達。○うへの女房のこなた許されたる　主上の御方に伺候する女房の、中宮の御前にも出づることを許されたる者など、御前にまゐり來てと也。「たる」の下、者を略けり。○口々いひ出で云々　口々に昔今の比較などして、色々いひ出したる時はと也。○まことに思ふ事なく　上に「侍ふ人も思ふ事なき心ちするに」、又「君をしみれば物思もなし」などいへるを承けて「まことに」といへる也。

おひさきなく、まめやかに、えせざいはひなど見て居たらむ人は、いぶせくあなづ

2144

（口譯）夫など持つて、前途もなく、唯正直一遍にくだらぬ幸福を守つてゐるやうな女は、面白くもなく見劣がする樣に思ひやられて、やはり相應の身分のある人の娘などは、宮仕にさし出させ、世間の狀態をも見習はせたく、內侍などでも、暫時勤をさせたいと思はれる。宮仕する女をば、うは〳〵してわるい事に思つてゐる男は、甚だ憎い。しかし又、さうも思ひさうな事ぞよ。宮仕すれば、口にするもおそれ多い兩陛下をはじめ申して、上達部、殿上人、四位、五位、六位や、朋輩の女房はいふに及ばず、顏をあはせて見ない人は少い事であらう。女房の從者達や、また女房の家から尋れてくる人達や、長女、御厠人や、石塊瓦といふほどな卑しい者まで、何時それらを遠慮して避けたが、決してそんな事はしない。いつも女のかうした事を惡くいはれる殿原などは、さうまあ色々な人に、顏をあはせることはないのだらうか。いや殿原でも、勤めてゐる限は同樣だらう。一旦宮仕した女は、北の方などといはせて大切にすゑて置くのに、あまり顏を知られてゐるから、奧床しくなく人の思ふことは尤もだけれども、その女が內侍のすけなどといつて、時々參內して朝廷の御用をつとめ、或は賀茂祭の御使などに出たのも、名譽でない事があらはしく思ひやられて、なほさりぬべからむ人のむすめなどは、さしまじらはせ、世の中の有樣も見せならはさまほしう、內侍などにても、しばしあらせばやとこそ覺ゆれ。宮仕する人をば、あは〳〵しうわろきことに思ひ居たる男こそ、いとにくけれ。げにそもまたさる事ぞかし。かけまくもかしこき御前を始め奉り上達部、殿上人、四位、五位、六位、女房は更にもいはず、見ぬ人はすくなくこそはあらめ。女房のずんざども、その里よりくる者ども、をさめ、みかはやうと、たびしかはらといふまで、いつかはそれを恥ぢかくれたりし。殿ばらなどは、いとさしもあらずやあらむ。それもある限はさぞあらむ。うへなどいひてかしづきするゑたるに、心にくからず覺えむこそわりなれど、內侍のすけなどいひて、をり〳〵うちへ參り、祭の使などに出でたるも、おもたゞしからずやはある。さて籠り居たる人はいとよし。ずりやうの五せちなどいだすをり、さりともいたうひなび、見知らぬこと、人に問ひ聞きなどはせじと、心にくきものなり。

釋 ○おひさきなく　生立ゆく先のなきにて、前途に發展の見込なきをいふ。以下淸少の議論なり。○まめやかに　まめは忠實なること、正直なること。○えせざいはひなど見て居たらむ人は　夫をもちて、あまり幸福にもあらぬ幸福などを、守りてあらん女はと也。「えせ幸」は似而非幸にて、人妻の幸福を罵れるなり。○いぶせく　心の結ぼれて、面白からぬにいふ。雅語譯解に辛氣ナ、ウルサイなど譯せり。○あなづらはし　輕しめ見下げらるゝをいふ。侮るの形容詞格。○さりぬべからむ人　然るべくあらん人にて、卽ち相應なる身分の人をいふ。○さしまじらはせ　宮仕にさし交らはせとなり。女房として宮中生活せしむるをいふ。「さし」は接頭語。○世の中の有樣も云々　世間の事情にも通じさせたしとなり。○內侍　掌侍のことを、單に內侍といふ。內侍司の三等官。なほ內侍司を見よ。○內侍司　後宮職員令に「尙侍二人、（相當從三位）掌供奉常侍、奏請宣傳、檢校女孺、兼知內外命婦朝參及禁內禮式事、典侍四人、（相當從四位）掌同尙侍、唯不得奏請宣傳、若無尙侍者、得奏請宣傳、掌侍四人、（相當從五位）掌同典侍、唯不得奏請宣傳、女孺一百人」と見ゆ。平城帝以來、尙侍は天皇侍妾の一員となり、內侍司の事は、典侍の掌ること、なりてより、掌侍も奏請宣傳を掌る事を得、頗る權力を有するに至れり。故に禁祕抄に、掌侍を「禁中殊重職也、尤可撰其器量補之」とあり。○しばしあらせばや　暫時勤めさせたしと也。○宮仕　宮中に參り仕ふること。こゝは禁中に、女房の奉公するをいふ。○あは〳〵しう　淡々しにて、浮々して落付なきをいふ。○げにそも亦さる事ぞかし　成程それも亦一方から見れば、尤もなることぞと也。前言を打反して、そのわるく思へる男に、聊か贊成を表したる詞にて、以下女房のあは〳〵しき理由をいひ竝べたり。○かけまくも畏き御前　言葉にかけむも、恐多き御前と也。「まく」の反むなり。これは帝、中宮をさす。○上達部　カンタチメ。位三位以上、官參議以上の公卿の稱。○更にもいはず　改めていふにも及ばずと也。○見ぬ人は　女房の見ぬ人はと也。○女房のずんざども　他の女房の使へる奉公人をいふ。所謂又者なるべし。「ずんざ」は從者の音轉なるズザの音便。○をさめ　長女の義にして、下女の長たる女をいふ。下女は禁中雜仕の卑しき婦人なり。齋藤彥麿、は「をさめは藏にて、道路に捨てたる穢物を取收むる者」といへり。和名抄に、專の字をタウメ、又ヲサメと訓めり。タウメは老女の稱なれば、こゝも長女の義勝るべし。○みかはやうと　御厠人の音便に

うか。さうしてそのまゝ家に籠つて、北の方でゐたのは、至極よい。國司が五節の舞姫などを奉るをりも、宮仕をしない他の國司の妻のやうに、非常に田舍びて、勝手が分らぬことを、人に尋ねきくなどいふ騒はすまいと思はれて、奥床しいものである。

て、禁中の則を掃除する、卑しき婦人。○たびし、かはら　濱臣は「靈異記に、磔をタビイシと訓めり。卽ちたびしなり。かはらは瓦なり」といへり。小石や瓦の如く、人數に入らぬ賤しき者の稱とす。彦瞻は「たびしは茶毘師にて、今の隱亡なり。かはらは屠兒にて、餌取なれば、今いふ穢多なり」といへり。然れどもこゝは禁中にての事なれば、隱亡や穢多の出入せんことはいかゞなるべし。○いつかはそれを云云　「それを」は、上に擧げたる上達部以下、たびしかはらまでの人々をいふ。「かは」は反語。○殿ばら　殿方といはんが如し。殿腹の義より出づ。大臣公卿の子にて、嫡庶にかゝはらず、その母の身分ある君達姫君などをいひ、轉じて身分貴き人の君達を稱す。○さしもあらずやあらむ　殿原などは、却てさもなきかも知れぬ、卽ち恥隱るゝならんと、宮仕する女房を惡くいふ男に當つけて、表裏にいへる也。「さしも」の「し」は强辭にて、「さも」は、上の「見ぬ人は少くこそあらめ」をさす。「や」は疑辭。○それもある限はさぞあらむ　「それも」は殿原をさす。「ある限」は宮仕してある限はと也。「さぞあらむ」は誰にも顏をさらすならんと也。「さぞ」は、上の「見ぬ人は云々」をさす。○うへ　北の方といふに同じ。人妻の敬稱。○かしづき　畏付くの義にて、大切にいたはり立つるをいふ。○心にくからず　奥床しからずと也。人々に顏を知られ居ればなり。○内侍のすけ　典侍なり。禁祕抄に「此職尤重云々、候二陪膳一、著二禁色一、尤可二恐思一事歟」。内侍司を見よ。○をり〳〵内へまゐり　典侍の職にて、人の北方になり居て、御用の時々參内して勤務に服するなり。なほ内命婦に對して外命婦あるが如し。○祭の使　賀茂祭に、典侍の御使に立ちて、車にて路次を練行くことあり。○面たゞし　面正しにて、面目あるをいふ。面伏の反對。この面正しきは、その典侍たる女自身のことなり。その夫のことにあらず。○さて籠り居たる　始に宮仕して、さて後嫁して家に籠り居たるはと也。○ずりやう　受領の字音。地方官の赴任して、吏務を掌る首席の者の稱にて、おもに國守にいふ。もと、遙授兼任に對したる稱にて、江家次第に

「凡國司、有二遙授兼任受領等一、守爲二遙授一、則權守必受領」とあり。「受領」とは前任の人の解由を受領する義とも、その國の吏務を受領する義ともいへり。○五せち　「五せちなどいだす」は五節の舞姫など出すの略。「五節」は大嘗會、新嘗會の時に行はるゝ、童女の舞の名なり。十一月中の丑の日、常寧殿にて行はれ、主上御覽あり。これを帳臺の試といふ。舞姫の人數は、河海抄に「大嘗會の時のみ五人にて、公卿より二人、殿上人受領より三人、毎年の新嘗會には、公卿より二人、殿上人受領より二人を出し奉る」とあり。この外時により、后妃女御尙侍親王などよりも獻ることあり。この舞、聖武帝の世、始めて宮中に奏せらる。政事要略に「昔天武天皇吉野宮にましまして、琴を彈き給ひし時、前の峰に天女天降りて、羽衣の袖を、五度翻して舞ひければ、天皇『少女子がをとめさびすもから玉を袂にまきてをとめさびすも』と詠じ給へるに起る」と見ゆ。但蒼梧隨筆に「五節は五聲之節の義にて、左傳昭公元年に、先王之樂、所二以節一百事一也、故有二五節一、五聲之節遲速本末相及、中聲以降之後不レ容レ彈矣とある、遲速本末中聲を五聲とす。これを本として制したる女樂なれば、五節と稱する也」といへる從ふべし。○さりともいたうひなび　「さりとも」は、受領は任國にのみ居て、禁中の事に疎きをさしたり。「ひなび」は鄙びはせじとあるべきを、下の「せじ」に讓り略きて、中止法にいへる也。「ひなび」は田舍めくをいふ。○見知らぬ事云々　北の方宮仕人なりしならば、それ等の儀式に明なれば、世間見ずの北の方のやうに、事に當りてあわてゝ、知らぬ事を人に聞合せなどはせず、立派に娘を仕立てゝ出すべしと思はれて、誠に奥床しきものぞと也。

評　この段は伊周が大納言の現任であるのと、道隆を「只今の關白殿」とあるのとから推すと、正暦五年の春三月の事なのは、疑もない。（主上御年十五、中宮十九、道隆四十二、伊周廿一、清少廿九、卅？）この時、中宮の御父道隆公は關白として、その威福は内外を壓し、兄伊周は權大納言、異腹の兄道頼

は權中納言であつた。叔父達の道兼、道長は右大臣や權大納言であるが、無勢力で、何の活動も出來なかつた。在廷の諸臣も道隆に憚つて、い、娘があつても、後宮に獻る者もなかつたのだから、中宮の御心は、何時も春のやうな長閑さであつた。まして前々年には、道隆が四十の賀算、中宮御所二條の宮落成の慶事があり、今年また二月に、積善寺供養の大盛事があつて、幸はこの一門にのみあつまり、中宮の御榮華の最頂點に達した時であつた。まづこの狀況を背景において、この文を讀む必要がある。

見る目もあやな光景を描き出す前提として、まづ醜怪な手長足長に筆を起した。手長足長の圖樣をもてあそぶことは、村上帝時代から行はれ、花山帝は、硯にこの圖を作らせて興ぜられたことがある。つまり一時の流行物で、著聞集によると、清涼殿のこの障子も、この御代(一條)に造られたとあるから、當時新調の物で、珍しくもあつて、目にも付いたのであらう。「憎みなどして笑ふ」に、女らしい氣分が見えた。

上の御局は北向である。とはいへ、鞍馬おろしも漸くゆるんで、勾欄に小庭に、春の日影がうら〻かに照渡つた午のころ、正裝の唐衣をさへしどけなく着なした女房達の心ゆるび、その長閑さが想ひやられる。艶な櫻、底澤のある青磁の瓶、艶麗な伊周の直衣姿、百花妍をきそふにも似た女房達のおし出の袖口、それらの色相形狀が間錯した美は、どんなであつたらう。殊に容貌が豐艶で、ふとり肉のいろ白で、光源氏もかくやと評された美男の伊周が、爛漫と咲いた花のもとに、耀いてゐた樣はさ。

男性的の大鏡の文に、衣紋の事すくなく、女性的の榮花物語や源氏物語などの文に、衣紋の事のおほいのは、自然男女觀察の相違に本づくやうであるが、その實、當時の上流人士は、男女の別なく、かの縣居翁が「山城の國は處女國なり。かれ男も亦、處女さびしたり」と評したやうに、その衣紋に對する趣味が、頗る濃厚であつて、さきに延喜式に規定された服色の制も、こゝ六十年間に、非常の變化をきたし、しば〳〵儉素の令は布かれたけれども、その結果はいつも反抗的に、華美に〳〵と流れていつて、つひに後年の鳥羽朝の衣紋の大革命に出會ふことになつた。さればこの頃は、衣紋の觀念にともしい者は、下腐として卑められた。つまり美を味ふ力のない者として、社會から除外されたものである。王朝文學の研究者は、この衣紋に對して、深い知識と趣味と憧憬とをもたなければ、到底その氣分を感得することが出來ないといふことを、くれ〴〵も警告する。

この時帝は、わざ〳〵中宮の御控部屋の上の御局に御出座になつて、月日の光を竝べてお出なされた。その御中の睦しさは、中宮崩御の際までも、お變がなかつたのである。當時は關白でも、當帝の外戚でない者は、殿上で衣冠をたゞし、直接に奏上奏下をはゞかり、御伯叔父でも、疎遠なのには、御面謁をお避けになつた。然るに伊周は、中宮の御兄といふので、さのみも畏まらず、直衣姿で御前に出て、目のあたり御物語申上げる。伊周の外祖高階成忠は儒者出身であり、母高内侍は、女ながらも、まことしき文者で、御前の作文のをりには召された程であるから、伊周もその血統を引いて、その制作に名文句をのこした位の秀才である。御物語は無論その道の事もあつたらう。が大鏡には、

帝、后宮を時めかせ給ふゆかりに、帥殿(伊周)は、明暮御前に候はせ給ひて、入道殿(道長)をば更にもいはず、女院(詮子)をもあし樣に申なしけり。

と出てゐる。それも事實であらう。但そんなきたない筋のことは、局外者はともあれ、清少の立場では書ける筈のものでもなく、又さういふ事を口に出し、筆に上せることは、當時のいはゆるよき人の作法でもない。だから、ひたすら美な方面ばかりを觀察して、その感想に耽つたものである。

大床子のお膳のあたり、聽覺から晝の御座の間の出來事を想像して、上の御局での眼前の事實とむすび付けて敍出した手際は、實に旨いものである。主上が御中座のあと、中宮はうち解けて、兄君への御

會釋として、几帳おし遣つて、長押のもとにお出なされた。伊周意滿ち心足つて、「久にふる三室の山の」と吟詠した。固より行末ひさしい中宮の御榮を、下心に思つたからである。侍ふ女房の心も、千秋萬歲とうたひ上げぬまでである。

「硯の墨すれ」と、清少に仰せられたのは、彼が御前に侍ふ女房中の下臈であるからであらう。「古言書け」と仰せられたのは、女房達の才をおためしなさる思召から出たことは、あとで「この心ばへどものゆかしがりつるぞ」と仰せられたのでわかる。「これはいかに」と、暗に伊周の取なしを得て、うまく逃けようとしたのを、伊周は萬々承知しながら「男子は言加へ云々」と、皮肉に出たところが面白い。「御硯取おろして」に、すでに清少が墨をすりをへて、御前に上げたことが知られてゐる。これが省筆の法である。さて硯をつき付けられての催促に、絶體絶命、上臈から順々に筆を執つて、四番目に清少に來た。かの忠仁公の名歌は、この場合に吻合した好典故である。頓才に長けた清少は、忽ちこれを想ひよせて、たゞ一語を易へた。「年ふれば」は、自分が卅歲前後の年嵩なのにかなひ、「君をしみれば云々」は、兩陛下の御前に侍ふことを榮譽とする意をふくめ、兼ねて上文「侍ふ人も思ふことなき心地する」に應じてゐる。はじめは謙退らしく迷惑げに見せかけて、いよ〳〵といふ土壇場には、これ見よといはぬばかりの才がりかた、處女の如く脫兎の如しといふ趣である。その年若でないのと、下臈なのとは、宮仕のうへのひけ目で、常に勝氣な彼の自尊心を傷けてゐる所から、こゝぞと、暗に上臈方の書損をわらひ、無能をあざけつてゐる。「若からむ人は云々」は、僥倖にも、偶然の機會をつかみ得たことを喜んだ詞ではあつても、下には自分の分別があり、機智があることを誇つてゐるではないか。何だか婦人の通有性なひがみ根性が、あり〳〵とそこに、見え透いてゐるやうな氣がする。しかし關白殿の昔話が出ては、「君一の一語のさし換は、いさゝか二番煎じの洒落といふ氣味である。

古今の記憶試驗には、さすがの清少も落第したので、宣耀殿女御の御物語がはじまる。「古今あまた書寫しなどする人」と仰せられたのは、その頃は刊刻の業が開けなかつたから、何もかも筆寫したもので、ある坊主が、暦の筆寫を賴まれて、始のうちは眞面目に書いてゐたが、段々と飽きて、いたづら書をはじめ、物食はぬ日など書き、しまひには、はこすべからず〳〵と、五六日書續けてやつた。賴んだ女房は、ほんの事と思つて、物食はぬ日は辛棒して實行したが、はこすべからずに至つて、キリ〳〵舞をして苦しがつたといふ笑話がある。物語や歌集類の假名物は、婦人の手に賴ることが多かつた。

當時上流社會の教育法は、男子は朝に書傳を學び、次に手迹を學び、さて後に、遊戲を學ぶことを許された。女子は大抵、琴和琴などの絃物を右にし、古今後撰等の歌集を左にし、手書く技を何よりの事とした。師尹が女芳子を教へた方法も、またこの規定に洩れない。たゞ必ず「古今集を諳誦せよ」とあるのが、やゝ違つてゐるのみである。尤も嵯峨朝の頃は漢學流行で、有智子内親王のやうな女詩人も出たけれども、それは一時の現象であつて、漢學は女にふさはぬものとして、さし置かれてしまつた。中流社會には、たまには學んだ者もあつたが、それすら薄命の因として、人には嫌はれた。

中宮が村上帝の當時をおぼして、侍ふ女房をさへ羨まれたのは、帝が政治上の名主であるし、また詩歌管絃の風雅を好まれたのに、宣耀殿女御がまた、一筋の髮の毛を、檀紙のうへに置いて見たら、眞黑に隙間がなかつたといふ程の殊相をそなへた、才色兩全の方であつたから、この古今爭は、實に一代の勝事と思はれた故であらう。

筆記試驗には、主上、關白殿の逸話を仰せられ、記憶試驗には、中宮、宣耀殿女御のお物語あり、い

づれも天子の御前の手柄話で、ひろくいふと、皆ことぐく、藤原氏の榮華寵遇を語るものである。こののどやかな長物語には、春の日もなほ短い憾があつたらう。清少自身の名譽談は、自然この間に映帶されてゐる。「昔はえせ者も」から筆を轉じて、上文を結束し、上の「思ふ事なき心地する」を承けて、「思ふ事なくこそ覺ゆれ」に筆を收めた。

通篇行文自在で、敍事精細を極めてゐる。富貴相を描いた文中での白眉であらう。

「おひ先なく」から以下は、前文の餘波である。筆鋒漸く鈍つて、文勢が甚だ振はぬやうに思はれる。むしろ無い方がよい。眞面目に緣に付いたのを、似而非幸とそしつたのは、當然道學者からは非難を受け、風敎上からは罪さるべき矯語であるが、元來清少の眼中には、孔子もない、時によると釋迦さへもない。（これは清少ばかりではない）たゞ現在の享樂を主として、赤裸々にその感想を發表したまでである。それにまた、宮中生活を讃仰した餘りに出た言とすれば、寬恕される點がないでもない。

宮仕する婦人は、かの兩親の膝下にゐる筥入娘とはちがつて、ゆかしけもなく、深みにも乏しく思はれるのは當然であるのに、さう思ふ男を、いと憎しと罵つてゐる。これほど見やすい精神的方面の影響を全く度外視して、たゞ事務的才能ばかりを推稱し、若い女は是非宮仕させたしとの意見、頗る僻した敎育論であるが、これには他にふかい理由と動機とが潛んでゐるらしい。試にいふとその第一は、自分が宮中生活をしてゐる身びいき、第二は、尊貴の御前に侍ふ誇、第三は、中宮及び伊周の御母高階貴子は、內侍として宮中に奉仕してゐたのを、道隆の娶つたのだから、その辯護である。中にも第三の條件が、最もおもい因を成してゐやうに思はれる。「內侍などにてもしばしあらせばや」といひ、「さて籠り居たる人はいとよし」といつたのは、どうしても高內侍を、下に置いたものである。

二十一段

すさまじきもの　畫ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅のきぬ。ちごのなくなりたるうぶ屋。火おこさぬ火桶、すびつ。牛にくみたる牛飼。博士のうちつゞきにようこうませたる。方たがへにゆきたるに、あるじせぬ所。まして節分はすさまじ。ひとの國よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそは思ふらめ。されどそれは、ゆかしき事をも書きあつめ、世にある事を聞けばよし。人のもとに、わざときよげに書きたてゝやりつる文の、かへり事見む、今はきぬらむかし、あやしく遲きと待つほどに、ありつる文の結びたるも、たて文も、いときたなげにもちなしふくだめて、うへにひきたりつる墨さへ消えたるを、「おはしまさゞりけり」とも、もしは「物忌とて取り入れず」などいひて、もて歸りたる、いとわびしくすさまじ。

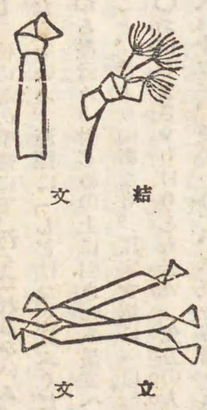
（考異）○さこそ思ふらめ　原本「らめ」の下、どもとあり。古本による。○今はきぬらむかし　の下、原本と文字あり。古本による。○消えたるを　の下、原本おこせたりけりとあり。別本による。○取り入れずなどいひて　原本いひての三字なし、活本による。

釋　○すさまじ　興の醒むるにいひ、拍子拔したるにいふ、物すごきにいふは後世のこと也。濱臣いふ「荒廢を活したる語なり」。○畫ほゆる犬　犬は夜の守を專一とするものなれば、夜こそはあれ、晝吠ゆるは面白からずと也。○春の網代　「網代」はアミシロの略にて、網の代りの義。氷魚を捕る爲に掛くる

（口譯）興のないもの　畫吠える犬、春の網代、三四月頃の紅梅の衣、赤ん坊の死んだ產屋、火をおこさない火桶や炭櫃、牛を邪見にあつかふ牛飼など、いづれも興がさめる。博士が引續いて女の兒をまうけたのは、興がさめる。方違にいつたのに饗應しないところは、興がない。節分の方違の時に饗應のないのは、殊に興がない。地方からよこした手紙に、添へた贈物のないのは詰らない。京からの手紙をも、贈物がないとさうは思ふだらう。けれども京の手紙は、田舍で床しがつてゐる事をも、何かと書

き集めてあり、世間の出來事を聞知るから、贈物はなくてもよろしい。人の許へ殊更立派に書立てゝやつた手紙の返事を「もう持つてくるだらう。不思議に遲いことよ」と待つてゐるうちに、自分のやつた以前の手紙の、結文でも立文でも、使の者がひどくきたならしく持あつかつて、ぶく〳〵にして、封じめの上に引いた墨まで消えてゐるのを「先方の人はお留守でした」とか、もしくは「物忌だからといつて、受取らなかつた」などといつて持つて歸つたのは、甚だ不快で興がない。

ものにて、延喜式に「山城國、近江國、氷魚網代各一處、其氷魚、始二九月一迄二十二月三十日一貢レ之」と見えて、山城の宇治川、近江の田上川にこれを設く。川中に百千の杭を網引形に打ち、その木に經緯を入れ、そのはてに簀をあてゝ、流寄る氷魚を捕る。氷魚は和名抄に「鮞、白小魚名、似レ鮐而長一二寸者也、今稱二氷魚一」とあり。氷魚の寄る冬の内こそ、網代は興あれ、春になりては時節外れのもの也。○三四月の紅梅のきぬ　「紅梅の衣」は、表紅、裏紫の袷にて、十一月より二月まで用ゐる。三四月は時候外れなり。○ちごのなくなりたる產屋　產みたる乳兒のありてこそ、產屋のかひはあれ、死にてはその詮なければ也。「ちご」は乳兒の義にて、赤兒なり。「うぶ屋」は產所なり。○牛にくみたる牛飼　牛ありての上の牛飼なるに、その牛を邪見にする牛飼は不快なる也。この牛飼は牛車の牛を使ふ者なり。貞丈說に「年十七八なるは勿論、三四十になれるをも牛飼童と稱し、垂髮にて狩衣を著、鞭をもち、童の體を粧ふ。云々」。(附圖參照)○博士のうち續き云々　「博士」はハカセと訓む。博き物識人の義。大學寮中、明經明法紀傳(文章)等、みな博士ありて教官に任ず。いづれも漢學にて、男子のみの修學を許す。然るに、その博士の家に、又しても女の兒を出來しては、親の家業を繼ぐこと能はざれば不興なる也。「たる」の下もいとすさまじを略けり。○方たがへ　これは陰陽家の說にて、他行の時、その行かんとする方、その年の金神に當るか、或は臨時に、天一神、太白神などの遊行の方に當りて、その方へ行くは凶しきを、方塞といふ。その時、前夜に他の方角へ行きて一泊なし、翌日其處より目的地に行くを「方違」といふ。三代實錄貞觀七年八月廿一日に、天皇御方違ありし事を記せるは、史に見えたる始なり。(なほ方角禁忌の事は、拾芥抄に詳し)○あるじせぬところ　一寸方違に、一泊しに行きたるに、何の馳走もせぬ家は面白からずと也。「あるじ」は主人設ともいひて、饗應すること。○節分はすさまじ　この頃節分の方違とて、主上を始め、上皇、女院、大臣以下、すべて方違をなす風習なりき。平常よりも、かゝる興深き夜に方違したるを、何のもてなしもなくば、けにすさまじかるべし。「節分」はセチブンと讀む。冬の節分れて、春に移る義。今は立春の前夜をいへど、平安時代には、大寒に入る前日なりしとぞ。土牛童子の像を造りて、夜半内裏の諸門に建て、、寒氣を送り出し、立春の前日、夜半これを撤したること、弘仁延喜の兩式に見ゆ。又源語には、四月に節分をいへり。もと節分は四季に通じて、その節の分る、時にいふべきを、專ら春にいひ慣へるのみ。○ひとの國よりおこせたる文の物なき　地方より知人の、わざわざ文をよこしたるに、何の添へたる土產もなく、只空文ばかりなるは、興なしと也。「ひとの國」は他國にて、廣義には外國をいひ、狹義には地方をいふ。こゝは狹義の方なり。「おこせ」は俗のヨコスに當る。「物」とは贈物なり。「なき」の下、はいとすさまじを略けり。○京のをもさこそ　「京のをも」は京の文をもの略。「さこそ」は地方の人もさこその略にて、上に「添へたる物なきはすさまじ」とあるをさす。○それはゆかしき事を書きあつめ云々　京よりの文は、常に聞かまほしき都の事をも、何かと書集めてあり、また、世間にある出來事をも聞知れば、假令添へたる贈物なくとも、惡しくはあらずと也。この句、「書集め」と「聞けば」と自他うちあはず。よりてありの二字を補ひて解したり。光嚴院本には「ゆかしき事、世にある事などを書集めたるを見て、慰むらむかし」とあり。○今は來ぬらむかし　使の者は最早歸り來ぬらんかしと也。「今は」は俗のモウといふに當る。○あやしく遲きと　不思議に遲きことよと也。○ありつる文　以前の文なり。此方より持たせやりし文をさす。○結びたるも　結びたる文もなり。結文はほそ長く疊みて、上の方又は中にて結び、その結目に、一筋濃く墨を引く。今の〆を書くが如し。○立文　タテブミ。立封じ目の文とも、立



（口譯）
又必ず來なければならぬ人の許に、車を迎にやつて待つてゐるに、門内に車のはひつてくる音がするから「その人が來たのであるな」と思つて、人々が出て見ると、使の者は、いきなり車部屋にいつて、車の轅をトンと打ちおろしたので、どうした譯か」と尋ねると「今日はお宅にお出がありません」、「此方へはお見えになりません」と

ふんじともいふ。文をほそ長く疊みて、その端をひねる故に、捻文ともいふ。○いときたなげにもちなし　使の者の手摺にて、汚くなれるをいふ。○ふくだめて　ふくらめてなり。毛立ちそゝけて、ふくらみたるをいふ。源語に「しどけなく打ふくだみたる髮筵」などいへるふくだみも同じ。○うへに引きたりつる墨云々　封じめの上に引きたる墨さへ消えたるを持歸りて、我におこせたりと也。封に墨を引くこと、昔よりの事なり。江家次第に「以二紙一枚一卷二其上一、以二紙繕一結二其中一、其上引レ墨」と見えたり。○おはしまさゞりけりとも云々　先方の人留守なりともいひ、若しくは物忌なりとの事にて、手紙を取入れずなど、使のいひて、手紙を持歸りたりと也。物忌を見よ。「たる」の下、はを略けり。

又、かならずくべき人のもとに、車をやりて待つに、入りくる音すれば、さなりと、人々出でて見るに、車やどりに入りて、轅ほうとうちおろすを、「いかなるぞ」と問へば、「今日はおはしまさず」「渡り給はず」とて、牛のかぎりひき出でいぬる。又、家ゆすりてとりたる壻のこずなりぬる、いとすさまじ。さるべき人の宮仕するがりやりて、いつしかと思ふも、いとほいなし。ちごのめのとの、唯あからさまとていぬるを、もとむれば、とかくあそばし慰めて、「とくこ」といひやりたるに、「こよひはえ參るまじ」とて、返しおこせたる、すさまじきのみにもあらず　にくさわりなし。女などむかふる男、ましていかならむ。待つ人ある所に、夜すこし更けて、忍びやかに門をたゝけば、胸すこしつぶれて、人いだして問はするに、あらぬよしなき者の、名のりしてきたるこそ、すさまじといふ中にも、かへすゞ〳〵すさまじけれ。

いつて、牛ばかり曳いて出ていつたのは、興がない。又家中大騒ぎして取つた壻が、通つて來なくなつたのは、ひどく興の醒めたものである。然るべき身分の女で、宮仕するべき人の方へ、その壻を取られてしまつて、何時かその中には、彼方へまた通つて來るであらうと待ち思ふのも、至極本意ないことである。乳兒の乳母が「ほんの一寸の間」といつて、外出したのを、乳兒が顔に戀しがるので、どうかかうか慰めすかして、乳母の出先に使をやつて「早く歸つて來い」といつてやると「今夜はよう參られません」といつて、返事をよこしたのは、たゞにすさ

○必ずくべき人　契約などしたる人ならん。○車を遣りて　迎に車を遣りてと也。○入りくる音　車の門を入來る音なり。○さなゝりと云々　「さなゝり」はさにあるなりの約にて、迎にやりし客のきたるをさす。「人々」は奉公せる女房達なり。○車やどり　車を入れ置く所、中門の外にあり。（附圖參照）○轅　ほうとうちおろすを　轅は長柄の義にて、牛車の牛をつくる長き曳手のこと。「ほうと」は擬聲なり。トントといふに同じ。「うちおろす」は牛外したる轅を、下に置くをいふ。「うち」は接頭語。○いかなるぞと　車を直に車舍に入れたるを、いぶかり問ふ詞なり。○今日はおはしまさず云々　迎に行きし使の答なり。「おはしまさず」は先方の人、家におはしまさずの略にて、留守なりしをいふ。「渡り給はず」は先方の人、此方へ渡り給はずの略にて、差支ありて來ぬをいふ。○牛のかぎりひき出でいぬる　「牛のかぎり」は牛ばかりの意。車は車舍におきて、牛のみ牛小屋へ連れ去るなり。「いぬる」の下、はいとすさまじを略けり。○家ゆすりて　一家大騒しての意にて、盛んに晴々しき樣なり。動き立つを搖るといふ。○來ずなりぬる　志絶えて通はずなるをいふ。「ぬる」の下、はを略けり。當時の風俗、女は親の家にありて、夫の通ひ來るを待つ習慣なれば、結婚して若し男の心に染まぬ節あれば、終に來ずなる也。壻取の事、江家次第二十に詳しく出でたり。なほ第三段、十五日の條の評語の末節を見よ。○さるべき人の宮仕するがりやりて　然るべき身分の女の禁中奉公する許へ、かの壻を遣りてと也。壻を彼方に取られしを、「遣りて」と反對にいふは、その頃の通語なり。「宮仕するがり」は宮仕する人がり也。「がり」はがありの約にて、許にの意なり。或說に「壻に棄てられたる娘を、宮仕する人の許に遣りて、何時かまた仕合せあれかしと思ふ」といへるは、こゝの文脈にてはいかゞ。加納諸平が「この句以下別段にて、脫文あらん」といへるも從ひ難し。○いつしかと思ふも　何時かその内には、かの宮仕の女房の方には飽きて、復此方へ通ひ來ることもやあらんと、家人の待ち思ふも、不本意のことゝ也。「いつしか」は何時かにて、

早晩の意にあらず。「し」は强辭。「ほい」は本意の略。○ちごのめのと　乳兒の乳母がとなり。「めのと」は妻の妹の義にて、和訓栞に「神代記に見えたる、玉依姫が姉の豐玉姫の生みし兒を養育せし故事に起る」とあり。○あからさまとて　あからさまの事なりとての略。「あからさま」は一寸、又は假初の意。○もとむれば　乳兒の乳母を搜し求むればと也。○とかくあそばし慰めて　何かと側の人々が、乳兒を遊ばし慰めてと也。○とくことといひやりたるに　疾くかへり來よと、乳母の出先に、使を以ていひやりたるにと也。○こよひはえ參るまじ　乳母の詞なり。今夜はとても參りかぬると也。○返しおこせたる返事をよこしたるはと也。「たる」の下、はを略けり。○女などむかふる男云々　乳母を呼びにやりて來ぬだに、かく憎く覺ゆるに、まして思ふ女を、迎に遣る時の男の心は、如何なる心地すらんと也。○待つ人ある所に　わが待つ人ある折にと也。○胸すこしつぶれて　胸の潰るゝは、胸のドキドキするをいふ。胸の上、その人にはあらじかとを補ひて聞くべし。○人いだして問はするに　人を門まで出して、誰かと問はするにと也。○あらぬよしなき者　「あらぬ」はその待つ人にはあらぬ也。「よしなき者」は、俗の用デモナイ者といふに當る。何の由緣もなき者をいふ。○名のり　實名をいふこと。卽ち名を告る義。○すさまじといふ中にも云々　腹立たしきまでに感じたる趣なり。

げんざのものゝけてうずとて、いみじうしたり顏に、獨鈷や珠數などもたせて、せみ聲にしぼりいだし讀みゐたれど、いさゝかさり氣もなく、護法もつかねば、あつまりて念じ居たる男も女もあやしと思ふに、時のかはるまで讀みこうじて、驗者「更につかず。たちね」とて、珠數とりかへして、あれと、「驗なしや」とうちいひて、額よりかみざまに、かしらさぐりあげて、あくびをおのれうちして、よりふしぬる。

（異考）○げんざ　原本げんじやとあり。一本による。○あつまりて　原本集めてとあり。一本による。○念じゐたるの下、原本に文字あり。別本による。

釋　○てうず　調伏、及び打ちてうずを見よ。○したり顏　出かし顏、得意顏なり。「したり」は、俗にシテヤツタといふに當る。○獨鈷　トコ。濁りて讀むべからず。僧侶修法の具にして、多くは眞言宗に用ゐる金剛杵のこと。もと印度の武器なり。菩提心を表して、この杵を持せざれば、佛道成就しがたしといふ。長さ通例七八寸、銅鐵などにて作り、その兩尖の獨頭なるを獨鈷といひ、三股なるを三鈷と稱し、五股なるを五鈷といふ。○珠數　ズズ。佛號經咒を課して、その數を計る具なりとぞ。○もたせて　よりましに持たせてと也。よりましは寄咒、憑子、神子など書く。よりまし、及び物のけ調伏のことは、物のけ、及び調ずるを見よ。○せみ聲にしぼりいだし讀み居たれど　陀羅尼、神咒などを、驗者の一心不亂に讀みて、祈禱したる樣なり。「せみ聲」は迫聲の轉なるべし。迫出したる苦しげなる聲をいふ。鈴木弘恭の、迫り聲の約といへるはいまだし。「しぼり出す」は聲を强ひて出すなり。「讀み居たれど」は經文神咒など讀居たれどと也。○さり氣もなく　物怪の病者より去氣もなくと也。「さり氣」は退散する樣子なり。○護法もつかねば　物怪のよりましに憑かぬをいふ。「護法」とは、護法童子の略にて、佛法守護の爲に、驗者に使役せらるゝ童形の鬼神なり。護法の力により物怪、寄咒に乘移れば、それに調伏の法を行ふ、その驗あれば、寄咒は慄ひ出し、その本體或は祟の因緣を口走り、正氣を失ふ。○あつまりて念じゐたる　病者の枕邊に集りて、共々祈念しゐたると也。○男も女も云々　「男も女も」は一家の男女なり。「怪しと思ふ」は祈禱の驗なきを、不思議に思ふなり。○時のかはるまで讀みこうじて　時の移るまで讀み疲れてと也。當時の一時は今の二時間に當る。「讀み」は經文神咒を讀むこと。「こうじて」は困じての字音便。○更につかずたちね　修驗者の寄咒に向つていふ詞。「つかず」は物怪の寄咒に乘移らぬをいひてゐたけれど、少しも物怪退散の樣子もなく、護法神も寄咒に乘移らぬから、そこに集つて祈念してゐた、病者のゆかりの男も女も、不思議なと思ふに、一時が二時になるまで讀み疲れて、「一向に護法がつかない。あつちへ往け」と、寄咒にいつて、持たせた珠數など取返して、驗者自身と「驗が無いわい」といつて、額から上の方へ、頭を撫で上げて、大欠伸を自分からして、物に凭りかゝつて、寢たのは、誠にあさましく興がさめる。」

ふ。「たちね」は寄兇に、座を起てと命令する也。○取り返して　寄兇より取返してと也。○あれと我からとなり。「あれ」はわれの古言。○驗なしや　「や」は歎辭。○額よりかみざまに云々　驗者の手持なき態度なり。額の所に手を當てゝ、頭の方へ撫で上げてと也。○あくびをおのれうちして　おのれ欠打してといふに同じ。側なる人々こそ、長時間祈禱の效なきに、欠をもすべきを、肝腎の祈禱者自身が欠をしてと罵れる也。「打して」は動作にあらはすをいふ語にて、時雨するを時雨打してなどいへり。○寄りふしぬる　物に寄添ひて寢たるはと也。柱又は脇息などにもたれ掛りて臥したるをいふ。效なき祈禱に疲れ切りたるさま也。「ふしぬる」の下、あさましくすさまじを略けり。

除目につかさ得ぬ人の家。ことしはかならずと聞きて、はやうありし者どもの、ほか〳〵なりつる、かた田舍にすむ者どもなど、皆あつまりきて、いでいる車の轅もひまなく見え、物まうでする供にも、我も〳〵と參りつかうまつり、物くひ酒飲みのゝしりあへるに、はつる曉まで、門たゝく音もせず。怪しなど耳立てゝ聞けば、さきおふ聲して、上達部など、皆出で給ふ。ものきゝに、よひより寒がりわなゝき居りつるげすをのこなど、いと物憂げにあゆみくるを、をる者どもは、問ひだにもえ問はず。とよりきたる者どもなどぞ、「殿は何にかならせ給へる」など問ふ。いらへには「何の前司にこそは」と、必ずいらふる。まことに賴みける者は、いみじうなげかしと思ひたり。つとめてになりて、ひまなく居りつる者も、やう〳〵一人二人づつ、すべり出でぬ。ふるき者の、さもえゆき離るまじきは、來年の國々を、手を折りて數へなを爭つて參つて勸めぶりなし、前祝にと物食ひ酒飲みなどして、騷ぎあうてゐたのに、除目の果てる三日目の曉まで、任官の通知の使の門を叩く音もしない。變なことであるなどと、聞耳を立てゝ門前の物音をきけば、先拂の警蹕の聲が頻にして、お掛りの公卿達も皆御退出になつた。樣子をきゝに御所へ出掛けて、宵から曉まで寒さに慄へてゐた下男などが、ひどく大儀さうに歸つて來るのを見て、もとからの奉公人は、形勢の宜しくないのを察して、尋れることすらよう出來ないで、默つてゐる。外から集つて來た者などが、「殿樣は何國の守におなりなされたか」などと聞

（口譯）縣召の除目に任官しない人の家は、すさまじい。今年はきつと任官になるだらうと聞付けて、以前この家に奉公してゐた者などで、今は片田舍に暮してゐる者や、もしくはよそ外に離散した者なども、皆この舊主人の家に集つて來て、一門知友などの出入する車の轅も、隙間もないほど澤山見え、主人が祈願の爲に、社寺に參詣するお供にも、我も〳〵と先

どして、ゆるぎありきたるも、いみじういとほしう、すさまじげなり。

（考異）○必ずいらふる　原本必ずいひふるとあり。一本による。

（釋）○除目に　縣召の除目なり。除目を見よ。○つかさえぬ　役付かぬと也。「つかさ」は官職をいふ。○人の家　下に、すさまじきもの也を略けり。○今年はかならずと聞きて　今年は必ず任官せらるべしともとの從者の聞きてと也。○はやうありし者ども　以前仕へてありし者共なり。○ほか〳〵なりつる　既にこの家を去りて、他人らしくなれるをいふ。「なりつる」の下、者或はを略けり。○あつまりきて　舊主人の家に集り來てと也。○いで入る車　この車は一門知友などの、前祝に訪ひくる車なり。諸註精しからず。○轅もひまなく見え　車の數多立ち竝べるさま也。○物まうでする　任官を望みて、その祈願の爲に、主人の社寺に參詣する也。○われも〳〵と云々　何がな主人の氣に入らんと、追從するさま也。かく追從するは、主人が國司とならば、その下役に用ゐられんの下心ある故なり。○物くひ酒のみ云々前祝に酒食して、愉快氣に騷ぎあへると也。「あへる」はあひてあるの約にて、多人數のさま也。○はつる曉まで　除目の儀式の果つる曉までと也。縣召の除目は、正月九日より始り、三日間行はること、既にいへり。されば、この「曉」は三日目の曉なり。○門たゝく音もせず　使の來て、門を叩く音もせずと也。任官せらるゝ時は、その本人の許に、通知の使を出ししものと見えたり。○怪しなど耳立てゝ聞けば　「怪しなど」の下、いひてを略けり。「怪し」は今に通知のなきを怪むなり。「耳立てゝ」は特に注意して、物音を聞くさま也。○さきおふ聲して　前驅の警蹕する聲してと也。然るべき身分の人の出入には、必ず隨身警蹕して、非常をいましむる也。○上達部など皆出で給ふ　除目の儀全く終りて、公卿達も皆退出すると也。○物きゝによひより云々　樣子聞きに官廳に出掛けて、宵より曉まで寒がりて慄ひ居たる下衆男が、わが主人の任國の沙汰もなくして、除目の果てたるに、力を落して、大儀らしく歩

く。その場合、下男の返辭には「何國の前司でおありなされる」などと、きつと答へる。眞實この主人を頼にしてゐた者は、非常に歎かはしいと思つてゐる。整朝になつて、身動もならない程詰めかけてゐた者共も、だんだん一人減り二人減りして、こそ〳〵退散してしまつた。ふるく奉公してゐる者で、外から來た人達のやうに、さうも見すてゝ行かれもしない者共は、來年國守の嗣ける國々を指折り數へなどして、うそうそこら邊を歩き廻つてゐるのも、非常に氣の毒で、すさまじげである。

（口譯）かなりよく出來たと

みくるをと也。「物き、に」の下、官廳に往きてを略けり。「くるを」の下、見てを補ひて聞くべし。「よひ」は古くは夜と同意に用ゐらるゝが常なれど、こゝは曉に對したる爲、いはゆる宵の口の意になれり。「もの、けい」は懶の字の義にて、俗の大儀ソウニ、不性ラシクにあたる。○をる者ども　現にその家に奉公して居る者共なり。○問ひだにもえ問ず　問ふことサヘモ、氣の毒にて問得ずと也。「問ひだにも」の上、それとさとりてを略けり。○とより來たる者どもなとぞ　この頃餘所より集り來れる、元の從者などをいふ。これらは利己一方の者なれば、何の遠慮もなく、その實否を問ひ質すなり。「ぞ」の辭、有意味なり。注意すべし。○殿　もと貴人の家屋の稱なりしを、轉じて直に貴人の尊稱に用ゐたり。國司なども、その從者よりは、殿と稱する也。○いらへには何の前司にこそはと　「いらへには」はかかゝる場合の答にはと也。「前司」はゼンジとよむ。前の國司の義にて、もとの任國果てゝ、その後他の國を受領せぬ間の稱なり。前の守といふに同じ。もとの任國三河ならば、三河の前司にこそと答ふる也。こは使の下男の、主人の任官なき由を、まともにいひ兼ねて、以前よりの稱呼を以て答ふる也。「こそは」の下、待れを略けり。○まことに頼みける者は　眞實この主人を頼にしたる者はと也。外よりきたる者どもに對していふ。○すべり出で　竊に退散するさま也。○ふるき者　年ひさしくこの主人に奉公したる者。○さもえゆき離るまじきは　「さも」は彼の餘所より來て、又すべり出でて歸る者共をさす。「えゆき離るまじ」はこの主人を見捨てゝ、他へ離れ行きえぬをいふ。「まじき」の下、者を略けり。○來年の國々を云々　今年こそ主人は任にはづれたれ、來年は是非と、來年滿期にて國司の交迭すべき國々を指折り數へて、今より待つと也。○ゆるぎありきたるも　來年の事など考へつゝ、ウソ〳〵と歩き居るもと也。落着かぬさまをいふ。○いとほし　濬臣いふ「勞しの轉にて、氣の毒なるをいふ」。

よろしう詠みたりとおもふ歌を、人のもとに遣りたるに、返しせぬ。けさう文はい

思ふ歌を、人の許へ贈つたのに、返歌をくれぬのは、興の醒めるものである。艶書は必ず返事をするものときまつてゐないから、なくても仕方がない。それすら折柄の景趣を感じたなどいふ返事だけもしないのは、愛想がつかされる。また人出入が繁く、時めいてゐる人の處へ、世に後れた年寄が、自分が用がなくて暇であるまゝに、古めいた何の取得もない歌を詠んでよこしたのは、すさまじい。祭とか儀式とか、何か事のある時にもつ扇を、大切なものだと思つて、その方に心得があると思つてゐる人に、趣向するやうに誂へて置いたのに、當日になつて、意外に拙い繪などを描

かがはせむ。それだに、をりをかしうなどある、返事せぬは心おとりす。又さわがしう時めかしき處に、うちふるめきたる人の、おのがつれ〴〵といとまあるまゝに、昔おぼえて、ことなる事なき歌よみしておこせたる。何のをりの扇、いみじと思ひて、心ありと知りたる人にいひつけたるに、その日になりて、思はずなる繪などかきてえたる。うぶやしなひ、馬のはなむけなどの使に、祿などとらせぬ。はかなき藥玉、卯槌などもてありく者などにも、なほ必ずとらすべし。思ひかけぬことにえたるをば、いと興ありと思ふべし。これはさるべき使ぞと、心ときめきしてきたるに、たゞなるは、まことにすさまじきぞかし。

（釋）○よろしう　俗のカナリニの意にて、全く佳しといふにあらず。六七分目よきをいふ。○返し　返歌なり。「せぬ」の下、すさまじを略けり。○けさう文はいかゞはせむ　艶書の返しせぬは、その人の心に染まぬ故なれば、いかゞせん、すさまじともいひ難しと也。「けさう」は懸想の字音便にて、人に念を懸ること。「懸想文」は、その趣を述べたる文にて、即ち艶書なり。○折をかしうなどある云々　艶書を得たる折柄の景氣のあはれさを、思ひしみたりなどいふ返事をせぬはと也。「などある」の下、一本、に文字あり。これによれば、折柄のあはれなるに返事せぬはと解くべし。○心おとりす　心の見劣すとなり。折柄のあはれも看すぐして返事せぬごとき、情趣をわきまへぬ心には、愛想の盡かさるゝ也。○さわがしう時めかしき所　「騷がしう」は人出入繁くて、落著かぬさまをいふ。「時めかしき」は時めくと同語にて、時世にあひて榮ゆるをいふ。○うちふるめきたる人　古ぼけたる人なり。時世におくれたる

いてよこしたのは、すさまじい。産養、餞別などの使に來た者に、纒頭を出さぬのは、すさまじい。藥玉や卯槌などの、一寸した贈物を持つてくる使などにも、纒頭はやはりきつと奥れるがよい。思ひがけない事で纒頭を貰つたのをば、甚だ興があると思ふであらう。この反對に、これは物々しい御用のお使ぞ、きつと貰へると豫期して、何を奥れるかと胸をドキつかせて來たのに、何もくれないのは、本當にすさまじい事ぞよ。

老人をいふ。○つれ〴〵といとまある　閑散にして、徒然なるをいふ。○昔おぼえて云々　古風の見えて、格別なる事もなき歌を詠みておこせたるは、何の興味もなしと也。「歌よみして」は歌詠むを名詞にして「して」と續けたる也。「おこせたる」の下、すさまじを略けり。○物のをりの扇　事のある折の扇なり。祭とか節會とか、儀式など、晴がましき折に持つべき扇をいふ。抄に「祝儀の贈物、旅行の餞別などにする扇也」といへるも、亦よし。○扇　扇はもと、倭漢ともに團扇なりしを、今の扇は、我が邦にて造れるなりといふ。奈良時代には、勅許なくて、御前に扇を持つは禁制なりしが、この頃は大抵男子は檜扇、かはほり、女は袒扇を持ちたりき。袒扇は、袒姿して持つよりの名なり。檜の薄板三十九枚を、色々の絲にて綴ぢ、餘をあわび結にするなり。貞丈雜記に「檜の板を薄葉にて厚く張り、箔を置き、繪を書く」といへり。當時女房の裝束に、扇は最も重んぜられたるものにて、祭などに持つ扇は、名ある繪師に書かせなどすること、物語文などに見えたり。○いみじと思ひて　大切なる物と思ひてと也。○心ありと知りたる人に云々　氣の利きたる人と知りたる人に、扇の繪を描くべく誂へたるに也。○その日になりて　「その日」は扇の入用なる當日なり。○思はずなる繪　意外につまらぬ繪なり。○かきて得たる　描イテ貰ツタの意。「かきて」と「得たる」と自他は違へど、口語などに、常にいふこと也。「得たる」の下、くちをしくすさまじを略けり。○うぶやしなひ　産養なり。出産後三日目、五日目、七日目に、その親類眷族より、産婦の衣裳、嬰兒の襁褓、及び屯食。椀飯などを、産屋に贈れば、産婦の家にては、これ等の人々を招きて、祝宴を開くをいふ。○馬のはなむけ　餞別なり。昔は旅行に、多く馬を用ゐたりし故に、見送人は、旅行者の馬の鼻を、その行くべき方向に向けて、別を告げ、道中の安全ならんことを祝したるが本にて、後には食物火袋など、物を贈ることをいひ、所謂餞別の意となれり。○祿　ロク。被物ともいふ。歌舞、遊宴、佛事、その他臨時の用事などに、當座の報酬、卽ち纒頭として與ふる貨財物品をいふ。元は衣服を肩に被け與へたりし故に名づく。○とらせぬ　の下、すさまじを略けり。○はかなき　雅語譯解に何デモナイ、一寸シタと譯せり。しかとしたることのなきをいふ。○藥玉　クスダマ。麝香、沈香等の藥を玉にして、錦の袋に入れ、絲にて飾り、菖蒲、艾等を結び、五色の絲の、長さ八尺、或は一丈もあるを結び下げたる物。支那にては續命縷、長命縷、彩絲などいへり。仁明天皇の嘉祥二年五月の詔に「五月五日ニ、藥玉ヲ佩ビテ、酒ヲ飲ム人ハ、命長ク福クアリトナモ聞召ス。故コノ藥玉賜ビ、御酒賜ハクト宣」と見えて、これを臂に懸け、腰に佩び、柱、簾等に懸くれば、邪氣を避け、不淨を拂ふとぞ。西宮記に「五月五日、絲所藥玉二流、藏人取ル之、晝御座母屋結ニ付南北柱ニ」と見えて、禁中にては、絲所より調進したる也。○卯槌　ウヅチ。正月初、卯の日、これを持てば、邪氣を追ふとて、絲所より内裏に奉り、晝の御帳の西南の角の柱に懸けられ、臣下の家にも贈らる。こは漢代の剛卯を摸せしものなりとぞ。桃の木を長さ三寸、廣さ一寸に造る。五色の組絲を、長さ五尺ばかりに、十筋か十五筋垂る。○必ず取らすべし　必ず祿を取らすべしと也。○思ひがけぬことに云々　祿あらんとも思ひかけぬ事にて得たるをばと也。○思ふべし　使の思ふべしと也。○さるべき使ぞと　「さるべき使」は物々しき御用の使なり。「使」の下、なるを略けり。「使ぞ」の下に、必ず祿あるべしを補ひて聞くべし。「と」はとての意。○心ときめきしてきたるに　使の心中に、祿あるべきことを豫期して、胸を跳らせて、如何なる物の出づるならんと、樂みにして來るにと也。○たゞなるは　祿も何も出ぬなり。「たゞ」は徒なるをいふ。

藥玉

卯槌

（口譯）
壻を取つて四五年になるまで、産屋の騒をしない所は、すさまじい。大人になつた子供が澤山あり、わるくすると孫でも這ひあるきさうな程の年配の、親同士が晝寢をしたのは、すさまじい。他人は勿論、そばにゐる子供の心にも、親が晝寢をしたのは、たよりないすさまじいものであらう。寢起に入浴するのは、すさまじいのは通り越して、腹立たしくさへ思はれる。十二月の晦日に、終日ふり暮した長雨は、すさまじい。たゞ一日の懈で、長日の精進を落ちると同樣といはれようか。八月に白がさねも、すさまじい。乳の出ぬやうになつた乳母も、すさまじいものでもある。

壻とりて、四五年まで、うぶ屋のさわぎせぬ所。おとなゝる子どもあまたようせずば、うまごなども這ひありきぬべき人の親どちの晝寢したる。傍なる子どもの心ちにも、親の晝寢したるは、よりどころなく、すさまじくぞあるべき。寢起きてあぶる湯は、腹だたしくさへこそ覺ゆれ。しはすのつごもりのなが雨。ひとひばかりの精進のげたいとやいふべからむ。八月のしらがさね。乳あへずなりぬる乳母。

（考異）○あるべき　原本ありしとあり。一本による。

釋　○うぶ屋のさわぎせぬ所　産所の騒は出産なり。所の下、すさまじを略けり。○子供あまた　「數多」の下　ありてを略けり。○ようせずば　よく爲ずばにて、俗のワルクスルトに當る。○うまご　生子の義にて、孫なり。○人の親どちの　「人の親」は、汎く世間一般の親をいふにて、誰の親とさゝぬ也。「どち」は萬葉集に、共の字を訓めり。俗にドウシといふに同じ。○晝寢したる　の下、すさまじを略けり。○傍なる子どもの心ちにも　他人の目に見苦しきは勿論なる意を籠めたり。○あるべき　原本ありしとあるに據れば、清少實驗の語となる。それにても意は通ずれど、事實より推せば違ふべし。さるは、清少の父元輔は、一條帝の正暦元年に、八十三歳にて歿せり。清少はその五十三四の頃の子なれば、その生心付きて、兩親の晝寢を凄じく思はん頃は、元輔の年配六十五六なるべし。六十五六にては、本文「ようせずは孫などありぬべき」とある、「ようせずば」の語、無意味に了るべし。○よりどころなく　便り所なきなり。途方にくるゝをいふ。○寢起きてあぶる湯　わが寢起に湯浴するをいふ。或說に、兩親の寢起きて湯を浴ぶるを憎むなりといへるは誣ひたり。「寢起きて」より獨立したる句なり。○腹立たしくさへ　すさまじきのみならず、腹立たしくさへと也。○しはすのつごもりの長雨　「しはす」は十二月の異名にて、歲梅の義とぞ。「つごもり」は、こゝにては狹義にて、晦日をいふ。「長雨」は終日ふり暮したる雨をいふ。「長雨」の下、はすさまじを略けり。○一日ばかりのさうじんのけたい　「さうじん」は精進なり。解既出。「けたい」は懈怠の字音にて、怠ること。意は今一日といふ日に至りて懈りては、これまで勤め來りし千日百日の精進も、無效となると也。一年の終に、今一日となりて、長雨の降るを、それに比して、口惜しくすさまじといへる也。この句、一本に「一日ばかりのさうじん」とありて、次段のたゆまるゝものゝ段に入れるは、從ひ難し。眞賴が、この句、外より紛れ來れるなれば削るべしといへるも、いかゞあらん。○八月　ハツキと訓む。葉月の意にて、草木の黃葉に及ぶをいふ。○白がさね　下襲の白きなり。地質は綾もあり、平絹もあり、打ちもし、張りもして著る。四月と十月との更衣の外は、夏時のみ之を用ゐる。雅亮裝束抄に「十月の更衣に、白重著るは菊の意か、或は霜露の色か」といへり。されば、八月は秋なれば、季節外れにて、すさまじき也。「白がさね」の下、すさまじを略けり。○乳あへずなりぬるめのと　乳の出ずなれる乳母なり。「あへず」は出敢へずの略かとも思へど、恐らくは假名違にて、あえずなるべし。あえは滲み出す意なり。なほ汗あゆるを見よ。「めのと」の下、すさまじを略けり。眞賴の、「八月の白重、乳あへずなりぬる乳母」の二句は、この段の初なる「三四月の紅梅の衣」の次に入るべしといへるは、さもと覺ゆ。

評　物は盡しは、量において、この草子の三分の一を占めてゐるばかりではない。その鋭敏な觀察、その犀利な用筆、その奇警な批評と相俟つて、この草子を代表してゐる文字である。

今こゝに竝べあげた細目を見わたすと、悉くその實生活にもとづいた感想である。これはこの種の題目が、つまり空想的文字を著けることを許さぬにも因るのである。この草子の藍本といはれてる義山雜纂で見てもさうである。また氣にくはぬものは、用捨なくきめ付ける、清少一流の辛辣な筆鋒は、その性

格の露出であるには違ないが、雜纂の殺風景の文が、譏刺の語で終始してゐるやうに、かうした傾向をもちやすい題目では、勢ひ免れがたい結果といはねばならぬ。さればこの文によつて、たゞちに清少を、醜をいとひ美をもとめてやまぬ、所謂耽美者と祭り上げるのは、すこし早からうと思ふ。そも〳〵この藤原時代の思潮は、全く感情本位で、政治に、文學に、美術に、美醜兩方面をかけて、その發露の迹が見える。本文の文字も、清少によつて箇人化された、時代思潮の一斑に過ぎない。

この文、甚だ脈絡がない。想の寄つてくるまゝに、筆にまかせて揮灑したのであらう。そこに作者の面目が躍如としてゐる。晝吠ゆる犬、春の網代、三四月の紅梅の衣、八月の白襲、火おこさぬ火桶、炭櫃の類は、王充の論衡に「猶如以夏進爐、以冬奏扇、亦徒耳」とあるに、ヒントを得たのではあるまいか。清少がそれほど、漢學をやつてゐないとしても、夏爐冬扇は、著名な成句であるから、當時の有識社會には、口劇されてゐたものであらう。

衣裳、出產、產養、嬰兒、乳母、壻取、待人、餘所ゆきの扇などの類、みな婦人に直接關係のある事件であり、物件である。祿を取らせる條の藥玉、夘槌も、その飾絲を附けるからしてが、婦人の仕事である。うち古めいた人の歌をよこすのも、女同志のことである。公給の祿は別として、臨時の祿、卽ち被物にも、慣習上、一定の不文律があつたやうであるが、たまには然るべき使にも出さぬ人があつたのであらう。家庭では、是非妻女の取まかふべき仕事であるから、自儘者の清少も、割合に人情の機微に觸れた意見をもつてゐる。

返歌せぬは、一體失禮である。丁度今日はと、挨拶の詞をかけられても、一向知らぬ顏してゐるのと同じ譯合のものである。ましてよく詠んだと思ふ歌には、いよ〳〵この感じが深からう。懸想文は相手の意思次第のものであるが、興をそらさぬ一言ぐらゐはほしいといふのは、この時代の所謂折過ぐさぬ理想から出た詞である。

田舍に文通の條、「世にある事を聞けばよし」など、わがまゝ勝手な文句は、清少自身の人格を、露骨にあらはしてゐる。最早かうなつては、批評者の立場を離れてしまつたものである。されば、次の條の文使も、迎車も、清少の實驗なのであらう。叙事が精細で、まことにおもしろく、行屆いて書かれてある。乳母の外出も、清少は一人の女の子があつたさうだから、その乳母をおいた時の實驗かも知れない。筆鋒の深刻なのも、痛切にその憎さを感じたからであらう。待人の條もおなじことで、惡客不レ請自來が憎いばかりか、あひゞきの邪魔にもなる故、返す〳〵も不興なのである。

「親どもの晝寢」は、只の晝寢である。年寄の癖に、しだらもなく寢た樣の、不似合に醜いのを、すさまじく思つたのみである。下文、見苦しきものの段にも、

髮がちに瘦せ〳〵なる男の晝寢したる、何の見るかひに、臥したるにかあらむ。

よるなどは、形も見えず、又

おしなべて、さる事となりたれば、我はにくげなりとて、起居るべきにあらずかし。

とあるのは、この證文である。紫式部日記に、辨宰相の君が晝寢したのを、

顏は引入れて、硯の箱に枕して臥し給へる顏付、いとらうたげに、なまめかし。繪にかきたる物の姫君の心ちすれば、口おほひを引遣りて、――すこし起あがり給へる顏のうち赤み給へるなど、こまかにをかしうこそ侍りしか。大方もよき人の、折柄に、又なくまさる樂なりけり。

とあるのは、これを旁證してゐるではないか。寢起の湯は、格別朝寢をした折か、轉寢のあけ句の、寢惚けながらの湯浴であらう。それを「親どもの晝寢」を、同衾したるものと解して、寢起の湯を、そのあとの入湯と推定した說などは、無稽もまた甚しい。博士の子が又しても女では、學問世襲時代には、えらい打擊であつたらう。「一日ばかりの精進の懈怠」は百日の說法屁ひとつの類で、おそらく當時、そ

んな諺のあつたのを應用したのだらう。

物の怪の條、寄兇のさまは、下文に、

「大きやかなる童の、髮うるはしき――袴長く著なして、――獨鈷を執らせて、――ふるひ出ぬれば、

とあるのを、これに引合はせると、大抵想像がつく。懍ひ出したのは、護法が乘うつつた證據で、それから病人に憑いた物怪が、寄兇の口から、いろ〳〵なことを口走つて、落ちるのである。「額より上ざまに」の寫生の一句、その手持不沙汰なさまが、あり〳〵と見える。

受領の除目は、この段中の名文である。叙事整然として、登場人物の活躍してゐることは、殆ど一場の演劇を見るやうである。實際の經驗がなくては、とてもかう精細に、しかも切實に描き得られる譯のものでない。清少は、世々受領宿世の家にうまれた女である。祖春光は下總守にをはり、父元輔は、河内椽から、周防肥後の國司を歴任した。されば幼少から、縣召の葛藤を解し、消息に通じてゐたのである。

司賜らで、又の日、左近藏人の許に遣しける

年ごとにたえぬ涙やつもりつゝいとゞ深くは身をしづむらむ

年頃、司も賜はらぬに、子の日しに人のゐて出で、退りたりしに

谷ふかく沈むたとひにひかされて老いぬる松は人も手ふれず

司召の後に、さぶらひし内侍の許に、

こゝろあてにたよりもあらば傳へなむさかでつゆけき櫻ありきと

これらはみな元輔の歌である。縣召の度ごとに、なるかならぬかと氣を揉んで、その度ごとに失望にをはり勝な受領宿世は、氣の毒なやうなものであるが、そのかはり旨く任官すれば、大したもので、溫官、膏腴の官など稱せられて、ひどくまうかる役柄であつた。だからまた、それをあてに取卷いてゐる有象無象も、澤山あつたのである。

とよりきたる者、まことに賴みける者、ふるき者を對照として、炎涼によつて忽に變つてゆく人情を描寫して、筆々骨を刺す感じがする。「何の前司にこそは」の語、悲痛で讀むに堪へない。「手を折りて來年の國々をかぞふる」も、氣の毒なあまりの所作で、かうして主人の心を慰めるのであらうかと思ふと、その心根がいぢらしくて、涙がこぼれる。

さて物は盡しに就いて、茲に一考を要することが出來た。それは外でもない。これが清少の創案であるかどうかといふ事である。勿論この草子より以前には、その類例が見當らないが、和泉式部集に、

世の中にあらまほしきこと。

人に定めさせまほしきこと。

あやしきこと。

あはれなること、

くるしきこと。

の題目のもとに、十八首の歌が詠みつらねられてある。歌と文との相違こそあれ、形式は全く一つである。年配からいへば、式部の方が年下であるから、清少のを見て眞似たともいはれるが、思ふに當時、或題目を設けて、事實なり感想なりを、類聚的に發表することが、流行つたのではあるまいか。無論それは、義山雜纂のもてはやされた影響と見るより外はない。とすると、あながち清少の創案とはいはれぬことになる。

（口譯）心がゆるんで、自然に怠られるもの　そ

二十二段

たゆまるゝもの　さうじの日のおこなひ。日遠きいそぎ。寺に久しくこもりたる。

れはたゞ一日だけの精進、精進日の勤行、十分餘日のある準備などである。寺に久しく籠つたのも、たゆまれるものである。

（口譯）人に馬鹿にされるもの　それは家の陰の間、あまりお心よしと人に知られた人、年をほんとに取つた翁、又うはすつた女、土塀の崩れたのなどである。

釋 ○たゆまる　心の垂弛む義にて、おのづから怠らるゝをいふ。○さうじの日のおこなひ　精進日の勤行なり。聊も怠るまじく思ふ心より、却りて退屈の生ずる也。「おこなひ」の下、たゆまるゝものなりを略けり。以下句の切れたる所、皆この語ありと知るべし。○日遠きいそぎ　當日までには、十分に日數のある支度は、自然心の弛むものなり。「いそぎ」は支度なり、準備なり。○寺に久しくこもりたる　當時は祈願物忌などの爲、俗人の數十日も寺社に籠る事ありき。

評 大切な一日ばかりの精進も退屈するほど、當時の人は、精進が常習的になつてゐたのである。さればこそ久しい寺籠となつては、退屈はその筈であらう。「日遠きいそぎ」は全く警句。

二十三段

人にあなづらるゝもの　家の北おもて。あまり心よきと、人に知られたる人。年老いたるおきな。又あはゝしき女。ついぢのくづれ。

釋 ○あなづらる、　輕蔑せらるゝ意。侮らるゝと同じ。○家の北おもて　南面は家の表にて、晴の所なれど、北面は裏なれば自然輕んじて、さまで繕はぬをいふ。岩崎美隆の説に「すべて物語文などに、北面といへるは、うち解けたる内々の所をいひ、南面といへるは、晴の方をいへる也。あながち方角に拘りていふにあらず」と。「北おもて」の下、はあなづらるゝものなりを略けり。以下句の切れたる所、皆この語を略けり。○心よきと　心よき人となり。○年老いたる翁　一とほりならず、年寄りたる老人なり。○あはゝしき女　心あさく浮きたる女なり。あはゝしうを見よ。○ついぢのくづれ　「ついぢ」は築土の略にて、土塀なり。土塀のくづれも繕はぬは、主人の無頓着か、勝手元の不如意かが推測られて侮らるゝ也。春註に、無用心なればといへるは非なり。

評 末代までも、動きのない適評である。「家の北おもて」に筆をおこし、「築地のくづれ」に筆をとめ、中間に人事を排列した篇法は、相變らず、うまいものである。

（口譯）憎いもの　急用ある時に、長話をする客は憎い。それが何でもない人なら「今はいそがしいから、あとでゆつくり聞かう」などといつて、追返してもやられるけれども、さすがに氣兼のいる客は、後にともいはれず、甚だ憎い。墨を磨るに、硯の中に髪の毛のはひつてすられたのは憎い。又墨の中に石がまじつてゐて、ぎしゝと音を立てて、硯にきしんだのは憎い。急に病人が出來た時に、祈禱の

二十四段（上）

にくきもの　いそぐ事あるをりに、ながごとするまらうど。あなづらはしき人ならば、「のちに」などいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。硯にかみの入りてすられたる。又墨の中に、石こもりて、きしゝときしみたる。俄にわづらふ人のあるに、驗者もとむるに、例ある所にはあらで、ほかにある尋ねありくほどに、待遠に久しきを、辛うじて待ちつけて、よろこびながら加持せさするに、このごろ物のけにこうじにけるにや、居るまゝにすなはちねぶり聲になりたる、いとにくし。なんでふことなき人の、すゞろにえがちに物いたういひたる。火桶すびつなどに、手のうらうちかへし、皺おしのべなどしてあぶり居るもの。いつかは若やかなる人などの、さはしたりし。老いばみうたてあるものこそ、火桶のはたに、足をさへもたげて、物いふまゝに、おしすりなどもすらめ。さやうのものは人のもとに來て、ゐむとする所を、まづ扇して、塵はらひすてゝ、居も定まらずひろ